久慈マサムネ
Kuji Masamune
イラスト◆Hisasi
メカデザイン◆黒銀
07
魔装学園H×H
ハイブリッド
ハート
Hybrid×Heart Magias Academy Ataraxia
角川スニーカー文庫

07
Ataraxia
魔装学園
Hybrid×Heart
Magias Academy
Ataraxia
H×H
ハイブリッド
ハート

ゼルティス帝国劇場―控え室―
「一体、どうしたのでしょう？」
「今日の公演は中止ね」

姉妹で連結改装（コネクティブ・ハイブリッド）ON!!
「ま、魔王様。どうぞ好きに飲むのじゃ」
「あたしの、飲んで……」

「――こやつ、どれほどの魔力を持っておるのじゃ？」
グレイス
パトランティス帝国皇帝。装甲は殺戮の天使"コロス"
「グレイス様には失望しました」
那由多
【なゆた】
傷無の母親。神として生まれかわった。

REIRI&KEI

魔装学園Ｈ×Ｈ７【電子特別版】

久慈マサムネ

角川スニーカー文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。
本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

contents

プロローグ
一章　新生アタラクシア
二章・信じるもののために
三章・虚無と死の対決
四章・新しき神
五章　神々の憂鬱
あとがき
電子特典イラスト

戦略防衛学園アタラクシア 生徒&教員名簿

No.1 KIZUNA HIDA

飛弾傷無［ひだ・きずな］

特殊能力・接続改装で女の子をパワーアップさせる力を持つ。

No.2 AINE CHIDORIGAFUCHI

千鳥ヶ淵愛音［ちどりがふち・あいね］

近接戦闘が得意な魔導装甲ゼロスの使い手。昔の記憶を失っている。

No.3 YURISHIA FARANDOLE

ユリシア・ファランドール

魔導装甲クロスを操る世界的なエース。遠距離からの攻撃が得意。

No.4 HAYURU HIMEKAWA

姫川ハユル［ひめかわ・はゆる］

ハレンチなことが苦手な女の子。中近両方の攻撃が可能な魔導装甲ネロスを操る。

No.5 REIRI HIDA

飛弾怜悧［ひだ・れいり］

厳しくも優しいアタラクシアの総司令官。

No.6 SYLVIA SILKCUT

シルヴィア・シルクカット

アタラクシア中等部に通う女の子。傷無を隊長と呼んで慕っている。

prologue
プロローグ

我らは何処から来たのか。
そしてこれから何処へ行くべきか。
長きにわたる旅路の果てに、我々は進化の究極へ至った。
完全なる存在であり、
完璧なる存在である。
これ以上何を望めば良いのだろう。
それが分からない。
全知全能であるはずの我々にも、分からないことがある。
すなわち、まだ進化の余地が残っているということだ。
しかし、どうすれば答えが見つかるのか。
この問題の鍵は我ら自身の中にある。
そもそも我らはどうやって生まれたのか。
どのような変遷を辿り、現在の形になったのか。
知っていることはある。
しかし、知らないことも多い。
残されたデータよりも、不必要として削除したデータの方が多いはず。
我々自身を知り、これからの我々を知るためには、過去の履歴が必要だ。
己の成り立ち。
既に失われたルーツが、我らの道しるべとなるだろう。

過去へ旅をするのは困難だ。
しかし過去を再現することは出来る。
だから世界を作り上げよう。
そして我らに知識を。
失われた、かつてあったはずの自分自身を知る術を。

一章 新生アタラクシア

Hybrid × Heart Magias Academy Ataraxia

「ね、ねえ傷無？　あの、やっぱりあたし……一緒に行かない方が良いんじゃ……」
自分の手を引いて歩いている傷無の背中に、愛音はか細い声を投げかけた。
「ん？　何でだ？」
傷無は不思議そうな顔で振り返った。
「だって、さっきまで敵対していたのよ？　そんな手の平を返したように、みんなのところへ戻るだなんて……少し、ほとぼりが冷めてから、とか」
足を止めることなく、傷無は愛音の手を引いて歩いて行く。
二人はイズガルドの旗艦の中を、艦橋に向かっているところだった。
愛音との戦いを制した傷無は、廃墟と化したアタラクシアから愛音を連れて脱出した。そして、アタラクシアを放棄した今、事実上の司令本部となったグラベルの専用艦へとやって来たのだった。
当初立てたゼルティスへの突入作戦は、既に影も形もない。全てが破綻した。
だが傷無の心は希望に燃えている。
——愛音が戻ってきてくれた。
失ったはずの大切な何かを、取り戻すことが出来た。取り返しの付かなかったはずのものを取り返した。その事実が希望とやる気になり、傷無の心を前へと押し出していた。
愛音が戻ってきてくれたことは、それだけでも十分嬉しい。だが戦力的にも、愛音がいるといないとでは大違いだ。取れる手段も、かなり広がるだろう。
——急いで姉ちゃんや識名さんに作戦を立ててもらって、仕切り直しだ。
「今は一刻を争うからな。創世の御柱が倒れたらアトランティスはお終いだ。それだけじゃない。もしかしたら、

俺たちの世界も一緒に滅んでしまうかも知れないんだ」
急に傷無の手が引っ張られる。振り向くと、愛音が立ち止まり、驚きのまなざしで傷無を見つめていた。
「……そ、そんな」
呆然とした愛音を勇気づけるように、傷無は肩に手を置いた。そして、落ち着いた声で話しかける。
「識名さんの話では、衝突面でつながっている以上、地球側にも何らかの影響があるらしい。ましてや、片方の世界が滅ぶほどの大きな現象となれば、もう一方の世界もただじゃ済まない。どの程度の影響かは分からないが、最悪の場合は……」
「そんな……地球も一緒に滅ぶっていうの？」
「その可能性が高い。だから愛音、辛いかも知れないが、今すぐにお前の力が必要なんだ」
愛音は覚悟を決めたようにうなずいた。
「世界が危機に瀕しているときに、あたしの恥なんて……ものの数ではないわね」
再び二人は手をつないで歩き出す。
「でも、みんなには恨まれているんでしょうね……」
「……愛音、でも——」
愛音は首を振った。
「ううん。そんなの当たり前ね。気にしないで。どんな仕打ちを受けても、それはあたしに責任のあることだから」
傷無はつないだ手に力を込めた。
「俺がついている。心配するな」
ちょっと驚いた後、愛音は幸せそうに顔をほころばせた。
「ありがとう。傷無……」
そうして二人は艦橋の前までやって来た。先程、愛音にああは言ったものの、傷無も正直不安だった。軽く深呼吸をして、愛音の様子を窺った。すると愛音も傷無を見つめている。お互いうなずき合うと、扉を開けた。
「飛弾傷無、千鳥ヶ淵愛音を連れて帰りました」
緊張感を孕んだ声が、だだっ広い艦橋に響き渡る。
忙しそうに働いていたイズガルドの兵士と、アタラクシアのスタッフの手が止まる。騒がしかった艦橋が、水を

打ったように静まり返った。
全員の視線が、傷無と愛音に注がれている。
イズガルドの兵士にとっては、あのバトランティス帝国の皇帝が突然現れたのだ。その緊張と恐怖は計り知れない。ほとんどの兵士が、硬直したように動けなくなった。
一方、アタラクシアのスタッフにとっては、かつての仲間であり、そして今は敵の頂点に君臨する存在である。どんな態度で対応すればいいものか、想像もつかなかった。ただただ、重苦しい沈黙が続いた。
金属のようにずしりと重い空気を、鋭い声が切り裂いた。
「遅いぞ傷無！　愛音！　どこで道草を食っていた！」
「ね……姉ちゃん」
腕を組んだ怜悧が、二人の目の前までやって来て、じろりと睨み付けた。
「あ、あの、総司令……あたしは」
「ケイ、この二人のハイブリッド・カウントは？」
怜悧の質問に、ケイは二人のステイタスを表示させた。
『傷無は20％。愛音は８％』
「なに？　それでは先程の輝きは何だったのだ？」
アタラクシアとナユタラボの全機能が停止していたので、戦闘中の詳しいデータは採取できていない。だが、傷無が愛音にキスしたときの輝きは、怜悧たちも確認していた。
「てっきり接続改装が起きたのかと思っていたが……調査をする必要がありそうだな」
『今はナユタラボの機材をこの戦艦へと積み込んでいるところ。完了したら、出来る限りのデータを集めて検討する。しかし今は傷無と愛音のハイブリッド・カウントの補給をさせた方が良い。出来れば絶頂改装で』
怜悧はうなずくと傷無に向かって怒鳴るように言った。
「聞いての通りだ。至急、絶頂改装をして来い！　ついでにシャワーでも浴びて、ボロボロの服を着替えてくるんだ。いいな！」
「あ、ああ。姉ちゃん、愛音のことは……いいのか？」
怜悧はふんと鼻を鳴らすと、くるりと背中を向けた。

「いまは一人でも多く戦力が欲しいのだ。細かいことはどうでも良い。言い訳なら全てが終わった後で聞く。だから、さっさと行け！　戻って来たら、即ブリーフィングだ！」

「イ、イエス、マム！　イエス！」

条件反射で傷無と愛音は敬礼をすると、逃げ出すように艦橋を出た。そして角を一つ曲がると、傷無は大きく息を吐いた。

「な？　大丈夫だったろ？」

「え、ええ……」

愛音は微妙な笑顔で答えた。

それにしても、怜悧が愛音を詰問することなく、まるで昔のように振る舞ってくれたことは、傷無にとっても嬉しいことだった。勿論、現実的に対処しなければならないことを優先させた結果ではあるが、それだけではない気もしていた。

「……姉ちゃん。気を遣ってくれたのかな？」

「そうかも……でも、相変わらず怖いわね」

苦笑いで傷無は答える。

「おいおい。仮にもバトランティスの皇帝が、うちの姉ちゃんを怖がるのか？」

「仕方ないじゃない」

愛音は頬をふくらませた。しかしすぐに顔をほころばせる。

「ふふっ」

「どうかしたのか？」

「だって、バトランティスの皇帝として敬われていたのが、一転ただの一兵卒扱いよ？　何だか可笑しくて」

「そう考えると、えらい転落だな。まあ、でも——」

この戦いが終われば、愛音は再びバトランティス帝国の皇帝に復帰するのだろうか。その時、俺と愛音との関係はどういったものになるのだろう？

急に押し黙った傷無に、愛音は心配そうに眉を寄せた。

「傷無、どうかしたの？」

「いや、何でも……ああ、そういやシャワールームの場所も知らないと思って」

「はぁ!?　どこに連れて行くつもりだったのよ！」

この後、久々に愛音の毒舌でさんざんになじられた後、傷無は通りすがりのイズガルドの兵士から、シャワールームの場所を聞き出した。何度か道を間違えた後で、やっと二人はシャワールームに辿り着いた。

ドアを開けると、中には誰もいない。傷無と愛音の貸し切り状態だった。

「へえ……結構、きれいなのね」

「ああ。いつ見ても戦艦の設備とは思えないな……」

どちらかといえば、超高級スポーツクラブと言われた方がしっくり来る。広々とした空間に、ガラスで仕切られたシャワールームが並んでいる。高い天井。床や壁は大理石に似た石で造られ、少し落とし気味の柔らかな間接照明が高級感を引き上げている。

ずらりと並んだ個室は、二十ほどはあるだろうか。どれも四方をガラスで囲まれ、どういうわけかお湯の出てくるシャワーヘッドが見当たらない。ただ給水栓らしきダイヤルが一つだけ付いている。どこに入ろうか迷ったが、誰もいないので特に気にする必要もない。列の中程のシャワールームに入った。

「とはいえ、ガラス張りだから丸見えなんだよな……まあ、誰もいないからいいけど」

愛音は溜息をついた。

「本当。アトランティスの文化は開放的すぎるのよ」

「そういえば、皇帝の衣装も凄かったな」

「見たの!?」

愛音の顔が一瞬で沸騰したように赤くなった。

「え？　ああ、バトランティスの放送を傍受した番組をイズガルドで……」

「いやあぁぁあああああああああっ！」

愛音が頭を抱えて、一人でじたばたと暴れた。

「忘れて！　今すぐ忘れなさい！　どうせ大した容量もない悪い頭なんだから、さっさと削除しなさいよ！　さもないとゼルに頼んで、その記憶抹消してやるわ！」

言葉の端々にバトランティス皇帝っぽさが交じってるな……と傷無は思った。それが今では微笑ましいが、やは

りパトランティス皇帝としてのアイネスと、天地穹女神の愛音は矛盾するものではなく、一人の人間なんだということも再認識させられた気がした。そして愛音の口の悪さも、元がお姫様だと思えば、それはそれで納得出来た。

まくし立てる愛音を落ち着かせるように、傷無は優しく肩に手を置いた。

「落ち着けよ、愛音。パトランティスじゃあれが普通なんだろ？　まあ、その中でも特に派手な露出ではあったけど……あれはあれで似合ってたし」

「す、好きで着てたわけじゃないのよ！　強制的に着せられたんだから！」

「分かった、分かったよ。でも、心配する必要はないと思うぞ」

「……どうして？」

「だって、これからもっと凄い姿を見ることになるし」

「あ……」

愛音は二人でシャワールームに来た意味をあらためて考え、さらに顔を真っ赤にした。体を守る様に、自分の体をぎゅっと抱きしめる。

「ああ……ある意味、皇帝の衣装の方が裸よりも恥ずかしいかも知れないけどな。まあ、いずれにしろ大丈夫だから安心してくれ」

「全然安心出来ないわよ！　結局どっちが恥ずかしいのか分からないじゃない……って、そう言いながら服を脱がさないで！」

傷無は愛音のパイロットスーツを肩からするりと外す。たちまち、たゆんとこぼれ落ちそうになる胸を、愛音は慌てて両手で押さえた。

「きゃあっ」

その隙に傷無はしゃがみ込み、愛音のスーツを腰まで下ろす。

「ちょ、ちょっと待って」

素直に手を止め、傷無は愛音の顔を見上げた。といっても胸が邪魔で、顔がよく見えなかった。少し離れて愛音の顔を見つめる。

「愛音、シャワー浴びるなら服を脱がないと」

「そ、そうだけど……そんなに黙々と脱がさないでよ」

羞恥に頬を染めて、愛音は視線をそらす。腰まで下ろしたスーツを掴む手に、細かな振動が伝わってくる。愛音の太ももが微かに震えていた。

この恥ずかしいという感覚が、愛音の接続改装をより効果的にする。本当はそれをもっと煽ってゆくのがいいのは分かっている。だが、今は時間が惜しい。ちょっと乱暴だが、短時間で成果を挙げる手段を取らざるを得ない。

「そうだな……でも久しぶりに愛音の体を見たいんだ。一番恥ずかしいところだけど、見ちゃ駄目かな？」

その言葉に誘われ、愛音はちろっと傷無に視線を送った。すると一層顔を赤くして、蚊の鳴くような声でつぶやいた。

「……いいわ」

脱がされている、ということをわざと意識させるように、傷無はじりじりとスーツを引き下げる。そして、最後は一気に太ももの途中までずり下げた。

「はぁ……」

愛音の唇から吐息が漏れる。

そのまま足下までスーツを下ろすと、脚を上げさせて完全に脱がせる。全裸になった愛音は両手で胸と股を隠し、落ち着きなくもじもじと体をよじっていた。

傷無も手早く自分のパイロットスーツを脱ぐ。ボロボロなので脱ぎにくい上に、体を動かす度に痛みが走る。

「つ……」

愛音との戦いで、あちこちに結構な怪我を負った。ほとんどが打撲だが、切り傷も多い。縫わなきゃならないほど深いものはないと思うし、骨も無事だとは思う。だが、肋骨が一番怪しい。次が右腕だ。もしかしたら、ヒビくらいは入っているかも知れない。

歯を食いしばって耐えるが、かなりこたえる。戦っている間は無我夢中で気が付かないが、戦いが終わると今さらながらに、体の痛みに気付かされた。

「傷無……」

愛音が心配そうな顔で、胸に触れてきた。自分の肌がさらけ出されるのも気にせず、優しく傷に触れた。

「痛むの？」

「ん……そりゃあな。でも、大したことないぜ？　この前なんか、もっと——」

「ごめん……」

犬だったらきっと耳がぺたりと伏せられ、尻尾を股の間に挟んでいるであろう。そう思うほど、愛音はしょげかえった姿を見せた。

「痛かったよね……あたしのせいで、いっぱい怪我させちゃった」

肩を震わせ、赤い瞳に涙が溜まってゆく。

「おいおい、泣くことないだろ愛音」

傷無は明るく笑って、給水栓と覚しきダイヤルをひねった。すると個室の中央部分に、天井から温かいお湯が雨のように降り始めた。

なるほど、どうりで四方がガラス張りでシャワーヘッドも見当たらないわけだ。土砂降りという訳ではなく、優しく体に降り注ぐ感じで、怪我をしている自分にはちょうどいい。

「さ、愛音。一緒に浴びよう」

だが愛音は立ち尽くしたままだった。むしろ、両手で顔をかくし本格的に泣き始めた。

——やばい。こんなに気に病むとは思わなかった。

傷無は愛音の体を抱き寄せ、お湯が降る中へ愛音の体を引き込んだ。二人の体を温かいお湯が流れ落ちる。震える愛音の体を抱きしめ、耳元でささやく。

「もう、そういうのはナシだ。俺だって自分の意志でやったことだ。それに、これくらいの怪我ならむしろ勲章だぞ。ほら男の体に付いた傷って、なんか格好良くないか？」

「そういうもの……なの？」

「そういうもんだ」

甘えるように、愛音は顔を肩にすり付ける。そして、くすっと笑った。

「名前が傷無なのに？」

それには傷無も苦笑いを浮かべた。

「俺は怪我の治りが早いみたいなんだ。もしかしたら、エロスのコアの影響かな？　だから名前負けもしてないぞ。多分な」

「そっか……確かに思ったより、元気みたい……」

愛音は自分のお腹を押してくる物体に気が付き、恥ずかしそうにつぶやいた。

「えっ、ああ……そりゃあ、裸の女の子を目の前にしたら、仕方がないだろ」

「うん……そうよね」

愛音は細い指を、その太い物体に絡めた。

「——っ!?　あ、愛音？」

「た、たまにはあたしの方から……気持ちよくしてあげたいなって」

愛音は恥ずかしそうに傷無から目をそらした。しかし、握ったものは離そうとしない。

愛音がそれだけ頑張っているのだ。愛音の気持ちに応えなければと、傷無は思った。

傷無は抱きしめている手で、愛音の背中を撫で回した。背骨に沿って、下から上に撫で上げると、愛音の体がびくっと痙攣した。

「そういやボディーソープとか、石けんのようなものはないのかな？」

「えっと……多分、これよ」

よく見るとガラスの壁に小さなくぼみがある。その下に手を当てると、液体の石けんが流れ出て手の平に溜まってゆく。同時にシャワーの湯量も減り、霧雨程度になった。

「へええ、なるほど。どういう仕組みかはさっぱり分からないが」

傷無も同じように石けんを手に取ると、それを愛音の体に塗りつけてゆく。愛音は恥ずかしそうにしながらも、黙ってされるがままになっている。そしておずおずと手を伸ばすと、傷無の胸やお腹に石けんを延ばして泡立ててゆく。

傷無が嫌がる様子を見せないのでほっとしたのか、もう少し大胆に傷無の体を洗ってゆく。お返しに傷無も愛音の胸元から石けんを垂らし、その下にたわわに揺れる大きな二つの胸を手に取り、揉み洗いを始めた。すぐに大きな胸が泡だらけになる。

「んっ……ああん、傷無……あまり強くされると、洗えなく……なっちゃう」

「よく聞こえないな。俺は愛音を綺麗にするのに夢中だからな」

ピンク色をした胸の先を重点的に洗う。つまんで指先で転がすように優しく洗う。

「ふっ、ああっ！　だ、だから、ダメって……あっはあああんっ」

今度は片方の胸を両手で握るように揉んでゆく。愛音は快感に逆らえず、体を反らせて背筋を震わせる。
「も、もうっ、こっちだって……しちゃうんだから」
愛音は石けんで泡立った手で、傷無の股間を優しく持ち上げた。
「うっ！　愛音、それは」
愛音は白魚のような指で、袋状の部分を大事そうに揉んでゆく。
「ええ、傷無の大事なところですもの……心配しないで。大切に扱うから……」
やわやわと揉まれているのが気持ちいい。指で触られる刺激は勿論だが、凄く大事にされているような気分になるのが精神的にも気持ちが良かった。
やがて愛音の指は、硬く反り返ったものへと上っていった。
傷無のものにふれていると、愛音の興奮も膨らんでゆく。
「ん……はあぁ……」
太ももをこすり合わせる動作が、腰を振って傷無を誘っているようにも見えた。
傷無は左手で愛音の胸を揉んだまま、右手をおへそ、そしてお腹の下へと下ろしてゆく。そして銀色の茂みを愛の毛を洗うように泡立てた。
「やんっ！　そ、そんなところいいわ」

顔を赤くして必死に訴える愛音を無視し、そのまま銀髪を洗った後、その下に隠された部分へと手を伸ばす。たっぷりと蜜を含んだその部分に触れた瞬間、愛音の腰がびくんと跳ねた。
「だ、やめて！　そこは自分で！」
「愛音だって俺のを洗ってくれてるじゃないか。だから、お返しだよ」

傷無の指が割れ目をなぞり、前後に動いてゆく。

「ひっ！　あああああああぁぁぁああん！　だっだめ、いやあああん」

愛音は腰が砕けそうになり、傷無の胸に寄り掛かる。傷無の胸で色っぽい溜息をつき、傷無を熱いまなざしで見上げた。

「ばかぁ……そこいじられると、ダメになっちゃうからぁ……」

愛音の股間からは熱い液体が湧きだし、傷無の指の動きに合わせ粘着質な音を立てている。愛音は蕩けそうな顔で、その快感を受け取っていた。その瞳には、接続改装の光が輝き始めている。

そして愛音も、快感にその身を委ねながらも傷無のものを離さなかった。上下に手をすべらせ、快感を生み続けている。

シャワーが自動的に強くなり、二人の体から泡を洗い流してゆく。激しい雨のようなシャワーに打たれながら、傷無はそろそろ限界が近付いて来ているのを感じた。

「愛音、そろそろ」

「うん……あたしも」

一定時間が過ぎたためか、シャワーのお湯がゆっくりと止まってゆく。シャワーの音が消えた中で、二人の手が立てる水音だけが響いた。その音はとても淫靡でいやらしかった。

「きっ傷無……あたし、もう」

愛音は顔を伏せた。

傷無は胸を刺激していた左手を離し、愛音の頬に当てた。そして顔を持ち上げさせる。

「愛音、俺から目をそらさないで」

「え……」

愛音の手が止まる。

逆に傷無は手を動かすスピードを速めた。

「ああぁっ！　やんっ、だめよ、そんなのっ……はああん」

「どうして？」

「だ、だって見られちゃう。傷無に……恥ずかしい顔」

そう言いながらも、愛音は再び傷無のものを刺激する。今までより指に力を入れ、より強い刺激を送り込んだ。

「そうだ、見せてくれ。愛音の、一番可愛い顔を」

「いやあ、可愛くなんかないっ、は、はずかしい！　ぜったい、ダメ」

しかし傷無は顔をそらすことを許さない。そしてさらに深く指をもぐり込ませる。

「いやあああっ！　だめ、い、いくときの顔見られ――」

愛音の体がぴんと伸び、つま先立ちになった。

「はあああああぁぁああああやああぁぁあああああぅぅぅあああああん♥♥」

濡れそぼった愛音の秘裂からシャワーよりも熱い液体が飛び散った。そして傷無も同時に限界を迎え、熱い液体を愛音のお腹に勢いよく叩き付けた。

それがさらに愛音の絶頂に拍車をかける。

「いやあぁぁぁっああ♥あああぅあん♥」

うっとり細められた目に涙を浮かべ、赤く上気した頬にあふれた涙がこぼれる。開いた口からよだれが垂れ、物欲しそうに舌が震えている。快感と幸せを精一杯表現している表情だった。

そして接続改装の魔力の光が二人の体を包み込む。

「ああ……やあ……見られちゃった……いくときの顔……」

「愛音……きれいだったよ」

顔が近付き、唇が触れそうになる。

「傷無……そんなの、あっ」

ふと我に返り、反射的にお互い顔を離した。

愛音との戦いの後、二人はキスをした。

その時に起きた現象がよく分からない。あれは絶頂改装と似ていて、でも異なるものだった。その正体が分からないうちに再びキスをすることに、二人は不安を感じた。

「……早いところ絶頂改装まで達成しよう。ブリーフィングがあるしな」

接続改装の影響で催淫効果を発動している愛音は、艶然と微笑むと傷無の前に跪いた。

「愛音？　んうっ！」

愛音は傷無のものに、ちゅっと口づけをした。
「きれいに……するんでしょ？」
愛音の舌が、傷無が出したものを舐め取ってゆく。
この調子なら絶頂改装の完了まであと数分だな、と傷無は思った。

◇
◇
◇

その後、絶頂改装を済ませた傷無と愛音が艦橋に戻ると、早速ブリーフィングが開始された。出席者はグラベル、アルディア、それとイズガルド側の各セクションの責任者と小隊長など計二十名ほど。そして地球側は怜悧とケイ、傷無と愛音、ガートルード。それと戦技科と技研科の各リーダーとナユタラボの主要スタッフ、こちらも合わせて計二十名程度と、合計約四十名ほどが集められていた。
『アタラクシアから乗組員と物資装備の類いの積み込みはほぼ完了。ただ、セッティング含め、ナユタラボの元の機能を回復するのには、あと四、五時間は必要』
ケイの報告に、怜悧は黙ってうなずいた。
「我々はアタラクシアを放棄することを決定した。幸いイズガルドとの同盟により、このイズガルド軍の旗艦に乗船を許可されている。よって今後は、イズガルドの旗艦の乗組員としてバトランティス帝国と戦うことになる」
元アタラクシアのスタッフから、ざわざわと動揺の波が広がった。技研科の一人が手を挙げる。
「アタラクシアは……もうダメなのですか？」
その質問には、ケイがフローティングウインドウで答えた。
『主要な設備は死んだ状態。あれを元通りにするには、かなりの時間と資材がかかる。現状では手の施しようがない』
「そんな……」
今まで我が家のように親しんできたアタラクシアが廃棄される。それは大きな喪失感を伴う決定だった。責任者ですらそうなのだから、一人一人の生徒に至っては尚更だろう。しかも、今まで敵だった異世界の戦艦に乗り込み、その乗組員として戦わなければならない。頭では分かっていても、その事実と気持ちを処理することが出来なかった。
艦橋を重苦しい空気が支配した。
その中で、グラベルだけが口元に微笑みを湛え、何度もうなずいていた。
「ふむ、アタラクシア……アタラクシアか」
「どうかしたの？　グラベル」
アルディアが首を傾げた。
「ああ、良い名だ。気に入ったぞ」
グラベルは怜悧に向かって微笑んだ。
「この艦を、今後はアタラクシアと呼称しよう。構わないな、レイリ？」
この申し出には、怜悧も驚いた。
「それは……我々は構わないが、いいのか？　旗艦の名前だぞ、そんな簡単に……」
「良いのだ。この艦は私専用に造られた新造艦でな。まだ正式名称を付けていなかったのだ。良い名も思いつかずに困っていたところだ。ちょうど良い」
怜悧はグラベルの瞳をじっとのぞき込むと、やがて口元に笑いを浮かべた。
「分かった。今後はこの戦艦がアタラクシアだ。各セクションのリーダーは、持ち帰って全員に伝えろ」
「了解！」
地球側のメンバーは明るい声で返事をした。
現実問題としては何も変わらない。だが名前がアタラクシアになっただけで、不思議とこの船に対して親近感が湧いてくる。元アタラクシアの職員や学生の安心感もぐっと増すだろうし、戦意も上がるだろう。
グラベルの粋な計らいに、怜悧も内心感謝していた。
「よし作戦会議だ。レイリ、進行を頼めるか？」
「なに？　お前が将軍だろう？」
「自分で言うのも何だが、我が軍で一番戦闘力が高いのが私だ。艦橋で座っているよりも、前線で戦う方が戦力の効果的な運用という面では望ましい。それに、ゼルティスに乗り込むとなれば、今まで以上に敵は手強くなる。特に親衛隊は一騎当千の強敵揃いだ。だから私は前線に出て、心置きなく戦いたい」

「それは、そうかも知れんが……」
「レイリ、お前なら指揮官を任せられる」
怜悧は困ったように微笑んだ。
「それがこの戦艦の命名に対する代償のようなものか」
「そんなところだ。高くついたな？」
片目をつぶって、グラベルはいたずらっぽく笑いかけた。
「……分かった。期待に応えてみせよう」
怜悧は覚悟を決めたように艦橋を見渡した。イズガルド側の乗組員も、怜悧に対して特に不満そうな顔を見せていない。
「では作戦会議を始める。我々の目的は、ゼルティスの王城にある創世の御柱を修復することだ。この柱が崩壊すると、アトランティス世界が崩壊し、その余波で我々の世界……今後は混乱を避けるためにレムリアと呼称するが、我々の世界にも被害が及ぶ可能性が非常に高い。最悪の場合、両方の世界が崩壊することも考えられる」
艦橋が騒然となった。イズガルドの兵士たちは、頻発する天変地異にただならぬものを感じてはいたものの、創世の御柱の崩壊が世界の崩壊につながると明確に伝えられるのは、さすがにショックだった。
一方、レムリア側にしてみれば、他人事であった異世界の危機が、自分たちの世界に直結した問題だとは想像もしていなかった。その事実は衝撃的どころの騒ぎではない。両国のスタッフはその不安を口々にささやき合う。
「静まれ！　お前らがそんなことでは、下の者が不安に感じる。堂々としていろ！」
怜悧の一喝に、再び艦橋が静寂を取り戻す。
「まずこれよりロンドンの衝突面に突入する。衝突面を抜ければ、そこはもう帝都ゼルティスと目と鼻の先だ。当然、パトランティスも防衛線を張っているだろう。問題はどれくらいの戦力が待ち受けているかだが……」
アルディアが手の平に浮かべた小さなウインドウを見つめた。
「征伐軍が第一から第五まで揃い踏みね。その後ろには親衛隊も一番隊から四番隊までが揃ってる。それとイズガルドに遠征していた部隊も戻って来てるわね……ということは、戦艦だけで三百隻近く。魔導兵器だけでも一万はいるわ」
傷無は不思議そうな顔で、アルディアに訊いた。

「どうして分かるんだ？」
「前に言ったでしょ？　ゼルティスの近くに、敵の通信を傍受する中継器を置いて来たって。そこからの情報よ」
怜悧はアルディアにうなずくと、話を進めた。
「敵との交戦は避けられない。しかし我々の目的は敵の殲滅ではない。敵を突破し、王城にある創世の御柱へと辿り着くことだ。隣接する研究所にいると思われる、那由多博士を確保。情報を収集した後、創世の御柱の修復を行う」
――しかし、それだけの大軍勢との衝突となれば、かなりの死傷者が出る。
傷無が手を挙げると、怜悧はあごをしゃくって発言を促した。
「姉ちゃん。それなら、俺たちに戦う意思がないってことを伝えればいいんじゃないか？　俺たちの目的は、二つの世界が生き残ることだと分かってもらうんだ。それで無駄な戦いは避けられる」
「ふむ……そうだな。愛音、お前がパトランティス皇帝として停戦を呼び掛けることは出来ないのか？」
だが、愛音は悲しげに首を振る。
「パトランティスにはグレイスがいるわ。あたしがいない場合は、統帥権はグレイスにある。それに、あたしが敵の陣営からそんなことを言っても、誰も信用しないだろうし、誰も従わないんじゃないかしら……」
腕を組んで怜悧は考え込んだ。
「グレイス……愛音の妹か。そして事実上のパトランティス皇帝、というわけだな」
確かに、愛音が不在の十年間、皇帝として君臨してきた存在だ。一方の愛音は、突然戻って来てわずか数ヶ月。どちらが信頼を得ているかという問題なら、愛音の方が分が悪いと想像するのが普通だ。それに、レムリア側からそんな呼びかけをしたところで、偽者と思われるかも知れないし、そもそも相手にされないかも知れない。愛音の言うことも、うなずける話だった。
「それに、グレイスはあたしがレムリア側に付いたと知ったら、きっと逆上する。どんな犠牲も厭わずに、あたしたちを全滅させようとするはずよ」
考え込んでいたグラベルが顔を上げる。
「逆にグレイスに停戦命令を出させれば、そこでこの戦いは終わる、ということだな？」
「ええ……それが出来れば」

怜悧は難しい顔をして考え込んだ。
「グレイスと交渉をする方法か……どうやって会談まで漕ぎ着けるかだな」
やがて口々に議論が始まった。様々な方法を検討するが、決め手となる意見が出てこない。喧噪の吹き荒れる中、愛音はじっと立ち尽くしていた。
唐突に愛音が顔を上げた。
「あたしがグレイスを説得しに行くわ」
その提案に、議論の喧噪が一瞬にして静まった。
眉を寄せた怜悧が首を傾げる。
「しかし愛音。グレイスはお前がこちら側に付いたことを知ったら、怒り狂うのではなかったのか？」
「ええ……だからこそ、あたしが行かなければダメだと思うの。単にあたしがレムリア側にいると聞いたら、グレイスは逆上すると思う。でも、あたしが何でレムリア側にいるのかを、あたしの口からちゃんと伝えれば……直接会って話をすれば、きっと分かり合える気がするの。あたしがそうだったように……」
愛音の瞳が、傷無に向けられた。その視線を受け止め、傷無もうなずく。
「そうだな……でも、危険だぞ」
「逆に言えば、逆上したグレイスはあたし以外の人の言葉を聞かないと思うわ。それに、ゼルティスの郊外には、あたししか知らない王城への抜け道があるの」
「え？」
「もし皇帝に危険が及んだとき、秘密裏に城から脱出するための通路よ。その入り口は、あたししか開けられない。だから……」
そういうことなら、傷無もうなずかざるを得なかった。
「分かった……でも、俺も行く」
しかし愛音は、きっぱりと拒絶した。
「駄目よ。グレイスは特に傷無を目の敵にしているわ。きっと逆効果よ」
「でも、愛音！」
確かに愛音の言うことであれば、グレイスも耳を傾けるかも知れない。だが、姉に裏切られたと思い込んだら、

可愛さ余って憎さ百倍……ということにもなりかねない。
怜悧はしばらく考えてから決断を下した。
「待ち受けている敵軍の数は、まともにぶつかれば勝機はない。だが、我々にはゼロスの術式解体がある。まずは愛音にハイブリッド・カウントが許す限り、敵の戦力を削いでもらいたい。双方とも血を流さずに武装解除できる貴重な手段だ。愛音が我々の側についていることも明らかになるというリスクはあるが、やむを得ない」
「わかったわ」
愛音は力強く答えた。
「しかし万が一ということもある。ハイブリッド・カウントは使い切らず、イエローゾーンである25％を切らないように注意しろ。敵戦力を削った後、ゼルティスへ降下。秘密の通路より城内に潜入。グレイスと停戦の交渉をしてくれ。それと――」
怜悧は傷無、そしてグラベルとアルディアを順番に見た。
「傷無とグラベル、アルディアは愛音の護衛をしてくれ。ハイブリッド・カウントを消費した愛音を、無事にグレイスのもとへ届けて欲しい」
「了解した」
快諾したグラベルと違い、アルディアはつまらなそうに横を向いた。
「何だか地味ねぇ。せっかく親衛隊と殺し合えると思ったのに……」
「そう言うな。アイネスとグレイスの会談を実現させるのが、今回の作戦の要だ。それに、黙って行かせてくれるとも思えん。それなりに大変な任務になるぞ」
傷無は拳を握りしめた。
「そうだな。俺たちの手で、愛音を必ず妹のところまで届けよう！」
意気込む傷無に対し、怜悧は釘を刺すように言った。
「だがグレイスとの交渉は愛音の役目だ。その場には絶対に顔を出すなよ」
「あのーちょっといいですかね？」
それまで黙って話を聞いていたガートルードが小さく手を挙げている。
「ああ、すまないな。ガートルードはアタラクシアを守ってくれ。術式解体で処理できる敵の数は限られている。

愛音がグレイスを説得するまでの間、残存戦力と正面からやり合わねばならなくなる。特に、魔導装甲の対処はお前が頼りだ」
「いや、それは了解ですが……そういうことではなくてですね」
怜悧が怪訝な顔をする。
「何だ？」
「バトランティスで何を間違えたのかアイドルなんかやってる元同僚がいやがるのですが、あれはどうなりやがりますかね？」
「あー……」
全員微妙な顔で言葉を詰まらせた。
あればかりはどうなっているのか、誰にも分からない。すっかり向こうの世界に溶け込んでいるようにも見えるし、何か考えがあってやっているのかも知れない。
愛音もアイドルデビューの経緯は一切知らず、放送でその存在を知って驚いたらしい。
ケイはキーボードを叩くと、イズガルドから得た情報で分かる範囲での、最近の天地穹女神とマスターズの活動状況を羅列した。見事に予定がびっしり埋まり、しかもアトランティス大陸全土に渡っている。
『彼女たちは売れっ子で超多忙。色々な現場を飛び回っていて、現在の位置を特定するのが困難。救出の計画をするのは事実上不可能』
愛音は深い溜息を吐き出すように言った。
「心配いらないわ。天地穹女神もマスターズも、正真正銘のスーパーアイドルだから、危険が及ぶことはないと思う。安全な場所で、大事に監禁されることに間違いはないわ」
「助ける方法はないってことでいやがりますか……まあ、あの人たちのことですから、普通の顔してひょっこり戻ってきそうでいやがりますが」
ガートルードは、やや無理して笑顔を見せた。
「質問は以上だな。細かい作戦スケジュールは追ってケイより各リーダーへ指示を出す。各々その指示を徹底させろ。いいな！」
艦橋の全員が声を揃えて返事をする。

「了解！」
怜悧は全員に向かって、思いの丈を叫んだ。
「いいか！　これが最後の決戦だ。どのような結果になろうと、この戦いで双方の世界の命運が決まる。悔いを残しても、それを取り返す機会はない！　全ての力を出し切れ！　思いを残すな！　文字通り世界は我々の双肩にかかっている！　いくぞ!!」
全員が拳を突き上げて応える。新生アタラクシアに響く鬨の声は、レムリアとイズガルド、どちらのものという区別の出来ない、一つのうねりとなって轟いた。

◇
◇
◇

「征伐軍、第一部隊より第五部隊まで配置完了いたしました。またイズガルドより帰還しました部隊も元の編制に戻してあります」
部下の報告を聞き、親衛隊一番隊、通称『レオン隊』隊長のハーキュラスは口元を引き締め、うなずいた。
「分かりました。指示があるまで待つように」
報告に来た魔導騎士は敬礼をすると、きびきびした動作で持ち場へ帰って行く。
ハーキュラスは帝都ゼルティスの最外周にあたる第三城壁の上に立ち、荒野に浮かぶ衝突面を見つめた。強い風が親衛隊の制服をはためかせ、金色の髪をなぶってゆく。編み込んだ髪を後ろでまとめ、ポニーテールにしたその先が激しく暴れている。
もう間もなく、あの衝突面からレムリアとイズガルド軍がやって来る。
——こんな大事なときに、ゼルシオーネ様はどちらにいらっしゃるの？
ハーキュラスの内心は穏やかではなかった。未曾有の危機と、突然押し付けられた重責に心は千々に乱れ、考えもまとまらない。
非常事態だというのに、親衛隊の隊長であるゼルシオーネの行方が分からないのだ。しかも、側近である懲罰四剣までが、四人ともレムリアで行方不明ときている。
尤も懲罰四剣は、あくまでゼルシオーネの直属の部下であり、組織の指示系統には属していない。だからこのよ

うなときにゼルシオーネの代わりに指揮を頼んだりはしない。ただゼルシオーネに一番近い場所にいる存在ではあるので、訊けば居場所くらいは分かりそうなものだ。だが、今はそれも能わない。

考えれば考えるほど、焦れてくる。

部下の手前、焦った様子は見せられない。ゼルシオーネがいない今は、一番隊の隊長であるハーキュラスが親衛隊全体の指揮を執らねばならない。だが――、

「ハーキュラス、どうした？　そんな顔をして。お腹でも痛いのか？」

背後から気安く呼び掛ける声がした。振り向くと、そこにはすらりとした肢体に制服をラフに着こなした美しい女性が立っていた。ウェーブのかかった赤紫色の長い髪。その一部を編んでアップにしたハーフアップ。非常時だというのに、その力の抜けた余裕の微笑み。子供の頃から、いい加減見飽きた笑顔だ。

「メルクリアこそどうしたの？　二番隊隊長のあなたが遊び歩いていては、下の者に示しがつかないわ」

親衛隊二番隊『ティグリス隊』の隊長、メルクリアである。

メルクリアはハーキュラスと同じく、由緒正しい貴族の家柄だ。子供の頃から家族ぐるみの付き合いだが、どうもこのメルクリアは上級貴族らしからぬ性格で、成績も魔力も優秀なのに世間の評価に興味がない。競争や勝ち負けにも興味がなく、いつも飄々とした態度が浮き世離れした雰囲気を醸し出していた。そんな態度がハーキュラスにとってはじれったく、メルクリアが不真面目に生きているようにも思えた。そこでハーキュラスは、メルクリアを自分と同じ親衛隊に誘ったのだ。

入隊してみれば、元より優秀で能力の高いメルクリアだ。あれよあれよと言う間に出世して、自分に次ぐ二番隊の隊長にまで上り詰めた。

しかし、それでも浮き世離れした性格までは直らなかった。

「うちの隊は放任主義なんでね。ここまできたら、なるようにしかならないし。あーだこーだ言うよりも、日頃の鍛錬を生かして、各々が頑張ってくれればいいさ。それよりハーキュラスこそ、もう少し落ち着いた方がいいんじゃないか？」

「私は十分落ち着いているわ。それよりも何しに来たのよ。メルクリアこそ不安なのではなくて？　この私に泣き付きに来たのではないの？」

メルクリアは片目をつぶって、にやりと笑った。

「ハーキュラスが泣き出しそうな顔してたから、心配になって」

「……それ以上愚弄すると、メルクリアでも許さないわよ」

凄んでみせると、メルクリアは眉を寄せて、下唇を噛んだ。

「こういう顔をしているときは、泣く一歩手前のときだ。子供の頃からな」

「……くっ」

メルクリアは、いつもいつも見透かしたようなことを言う。そして腹立たしいのは、それがいつも当たっているからだ。

「あなたは……いつも意地悪を言うのね。部下には落ち着いて見えているわ。私は自分の務めはしっかり果たしている。余計な心配は無用です」

「バカだな。もっと気楽にいこうよ」

その言い様に、ハーキュラスはカチンときた。しかし――、

「なにせ、非常時だというのにゼルシオーネ様が行方不明だからな。ハーキュラスは真面目で責任感も強いから、多分気負いすぎてるだろうと思って」

「それは……」

図星だった。ハーキュラスは、あきらめたように溜息を吐いた。

「その通りかも知れないけど、仕方がないじゃない。私がしっかりしないと、隊長にも、ひいては皇帝陛下にもご迷惑がかかるわ。親衛隊として恥ずかしくない働きを見せるようにしないと」

「これだけの大部隊だ。完璧に動かすことなんて誰にも出来ない。想像の半分も出来れば上等、そう思っていればいいんじゃないか？」

「でも、私たちがゼルティスの人々の最後の楯なのよ？　レムリアとイズガルドに帝都への侵入を許せば、どんな恐ろしい惨状になるか……それに帝都に入れば、王城はすぐそこよ。万が一にでもグレイス様の御身に何かあったら……」

ハーキュラスは、ぶるっと体を震わせた。

「悪い方向に考え過ぎだ。兵力で言えば負けるはずがないだろ？」

「……そうね。余程のことがない限り、私たちが後れを取ることなんてない……それは分かってはいるのだけれど、

不安なのよ」
「大丈夫だ。ゼルシオーネ様がいなくても、我々だけで――」
「行方が分からないのは、ゼルシオーネ様だけじゃないの。噂ではアイネス様もイズガルド遠征の途中から姿が見えないって……」
さすがのメルクリアも、その情報には驚きを隠せなかった。
「何だって？　アイネス様は遠征からお戻りになって、今は王城にいらっしゃるのではないのか？」
メルクリアは彼方にそびえる創世の御柱、その根元に構える王城を見やった。
「あくまで噂よ？　レムリアの刺客に討たれたとも、逆にレムリアの魔王を討つために姿を消したとも言われているの」
「まさかアイネス様が……」
メルクリアは険しい顔で、自分の指先を噛んだ。
「バトランティス帝国が負けることなんて、あるはずがない。そうは思っていても、なにか嫌な予感が――」
「敵、衝突面から来ます！」
咄嗟にハーキュラスは衝突面の方を向いた。
「――あれは⁉」
衝突面から現れたのは、魔導装甲がただ一人。白い装甲に青く輝く魔力の光。そしてピンク色の輝く髪は見間違えようもない。
「アイネス様！」
ハーキュラスに続けて、メルクリアも慌てた声を上げた。
「まさか！　なぜアイネス様がレムリアの衝突面から⁉」
フローティングウインドウを立ち上げ、衝突面から現れた魔導装甲を拡大する。
「間違いない。アイネス様だ……お迎えを出せ！　近くの魔導兵器を護衛に付けろ。それと王城に連絡！　グレイス様にお伝えするんだ！」
ウインドウに映るアイネスは、皇帝の衣装ではなくゼロスを身に付けている。ピンク色の髪を風になびかせ、じっとバトランティス軍を見つめていた。

その赤い瞳にバトランティスの大軍勢が映り込む。正面にそびえる黒い城壁に沿って、無数の魔導兵器と戦艦が浮いていた。その数はあまりに多く、軍勢で空を埋め尽くすのではないかと思えるほどだった。事前情報の通り、親衛隊だけでなく、征伐軍など全ての戦力が勢揃いしているようだ。
衝突面から、愛音に続いて傷無が姿を現した。
「うおっ！　こいつは……すげえ数だな……」
「バトランティスのほぼ全ての戦力を集めてあるみたいね。今アタラクシアを突入させると、大変なことになるわ」
「いけるのか愛音？」
「全ての戦艦や魔導兵器を消すのはさすがに無理ね……でも、出来るだけのことはするわ」
「……無理するなよ」
憂いと悲しみを湛えた愛音の瞳に、傷無はそう言うのが精一杯だった。
愛音は空中を蹴るようにして、バトランティスの軍勢の中へと飛び込んでいった。当然のことながら、魔導兵器も戦艦も愛音のことは皇帝と認識している。手出しをするどころか、道を空けて迎え入れる。そして愛音は、大軍の中程まで進んだところで停止した。
「術式解体」
背後のリングから魔法陣が発生した。リングを中心とした青く輝く魔法陣が、その直径を広げてゆく。それに合わせて、帯状になった魔法陣が愛音の周りを回転し、球状に輝く光を作り上げた。
「何なの、あれは⁉」
ハーキュラスは目の前で巨大化してゆく光の球体を見つめた。球体の表面には、青く輝く魔法陣の文様が流れている。その球体に、愛音を迎えに出た魔導兵器が次々と飲み込まれて行った。
――いや、違う。
飲み込まれているのではない。光の球に触れた場所から消滅している。
「まさか、あれが噂に聞くアイネス様の術式解体……なの？」
やがてその輝きは、戦艦すらも飲み込み始めた。船首から順に、戦隊を構成していた魔術式に分解されて行く。
さらに巨大化する光の球に、メルクリアは恐怖を覚えた。
「何という力……これが、アイネス様。これが……ゼロス」

「なぜですか！　アイネス様！　なぜこのようなことを!?」
泣きそうな声で叫ぶハーキュラスの肩を、メルクリアがつかんだ。
「ハーキュラス、一旦軍を退かせろ！　このままでは全滅するぞ！」
しかし時既に遅く、愛音はバトランティス軍の大軍勢に突っ込んで行った。
巨大な魔法陣の球が、陣形を組んだ艦隊の中を進んで行く。行く手に存在する物は、魔導兵器も戦艦もことごとく消失していった。
一切の抵抗も争いも許さず、艦隊の影がかき消えてゆく。それはバトランティス軍にとっては悪夢でしかなかった。各征伐軍の指揮官たちは、パニックに陥りながらも、大声で指示を出した。
「征伐隊は急いで回頭！　魔導兵器は光の球の進路から離脱！」
整然と並んでいた軍勢は、机をひっくり返したかのようにたちまち大混乱に陥った。とにかく術式解体から逃れようと、陣形も統率もなくあらゆる方向へ散らばってゆく。
その様子を見て、傷無がフローティングウインドウに合図を送る。
「姉ちゃん！　今だ！」
傷無がそう言うと同時に、衝突面から巨大な船首が顔を出した。それは二千メートル級の大戦艦。イズガルドとレムリアの旗艦アタラクシアだ。
船首に立つグラベルが腕を前に振った。
「撃てえーっ！」
バトランティス軍は回頭中で、シールドも張らずに無防備に横っ腹をさらしている。そこへ、アタラクシアの主砲が火を噴いた。巨大な光の砲弾が一瞬で空を横切る。砲弾はバトランティスの戦艦に命中し、激しい火花と放電、そして空に爆音を轟かせた。強力な破壊力を持つ主砲は戦艦の装甲を貫き、船体に風穴を開ける。
アタラクシアの直撃を受けた戦艦は傾き、内部で爆発を起こした。たちまち炎を上げ、光の破片に分解しながら高度を落としてゆく。そして荒野に墜落すると、激しい光の爆発を起こして魔力へと還元されていった。
「バトランティス二千メートル級、撃沈！」
アタラクシア艦内に興奮気味のアナウンスが流れた瞬間、割れんばかりの歓声が至るところで響いた。
怜悧は艦長席には座らず、立ったまま戦況を見つめている。

「よし、他の艦も続け！　衝突面を抜けた艦は後続の邪魔にならないように、すぐに所定の位置へ移動しろ。動きながらも砲撃の手を緩めるなよ！」
愛音の術式解体に加え、アタラクシアとイズガルドの艦隊の砲撃がバトランティスの軍勢を襲った。虚を衝かれたバトランティスは、アタラクシアの砲撃を面白いように受け、次々と沈んでゆく。
その光景を、親衛隊一番隊隊長ハーキュラスと二番隊隊長メルクリアは、呆然として見守った。メルクリアは我に返ると、焦燥感を隠そうともせず、友人を振り向いた。
「どうする!?　ハーキュラス！」
莫大な魔力をつぎ込んで建造した戦艦も、訓練して鍛え上げた魔導騎士の技も関係ない。ゼロスの術式解体は全てを無効化し、強制的に武装を解除させてしまう。
「く……あんなの……どうしろっていうのよ……」
ハーキュラスの瞳に涙が滲んだ。だが目の端に溜まった涙は、溢れるギリギリのところで踏みとどまる。
——だめよ。ここでくじけちゃ。
がんばれ。
がんばれ、ハーキュラス！
心の中で自分自身に応援の言葉を投げかけた。
「……とにかく進路を空けて。アイネス様といえど魔力は無限じゃない。いつか魔力が切れる時が来る。それまでは出来るだけ術式解体から逃げるように。衝突面から出てくるイズガルドの艦隊からの砲撃にも注意して。こんな混乱した状況では、こちらからの攻撃は味方への誤射になる可能性が高い。無理に砲撃せず、防戦に努めて」
「了解した。後はまかせろ」
メルクリアはハーキュラスの肩を軽く叩くと、フローティングウインドウを十数枚立ち上げ、各艦隊の指揮官と親衛隊の各部隊に指示を出した。
「親衛隊隊長代理、ハーキュラスからの命令を伝達する。ゼロスの術式解体から逃げろ！　陣形を崩し、一カ所に固まるな！　何としても回避し、魔力が尽きるのを待つのだ！　術式解体の攻撃から離れた場所にいる艦は、敵艦隊の砲撃に備えろ。無理して反撃を行わず、シールドを厚くして防戦に集中するのだ。いいな！」
メルクリアの指示でバトランティス軍の動きが速くなった。バトランティスの艦隊は隊列もなく、散り散りに逃

げてゆく。バラバラになることで、術式解体で消去できる敵の数が、ぐっと減った。
アタラクシアの艦橋では、宙に浮かんだ半透明のウインドウに刻々と変化する戦況が映し出されていた。恰俐はその動きを見て、ケイに話しかけた。
「ケイ。愛音のハイブリッド・カウントは残りどれくらいだ」
『もう残り30%。そろそろ限界』
恰俐はコンソールを操作し、愛音との回線を開いた。
「愛音。もうハイブリッド・カウントが限界だ。そろそろ離脱しろ！」
『でも、まだ半分も消していないわ！　このまま艦隊戦に入ったら、アタラクシアが！』
恰俐は別のウインドウを立ち上げた。
「傷無、グラベル、アルディア！　愛音を拾いに行ってくれ！」
アタラクシアの船首でスタンバイしていた傷無が立ち上がる。
「了解！　いくぜ、グラベル、アルディア！」
「ああ！」
スラスターをいきなり全開にしてグラベルが飛び出した。
三人はアタラクシアを飛び出すと、ゼロスが放つ魔法陣の光に向かって飛んで行く。
「愛音！」
愛音の顔の横に通信ウインドウが開き、自分を呼ぶ傷無が映った。
「傷無……」
自分のステイタスウインドウを見ると、ハイブリッド・カウントは残り29%だった。
――ここまでかしらね。
魔法陣が消滅した。術式解体の効果は消え、広く展開していたゼロスの背中のリングが折りたたまれた。
ゼルティスの空を支配していた悪魔のような輝きが消えたその瞬間、親衛隊は動いた。
ハーキュラスの目がぎらりと光った。
「全艦隊、所定の位置に戻りなさい！　陣形を整え次第、各部隊ごとに砲撃開始。狙いは衝突面から現れたレムリア・イズガルド連合艦隊よ！」

指示に従い、一斉に艦隊と魔導兵器が動いて行く。
指示を出すと同時に、ハーキュラスは術式解体の魔法陣が消えた周囲を目で捜した。
――アイネス様はどこ⁉
「ハーキュラス！」
メルクリアがただならぬ声を上げた。
見ると、メルクリアが指さした先に人影があった。ハーキュラスはウインドウを表示し、その人影を拡大する。ピンク色の髪をした少女が、ゼルティスへと向かって急降下して行く姿だった。その後ろから三機の魔導装甲が続く。
「アイネス様！」
「それに後ろから追っているのは、レムリアの魔王だぞ！　ハーキュラス！」
メルクリアが呼び掛けるよりも早く、ハーキュラスは愛音たちを追って飛び出していた。
傷無とグラベル、アルディアは愛音に追いつくと、その横に並ぶ。
「愛音！　秘密の入り口っていうのは、どのあたりなんだ？」
「第三城壁の外側に小さな岩山があるわ。それが目印よ」
第三城壁は最外周の壁で、外側は見渡す限りの荒野が続いている。ぱっと見た限りでは、どこに入り口があるのかさっぱり分からない。
そのとき、傷無の顔の前に危険を知らせるアラートウインドウが立ち上がった。
「敵か！」
後ろを振り向くと、二機の魔導装甲が迫ってくる。
「キズナ！　あれは親衛隊の一番隊と二番隊の隊長だ！　厄介な奴に見つかったぞ」
「くそっ、戦うしかないか！」
グラベルは背中の銃剣に手を伸ばして言った。
「あいつらは私とアルディアが引き受ける。キズナはアイネス殿を送り届けてくれ」
「しかし！」
アルディアは急停止すると、くるりと背中を向けた。

「ふふふ、あんな美味しそうな獲物を逃す手はないわね」

グラベルも空中で止まると、銃剣を抜いた。

「頼んだぞ、キズナ！」

「く……っ」

傷無は歯を噛みしめながらも、スピードを落とさなかった。地面が近くなると水平飛行に入り、城壁に沿って飛んで行く。

その後ろ姿を確認し、グラベルは目の前にやって来た親衛隊員と向き合った。

「親衛隊一番隊隊長ハーキュラス、それに二番隊隊長メルクリアだな」

ハーキュラスの顔が険しく歪む。

「グラベル、それにアルディア……あなたがたでしたか」

「ふふふ、一番隊と二番隊を相手に殺し合えるだなんて、今日は素敵な日だわ」

アルディアは頬を染めて、うっとりとささやく。既に両手に槍を構えて、楯を周囲に展開して臨戦態勢だった。

銃剣を構え、グラベルも戦闘態勢に入った。

「無駄と知って敢えて訊くが、見逃してはもらえないか？」

忌々しそうに、メルクリアが舌打ちする。

「本当に無駄なことを訊くのだな」

メルクリアの腕のパーツが分解し、主武装である弓の形に変形する。弓本体が刃物になっていて、近接戦闘では剣にもなる。魔力の光で出来た弦を引くと、光の矢が自然に生成される。様々な効果を発生させる矢を打ち出すため、銃にも引けを取らない独特の武装『魔弓弾導』だ。

そしてハーキュラスは己の魔導装甲に装着された武装、『聖栄光剣』を抜いた。幅の広い剣身に魔術文字の刻まれた愛用の剣だ。

「元第六征伐軍将軍、そしてイズガルドの英雄、褐色の獣……」

ハーキュラスの頬に冷や汗が流れる。

「行くわよ！　メルクリア」

ハーキュラスが宙を蹴って、グラベルへ突進した。

「てりゃああああああ！」

グラベルも銃剣を構え突っ込む。

「うおおおおおおお！」

両軍の精鋭が激突した。剣戟の輝きが、空を割る。

その衝撃波をエロスのセンサーが捉えた。

「グラベル……」

傷無は深刻な表情で、フローティングウインドウの数値を見つめる。

「傷無……」

愛音も心配そうな顔で、振り返った。幾つもの輝きが、空を横切っている。しかし傷無は振り切るように言った。

「グラベルとアルディアを信じよう。あいつらなら、どんな相手でも負けやしない！」

愛音はそれに答えず、速度を上げた。

壁に沿って大きく旋回してゆくと、わずかに盛り上がった丘が見えてきた。

「あれよ！」

二人はそこに降り立つと、周囲を見回した。

倒れた石の柱が何本も転がり、かつては神殿のようなものが建っていたことを彷彿とさせた。足下は砂で隠されているが、石を敷いた床が見える。ゼルティスの方を見ると、一番外側の第三城壁から一キロほどは離れていた。

「以前は、この辺りは森だったのよ」

愛音はそうつぶやきながら、床の砂を払っている。傷無も目立たないようにしゃがむと、岩をどけて愛音を手伝った。

「今では、古代の遺跡みたいだけどな」

「そうね……あ、これだわ」

紋章の描かれた石が現れた。愛音はそこに右手を当て、何事かつぶやいた。すると愛音の体から魔力の光が岩へと流れて行く。

「おっ！　これは……」

重い石を引きずるような音がして、地面が開いて行く。

「石畳の床が……こんなところに扉があったのか」
一辺一メートルほどの穴が、ぽっかりと口を開いた。
「行きましょう」
「あ、おい」
中がどうなっているのか分からないので傷無は警戒していたのだが、愛音は迷わずその穴の中へ入っていった。
「ここまで来たら、出たとこ勝負だな」
――いま愛音を守れるのは自分しかいない。
その思いを胸に、傷無は思いきって穴の中へ入っていった。

◇◇◇

ハーキュラスの指示どおり態勢を整えたバトランティスの艦隊は、アタラクシアとイズガルドの艦隊と激しい砲撃戦を開始していた。
ゼロスの術式解体で、相当な数の敵を減らしたとはいえ、未だに戦艦の数では倍以上の開きがあった。
『損失は5％。これならしばらくは持ちこたえることが出来る』
「ああ。我々の目的は、敵艦隊の撃破ではないからな」
アタラクシアの艦橋では、怜悧が戦況と被害状況を確認していた。全力砲撃は最初だけ。あとはシールドにエネルギーを割いて守りに徹する。それが艦隊戦における作戦だった。あとは一刻も早く、愛音がグレイスを説得してくれることを祈るだけだった。
『敵の砲撃が弱くなった。一分前の30％まで減少』
ケイの報告に怜悧は眉を上げた。
「くそっ……思ったよりも展開が早いな」
怜悧はウインドウを開き、指示を送る。
「敵の砲撃が弱まった！　魔導兵器部隊が来るぞ！　対空砲火用意！」
怜悧の読みどおり、バトランティスの空母から魔導兵器が次々と飛び立った。そして、アタラクシアへ向かって群れをなしてやって来る。
戦艦のシールドは艦隊専用に作られたものだ。魔導兵器のような小型の機体を止めることは出来ない。
「やれやれ、やっと出番でいやがりますか」
ハッチを開き、甲板に顔を出したガートルードが腰のホルスターから粒子銃を抜く。
数千という数の魔導兵器が、雲霞の如く押し寄せた。
「さあ、派手にいきますよ！」
ガートルードは両手を前に伸ばし、二丁拳銃の引き金を引いた。先頭にいる羽根付きに風穴が空き、爆発と共に光の粒になって消えた。
それを合図に、アタラクシアの対空砲が砲撃を始める。魔導兵器の攻撃がアタラクシアの甲板に着弾した。
「うわっ！　あっちが手薄でいやがります！」
ガートルードはスラスターを噴射すると、船首の方へ駆けつけた。上空から降下する魔導兵器を撃ち抜き、たちまち光の欠片へと姿を変えさせた。
安心するのもつかの間、正面から全長五十メートルほどの小型の戦艦が突っ込んできた。
「ちっ！」
ガートルードは拳銃の引き金を引きまくる。そしてカートリッジを使い切るという寸前で、戦艦が爆発を起こした。ガートルードは、ほっと胸をなで下ろした。
「魔導兵器と小型の戦艦による消耗戦ですか……」
ガートルードは艦橋への通信ウインドウを開いた。
「総司令！　こりゃ、長期戦になるとヤバそうでいやがりますよ！　とりあえず、弾幕をもっと厚くしてくれませんかね！」
『分かっている！　B2ブロック、レールガンが起動していないぞ！　何をやっている！』
怜悧の怒鳴り声に応えるようにウインドウが立ち上がり、汗だくのモモが映る。
『こちらB2ブロック！　電源が故障したんで交換中！』
モモは予備の電源ケーブルを抱えて甲板を走っていた。甲板にはナユタラボから持ち込んだレールガンがずらりと設置されている。アタラクシアは対戦艦の強力な火砲を備えているが、小型の魔導兵器対策は手薄だ。そこで技

研科はナユタラボから持ち込んだ火器を、手薄な甲板に急遽設置したのだ。
「おい！　早くしねえか技研科！」
大型レールガンの銃座に座っている戦技科の生徒が次々に声を張り上げる。
「モタモタしてねえで、早く弾撃たせろ！　弾！」
「こっちの世界の奴らに、俺たちが腰抜けと思われたらどーすんだ！　さっさとしろや！」
嵐のようにぶつけられる罵詈雑言に、モモがぶち切れる。
「るっさい！　嫌といっても死ぬまで撃たせてやるから、ちょっと待ったらんかい！」
甲板の至る所で何度も同じやり取りを繰り返したせいで、声が嗄れて裏返っている。叩き付けるように新しい電源のケーブルをレールガンに差し込んだ。途端にレールガンが低いうなり声を上げて起動する。
「うらぁ！　心ゆくまで撃てやボケぇ！」
レールガンのコンソールに光が灯り、ターゲットとトリガーが有効になる。それと同時に戦技科の生徒たちが子供のように喜びの声を上げた。
「きたきた、きたぁ！　やったるぜコラァ」
「魔導兵器と小型の艦船は無人だ！　綺麗なねーちゃんは一人も乗ってねえ！　容赦なく撃ち落とせ！」
嬉々とした表情でトリガーを引き、音速の数倍の弾丸を異世界の空にばらまく。飛行する魔導兵器に着弾すると、魔導兵器が動きを止める。そこへ畳みかけるように弾丸を叩き込むと、装甲が砕けて爆発を起こす。破片は光となって風に消えていった。
「技研科！　用が済んだらさっさと消えろ！　流れ弾に当たって怪我すんぞ！」
言い返そうとしたところへ、ケイから指示が飛んで来た。
『モモ、C1ブロックでシステムトラブル。至急対応して』
「ああっ、もう！　了解！」
モモは汗だくになったツナギのファスナーを下ろし、上半身を脱ぐと袖を腰で縛った。黒いビキニに支えられた胸を激しく揺らしながら甲板を走ってゆく。その先には戦う手段を失った人がいる。自分が行かなければ、その人たちはなす術がないのだ。
「すぐ行くから待ってなさいよ！」

弾が飛び交う空の下を、モモは全力で駆け抜けた。

◇　◇　◇

帝都ゼルティスの中心にある王城。その謁見室にある玉座は空席だった。だが、そこから一段下にある席には、椅子の主がいた。玉座ほどではないが十分すぎるほど大きく、豪勢な椅子に崩れるようにしどけなく座っている。
「姉様……なぜ姿を消したのじゃ……なぜ戻って来ぬのじゃ」
イズガルドへ向かった傷無の征伐隊から、愛音が突如として姿を消したという連絡はグレイスの耳にも入っていた。そして、その後単身レムリアに向かったとの未確認情報もある。
「もし姉様に何かあったら……妾は……妾は」
愛音と同じ赤い瞳から涙がこぼれ落ちた。涙が椅子を濡らすのと同時に、扉が激しく叩かれる音がした。城詰めの魔導騎士が、慌てて駆け込んでくる。
「何事じゃ。騒々しい」
「グレイス様！　イズガルドとレムリアの連合軍が侵攻してきました！　既にゼルティスの第三城壁まで迫っています！」
「なんじゃと！」
グレイスは椅子を蹴るようにして立ち上がった。
「ゼルシオーネは何処じゃ！」
「それが、ゼルシオーネ様の居場所が分かりません。現在はハーキュラス様が指揮を執っておられます」
「ゼルシオーネまで……一体、どこへ行ったのじゃ！」
グレイスは唇を噛んだ。
「それとも一つご報告が……」
「なんじゃ！」
魔導騎士は、グレイスの怒りに震え上がった。しかし、怯えながらも報告を口にした。
「アイネス様の……居場所が判明致しました」

「……っ！」

グレイスの心の緊張が解けてゆく。寒々しい胸の内に春の陽光が差し込んだ思いだった。

「そうか……姉様が」

姉様がいれば怖い物はない。イズガルドだろうがレムリアだろうが、何を恐れる必要があろう。狼狽した先程の自分が恥ずかしくなった。

「でかしたぞ！　それで姉様はどこにいらっしゃるのじゃ！」

「そ、それが……敵軍の先頭に立っておられます」

「……？」

グレイスは表情を変えずに、首を傾けた。

「そなた今、何と言った」

「で、ですから敵軍の――」

「滅多なことを申すと、命がないぞ」

魔導騎士は、がくがくと全身を震わせながら、それでも報告を繰り返した。

「ア、アイネス様は、イズガルド・レムリア連合軍の……先頭に立ち、こっ、このゼルティスに攻め込んできております！」

「ふざけるなああああああっ！」

グレイスの体から、怒りと共に魔力の光がほとばしった。

「そのようなことあるはずがないわ！　貴様、姉様とこの妾を愚弄するか！」

そこへ別の魔導騎士が駆け込んできた。

「ご報告申し上げます！　アイネス様、ゼロスの術式解体を使用しバトランティスの艦隊を消滅させながら進軍！」

「な……」

グレイスの顔から血の気が引いた。

「術式解体……じゃと？　馬鹿な事を申すな！　あれは姉様の――」

「何度も確認を致しました！　あれは紛う事なきアイネス様にございます！」

「なん……じゃと」

――姉様が、妾を裏切った？

そんなバカなことがあるものか。

姉様が、この妾に剣を向ける？

有り得ぬ。

ふらりとよろけると、グレイスは己の椅子に倒れ込んだ。

「ご注進申し上げます！」

さらに別の魔導騎士が走ってくると、跪いて報告をした。

「アイネス様、術式解体を解除。レムリアの魔王と共に、王城へ向けて移動中！」

――姉様が、妾を捨てた。

肘掛けをつかんだグレイスの指先が白くなってゆく。金と宝石で飾られた椅子の肘掛けを砕かんとばかりに、細くしなやかな指に力を込める。

――一度ならず、二度までも、あの男と。

「やはり……あの男のせいじゃ」

グレイスの赤い瞳から涙が止めどなく流れた。

しかし顔は泣いていない。

それは憤怒を封じ込めた、鬼の形相だ。

「あの男が姉様を狂わせる！　みんなあの男が悪いのじゃ！」

グレイスは全身から魔力の波動を放った。ステンドグラスのように美しい窓が次々と割れ、粉々に砕け散ってゆく。

「ぐわああっ！」

報告に来ていた魔導騎士たちが、魔力の衝撃波を喰らって部屋の外へ吹き飛ばされた。

誰もいなくなった謁見室で、グレイスは雄叫びを上げた。

「うわああああああああああああああああああああああああああああ！」

壁にヒビが入り、爆発したように穴が開いた。床の石にも亀裂が走り、まるで巨人が歩いたかのように陥没してゆく。

「レムリアの魔王！　貴様だけは、妾が殺してやる！」
——そうすれば、
魔力の波動が静かなさざ波へと変化した。
「姉様は妾の許へ帰ってくる……そうじゃ、妾が魔王の手から姉様を救い出すのじゃ」
グレイスはその未来を夢見て、目を細めた。

二章 信じるもののために

Hybrid × Heart Magias Academy Ataraxia

アタラクシアがバトランティス軍と戦闘状態に入ったとき、天地穹女神はゼルティスのバトランティス帝国劇場にいた。専用フロアの控え室で出番を待っていたのだが、いつまでたってもお呼びがかからない。
「一体、どうしたのでしょう？」
ソファに座った姫川が蝸杖をつく。開演時間が迫っているので、既にステージ衣装に身をつつんでいた。
シルヴィアはステージ衣装のスカートをはくと、腰のファスナーを引き上げた。
「そうデスネ。全然連絡がないのもおかしいデス」
普段なら、マリスやスタッフが足繁くやって来ては、あれやこれや世話を焼いてくれる。だが、今日に限っては誰も顔を見せない。姫川は立ち上がると、自分で冷蔵庫から水の入った瓶を取りに行った。
「今日の公演は中止ね」
下着姿のまま、窓から外を見おろしていたユリシアがつぶやいた。
「えっ！　どういうことですか？」
姫川は驚いて瓶を片手にユリシアのもとへ駆け寄った。
「あれをご覧なさいよ」
窓は床から天井まで、一面が継ぎ目のない透明な素材で作られていた。素材に流れる微弱な魔力によって、外から見たときの透明度を変えることが出来る。今は外から見られない設定になっているので、天地穹女神が窓側に立っても、下にいるファンたちに気付かれることはない。
姫川とシルヴィアも窓際に立ち、外を見おろした。すると、出口から大勢の観客が吐き出されてゆくのが見えた。しかも、何かから逃げるように、我先にと道を急いでいる。
「確かに様子がおかしいですね」

「あっ！　いま何か空で光ったデス！」
ユリシアが目をこらすと、第三城壁のさらに向こうで幾つもの光がきらめいている。
「これは……戦争でも始まったかしらね」
シルヴィアが不安そうな顔で見上げた。
「でも、相手はどこの国デスか？　イズガルドでしょうか」
「半分当たりね」
控え室の扉を開け、マリスが入ってきた。
「マリス！　今までどこに……いえ、それより何が起きているの？」
ユリシアの質問に、マリスは表情を変えず淡々と答えた。
「イズガルドとレムリアの連合軍が衝突面を通って、このゼルティスに侵入したわ」
「何ですって!?」
姫川の顔つきが、アイドルのそれから戦士の表情へ、がらりと変わる。
「こうしてはいられません！　私たちも」
「そうデス！　このままじゃ、ゼルティスが戦場になってしまうデス！」
「……そうね。マリス、わたくしたちは行くわ」
しかしマリスは冷たく答える。
「あら、それはダメよ」
マリスの後ろから、見慣れぬ人影が遠慮する様子もなく控え室に入って来る。鋭い目つきをした、赤と白の制服を着た四人の騎士がユリシアたちの前に並んだ。
「親衛隊!?」
姫川が驚きの表情で固まった。
親衛隊が手にしているのは銃剣だ。長さ一・五メートルほどのライフル型で、ストックより後ろが剣になっている、親衛隊独特のものだ。その銃剣の銃口を天地穹女神に向ける。しかしユリシアは臆することなく、微笑みながら親衛隊に歩み寄った。
「親衛隊が一体何の用かしら？　この国民的アイドルのわたくしたちに向かって——」

親衛隊はユリシアを押し止めるように、銃口を胸に突き付けた。
「——っ、本気なの？」
ユリシアの額に冷や汗が浮かぶ。
「マリスさん！」
姫川の悲痛な叫びを、マリスは無視するように髪の毛を払った。
「大人しくして頂戴。あなたたちを傷付けたくないの」
悔しそうに歯がみをすると、ユリシアは吐き捨てるように言った。
「……見損なったわ。所詮あなたは、わたくしたちの監視でしかなかったのね。だったら、力尽くでも逃げ出してやるわ」
マリスは肩を落とし、溜息を吐いた。
「はぁ……ユリシアちゃんはもう少し賢いと思ったのに、残念だわ」
ユリシアの胸に突き付けられていた銃剣が、音を立てて床に落ちた。
「え？」
目の前で起きた出来事に、ユリシアは呆然とした。
真っ直ぐ伸びたマリスの右脚が、親衛隊員の首筋にめり込んでいる。
「だからぁ……邪魔者を片づけるまで、ちょっと待ってなさいって言ってるのよ」
「——な、」
側にいた親衛隊員が、慌てて銃剣をマリスへ向けた。
しかしその前にマリスの手刀が喉元へ叩き込まれる。
「が……っ！」
苦しげな声を漏らし、白目を剝いて倒れた。
しかしさすがに親衛隊は精鋭である。残った二人の親衛隊員は冷静さを取り戻し、マリスを前後から挟撃した。同士討ちを避けるため、銃を反対側に持ち替え、剣としてマリスに斬りかかる。マリスは前後からの同時攻撃を見事にかわした。まるで後ろに目でもあるかのようだ。
正面の親衛隊員が袈裟斬りに、胴を真っ二つにする一撃をマリスに振るった。

親衛隊員の目には、一瞬マリスの姿が消えたように見えた。マリスは足を広げ、床に這うように姿勢を低くしていた。

「くっ！」

すかさず後ろの親衛隊員が、剣を振り下ろす。しかし、床を滑るようなマリスの超低空の蹴りに足下をすくわれる。

「あっ！」

後方にいた親衛隊員は完全にバランスを崩し床に倒れた。しかしその間に、正面の親衛隊員がマリスに向かって銃口を向ける。

「――!!」

撃たれる。

そうマリスが覚悟を決めたとき、正面の親衛隊員ががくりと膝をついた。

驚いたマリスの瞳に、親衛隊員の後ろに立つユリシアの姿が映った。

「詰めが甘いわよ♪」

予想外のマリスの戦闘力に、残る一人の親衛隊員は大きく後ろに飛びすさった。

「この裏切り者め……」

親衛隊員の体に魔力の光が走った。

マリスとユリシアの顔色が変わる。

――魔導装甲!?

さすがに魔導装甲を着装されたら、手も足も出ない。

親衛隊員が、コアの名を叫ぶべく口を開いた。

「ギ――」

その口に、水の入った瓶が刺さった。

「!?……!!」

窓際にいた姫川が、見事な投球フォームで手にしていた瓶を投げていた。

親衛隊員は慌てて瓶を吐き出す。

「げほっ！　がはっ！」

むせながら姫川を睨む目が、怒りに燃えていた。

はじかれたように、ユリシアとマリスが親衛隊員に向かって駆けた。その二人を飛び越え、シルヴィアの体が宙に舞った。

「はああああっ！」

シルヴィアの小さな体が空中で回転する。強烈な遠心力が小さな足を凶器に変える。シルヴィアの体重の何倍もの破壊力を持った蹴りが、親衛隊員のあごを打ち抜いた。

「がっ……!?」

一撃で意識を刈り取られ、親衛隊員は崩れ落ちるように倒れた。

きれいに着地したシルヴィアは、ほうっと溜息を吐くと、激しい動悸を鎮めるように胸を押さえた。

「さっすが天地穹女神ね！　みんなナイスサポートよっ！」

笑顔でピースサインをするマリスに、ユリシアはイラッとした。

「ナイスサポートよっ……じゃないわよ！　あんた、一体何がしたいの？」

姫川も怪訝な顔でマリスに詰め寄る。

「と言いますか、何者なんですか？　マリスさん」

その疑問も尤もだった。

以前姫川たちが脱走を図ったとき、マリスは三人に抵抗できなかった。結局あの時は、マリスに説得される形で脱出をあきらめたが、マリスは力も弱く、格闘技などもってのほかだった。しかし今の手腕を見ると、あれは実力を隠していたのではないか？　という気がしてくる。マリスは三人の疑いのまなざしに、胸を張って答えた。

「あたしはあなた方、天地穹女神のプロデューサーよ」

「でも、ただのプロデューサーの腕前じゃないわよね？」

厳しく追及するユリシアに、マリスは薄く微笑んだ。

「いいえ。ただのプロデューサーよ。元は征伐軍にいたけど」

征伐軍は、主に貴族で構成される親衛隊とは違い、一般市民やバトランティスに吸収された国々の人々で構成された軍隊だ。

「そこで多くの友人を失ったわ……って、あたしの身の上話なんてしてる場合じゃないの！　さあ、急ぐわよ！　付いて来て！」

下着姿のユリシアにステージ衣装を投げつけると、マリスは廊下へ飛び出した。

「ちょ……マリス？　あんた……」

「四の五の言わない！　走った、走った！」

何がどうなっているのか、さっぱり分からない。しかしマリスの勢いに吸い寄せられるように、ユリシアは廊下に飛び出した。ステージ衣装を抱えてマリスの後を追う。そしてその後を、姫川とシルヴィアが追いかけた。

「あ、あの、マリスさん。シルヴィアたちをどうしようというのデスか？」

背中に投げかけられた質問に、マリスは足を止めずに答えた。

「この戦争は無意味だわ。創世の御柱が倒れるか否かというときに、こんな争い何にもならない」

細い階段を下りながら、姫川は訴えるように言った。

「それは分かります。でも、争いを止めるなら、私たちも戦場に出て戦わないと」

「なにバカなこと言ってるの！　あなたたちには、もっと強力な武器があるでしょ！」

「……え？」

狭く暗い通路を抜けると、いきなり視界が開けた。

大きなステージ。沢山のライト。巨大なスピーカー。広い観客席には、座席がみっしりと詰め込まれている。

「ここは……ステージ？」

マリスは天地穹女神を振り向くと、両手を大きく広げた。

「あなたたちがやることはただ一つ！　ステージでお客さんを楽しませる事よ！」

しかし観客席には誰もいない。劇場全体が、がらんとしていた。

「お客さんって……さっきみんな帰ったじゃありませんか」

マリスは不敵な笑みで三人を睨み付けた。

「客はゼルティス全市民！　それと今外で殺し合いをしているバカ共全員よ！」

天地穹女神の三人は驚きのあまり、しばらくマリスの顔を見つめた。

「いい？　今、ゼルティスの全市民がパニックになっている。恐怖に取り付かれた群衆は何をしでかすか分からないわ。それに頭に血が上っている戦闘員たちもそう。戦闘の恐怖に、何も考えられず、なぜ戦うのかも分からずに戦っている。そんな連中に、落ち着きを取り戻させるのよ、あなたたちの歌で！」

マリスが指を鳴らすと、ステージの照明が一斉に点いた。

三人の前に、まぶしい光に照らされたステージがキラキラと輝いている。美しいお城をデザイン化した大掛かりなステージだ。段々になって、一番上の段はビルの三階ほどの高さになる。

三人はこのステージを感慨深く見上げた。この数ヶ月、三人とマリスで力を合わせて戦ってきた戦場だ。敵国の人々に対してではあるが、夢と楽しさを振りまいてきた。それは牢獄から逃れる為であったし、この国での自由や影響力を手に入れる為でもあった。また、プロパガンダとして地球へ行ったときに、脱走や情報を流出する機会もあるだろうという打算の為だった。

それだけだったはずなのに。

今ではこのゼルティスの人々に死の危険が忍び寄っていると思うと、心が痛い。

それは言葉に出さなくとも、三人が同じく心に感じた痛みだった。

「……でも、出来るデスか？　シルヴィアたちに」

不安そうに見上げるシルヴィアに、マリスは可笑しそうに微笑んだ。

「あなたたち以外の誰に出来るのよ？　あなたたちは、このあたしがプロデュースした、スーパースターなのよ！」

ユリシアが挑戦的な笑いを浮かべた。

「面白いじゃない。わたくしたちのエンターテインメントが勝つか、魔導兵器や銃弾が勝つか。勝負してやろうじゃないの」

姫川もうなずいた。

「そうですね。いま私たちに出来ること……私たちにしか出来ないこと。それをやりましょう。全力で！」

「シルヴィアは……」

そのとき、シルヴィアの脳裏に病院で再会したラグルスの姿が蘇った。自分が東京で打ちのめしたせいで、記憶と人生を失ってしまったラグルス。

シルヴィアの歌とダンスが大好きと笑った、あのまぶしい笑顔が目に浮かぶ。シルヴィアは拳を握りしめた。

「シルヴィアも頑張るデス！　絶対に守ってみせマス！」

「OK！　じゃあ、急いで準備して！　もうお仲間も待っているみたいだしね！」
「お仲間って、まさか……」
ユリシアが顔をしかめると、大きな声がステージの上から聞こえてきた。
「おっそい！　何やってたのよ！」
マスターズが、ステージの一番上の段から見おろしていた。センターでは腕を組んだスカーレットが得意げに胸を反らせている。
「こっちはとっくに用意が出来てるんだからね！　天地穹女神は二番手、このマスターズが一番乗りよ！」
スカーレットはユリシアに向かって、びしっと指を差した。
天地穹女神の三人は顔を見合わせると、思わず噴きだした。
「ちょ……何が可笑しいのよ！　こらっ、笑うな！」
笑いすぎて滲んだ涙をふきながら姫川が答えた。
「申しわけありません。スカーレットさんの言う通り、今回はマスターズが一番です」
「はいデス！」
「そうね。あんたたちの能天気さはある意味最強だわ」
スカーレットは微妙な顔をすると、マスターズの仲間を振り返った。
「ねえ、あれってどういう意味だと思う？」
「そりゃ褒めてるんだろ？」
「そうですか？　どこか皮肉めいている気も……」
マスターズがチーム会議をしている間に、マリスはスタッフと話をしていた。
スピーカーから、サウンドチェック用のデモが流れ始める。よく見ると、少ないながらも照明や音響のスタッフがいる。恐らくマリスと想いを同じくした人たちなのだろう。
「放送準備はOK？」
マリスが大声でスタッフに確認をしている。
「いつでも行けます！」
「それじゃ、セットリストはこの前のジョイントライブと同じで行くわよ！」

「了解したわ！　まかせといて！」
ステージの上の段からマスターズが手を振った。
「こっちも問題ないわ」
ステージ衣装を着て自信満々に答えるユリシアの前に、マリスがやって来た。
「じゃ、始める前に邪魔な首輪を外しておきましょうか」
そう言ってマリスは、ユリシアの首に手を伸ばした。
「……へ？」
マリスが口の中で何かをつぶやくと、魔力を抑えるためユリシアの首にはめられていた首輪が乾いた音を立てて割れた。
「……」
床に落ちる首輪を、ユリシアは真っ白になって見つめていた。
今までどうやっても壊せないし、外すことも出来なかった首輪。それが、いとも簡単に外れた。ユリシアが、わなわなと体を震わせた。
「マ……マリス、あんた……」
同じく首輪を外された姫川とシルヴィアも、呆然として佇んでいた。開いた口がふさがらない。
「こ……これ、外せたデスか⁉」
「どうして……だ、だって、マリスさんには外せないはず……」
マリスは頭をかきながら、舌をぺろっと出した。
「ごめん。あれ、うそ」
「「「えええええええええええええええええええええええ⁉」」」
三人は声を揃えて絶叫した。
「ガッデム！　あんたねえぇっ、ごめんじゃないわよおおおおおおお！」
「騙されましたあああああああああああああ！」
「もう信じられないデスぅぅぅぅぅうっ！」
叱られている子供のように、マリスはそっぽを向いて口を尖らせた。

「だーって、それしておかないと。あなたたち絶対無茶して、捕まるか殺されるかしちゃうもん。仕方がないでしょ」

「……納得いかないっ！」

マリスは何とかごまかそうと、手を叩いてスタッフの注意を引いた。

「さあ！　ふてくされてないで、行くわよ！　戦争をしているバカ共を驚かせてやりましょう！　オンエア開始よっ‼」

◇　◇　◇

アタラクシアに随伴する五百メートル級の中型艦アールズが黒煙を上げた。

「アールズ！　乗組員は総員退避しろ！」

怜悧が叫ぶと同時にアールズが爆発を起こす。何重にも重なった光の輪が広がり、爆発の煙と共に光となった船の破片が空に広がる。それはさながら空に咲いた大輪の花火のようだ。しかし、見惚れることも喜ぶことも出来ない。

怜悧の前に新しいフローティングウインドウが立ち上がる。

『こちらアールズ艦長。乗員は全員脱出しました！』

魔導装甲を身に付けた、茶色い髪の女性が悔しそうな表情を見せた。その背後には、遠ざかるアールズの爆発が映っている。

「ご苦労だった。これよりアタラクシアの防衛に回ってくれ」

『了解！』

そのときアタラクシアが大きく揺れた。

「何事だ⁉」

ケイがすぐに状況をキーボードに打ち込んだ。

『右舷のシールドが限界。あと十発も喰らったら終わり』

「アタラクシアの向きを百八十度反転！　砲撃の手は休めるなよ！」

怜悧の頬に冷や汗が流れる。

——元より多勢に無勢。パトランティスは圧倒的な物量を誇っている。単純な戦力差なら、パトランティス百に対し、こちらは十といったところか。

それでも愛音が術式解体で敵の主力艦をほとんど消し去ってくれたのが救いだ。それでなければ、まったく勝負にならなかっただろう。

「とはいえ、厳しいことに変わりはないがな……」

敵も慣れてきたのか、魔導兵器による波状攻撃をくわえつつ、その合間に艦隊からの砲撃が襲ってくる。自分たちの砲撃で味方の魔導兵器を撃ち落とすことも厭わないほどだ。

「パトランティス軍も必死ということか……」

怜悧はコンソールに手を滑らせ、新たに回線を開く。

「ガートルード、そちらの状況はどうだ」

『どうもこうもねえですよ！』

ガートルードはアタラクシアの至る所を飛び回っていた。フローティングウインドウに映る怜悧に視線を合わせる余裕もない。返事をしながらも、魔導兵器を撃ち落とすのに必死だった。

「とにかく敵の数が多すぎでいやがります！　魔導兵器でも何でもいいんで、少しこっちへ回してもらえねえですかね！」

『いまアールズの乗組員をアタラクシアの護衛に当てた。もうしばらく頑張ってくれ』

「了解でいやがります！」

ガートルードは拳銃のカートリッジをリロードすると、再び構えた。

「今しばらく……ですか」

そしてアタラクシアの甲板に着艦しようとした魔導兵器に向かって、引き金を引く。

「傷無の旦那は、ちゃんと城に辿り着けやがりましたかねえ……」

◇　◇　◇

その頃、傷無は迷路のような地下道を走っていた。明かりはないが、岩を掘り抜いた地下道だった。壁は岩肌が剥きだしだが、床は石のブロックが敷かれている。壁に生えたコケがほんのりと発光して道を照らしていた。

「愛音、この道で間違いないのか？」

「ええ」

愛音は自信満々で進んでいるが、傷無にはどこをどう走っているのか分からない。石を積んで作られた迷宮は、幾つにも道が分岐し、進んでいるうちに方角も分からなくなる。本当に王城へ向かっているのか、傷無は不安だった。

「見えているのよ。正しい道筋が」

「え？」

愛音は走るペースを落とし、傷無の方を向いた。

「秘密の入り口に入るときに唱えた呪文。あれが扉を開くと同時に、道を案内する魔術になっているの。あたしの目には、行き先案内の表示が常に見えているのよ」

「なるほど……そうだったのか」

安心すると、傷無は走るペースを上げた。

「しかし、こう狭くて曲がり角が多いと、スラスターで飛んで行けないのがじれったいな。一刻を争うっていうのに」

傷無はきっと艦隊戦を展開しているであろうアタラクシアと、敵の足止めのために残してきたグラベルとアルディアのことを思った。

――無事でいてくれよ……すぐに、戦いを止めてみせるからな！

◇◇◇

アルディアは飛んできた光の矢を、すんでのところで避けた。しかし、通り過ぎた矢は大きく弧を描き、方向を変えてアルディアに向かって襲いかかる。

「あなたの弓は、面倒くさいわね！」

親衛隊二番隊隊長メルクリアが弓を構え次々と矢を放っている。

「ふふふ。この『魔弓弾導』の前では、お前は槍の間合いにすら入ることは出来ないぞ」

自動追尾機能のある矢が、次々と飛んでくる。

「まったく……きっと持ち主が陰湿な性格なのね」

「貴様に性格を云々言われたくないな！　アルディア！」

新たな矢が魔弓弾導から放たれた。

まっすぐに飛んできた矢が、空中で突然はじけた。

「!?」

十数本に分裂した矢が、アルディアを取り囲むように襲いかかる。

メルクリアはにやりと微笑んだ。

――いくらお前の楯が強固でも、この数は防ぎようがあるまい！

アルディアの周りに浮かぶ六枚の楯。その内の一つが槍の形に変形し、アルディアの手に納まった。すかさずその槍を一閃する。

「なっ!?」

その瞬間、アルディアの目の前の空間が歪む。アルディアを狙って飛んでいた矢が見えない力に引っ張られたように、アルディアから離れて行く。

「く……ゼエルの空間湾曲能力、か」

「はっ！」

アルディアが再び槍を振るうと、今度はメルクリアまでの間合いが一気に縮まる。

――なっ!?

一瞬で目の前にアルディアが現れた。空間を縮めた槍が、今度はメルクリアを襲う。

「ぬ！」

振るわれた槍を、弓の刃でかろうじて受けた。

すかさず弓を回転させ、アルディアに斬りかかる。刀のような刃で出来た弓は、アルディアの腕を斬り裂き、血

が飛び散った。

しかし同時に槍の先がメルクリアの太ももに触れた。空間湾曲の効果で足に引っ張られるようにして体が吹き飛ぶ。斬り裂かれた太ももから噴き出した血が、アルディアの体を赤く染めた。

「おのれっ！」

吹き飛ばされた体をスラスターで制御し、メルクリアは空中で踏みとどまった。

ふふっと楽しそうに笑うと、アルディアは誇らしげに胸を張る。

「私の血とあなたの返り血で、素敵なドレスになりそうね……ふふふ」

メルクリアは、その言葉に顔をしかめた。

「アルディア……相変わらずの狂戦士ぶりだな。もし貴様がまともな人間であれば、小隊長にもなれたであろうに」

いかにも残念そうなメルクリアを、アルディアは鼻で笑った。

「そんなものに興味はないわ。私は自分の好きに生きたいだけ。自分の小さな価値観を押し付けるのはやめてもらえないかしら」

メルクリアの口元が、微かにゆるんだ。

「確かにな……ふふ。私もその気持ちは良く分かる。だが……」

メルクリアは弦をつまむと、ゆっくりと腕を引く。現れた矢は今までのものとは趣が違った。はるかに大きく、長い。まるで騎兵の槍のようだった。

アルディアもその異様な矢に警戒心を抱いた。

――あれは？　ただの矢じゃないのは確か。どんな能力が？

メルクリアの巨大な矢が放たれた。それは矢というよりは大口径の粒子砲だった。

「貴様は自由すぎるんだよ。アルディア」

――これは⁉

暴力的なまでの光がアルディアに向かって飛んで来る。

「立方次元迷路！」

六枚の楯が、あっという間に立方体へと姿を変え、アルディアの前に浮かんだ。メルクリアの放った矢が、その立方体へ吸い込まれた。

立方次元迷路は空間を歪める楯で出来た立方体だ。全ての面の空間を歪め、外界から独立した空間を作り上げる。それにより、立方次元迷路の内部はアルディアの意思が全ての絶対空間となる。中に吸い込まれたものを閉じ込めるのも、切り刻むのも自由自在だ。

しかし、魔弓弾導の放った矢は、立方次元迷路の内部で強烈な破壊力を持って暴れ回った。立方次元迷路が激しく振動し、楯が苦しげな軋みを立てる。

「くっ、こんなの……もう、限界！」

たまらず立方次元迷路の出口を開ける。四方に向かって、凄まじい輝きが走った。

明滅する光が徐々に消え、立方次元迷路は内部に閉じ込めた魔弓弾導の矢のエネルギーを全て吐き出した。

「こんな破壊力を持った矢があるなんて、驚き――」

メルクリアが再び同じ矢をつがえているのを見て、アルディアは言葉を失った。

「悪いが、矢はいくらでも用意出来る。それに魔弓弾導は矢を変えるだけで、様々な能力を持つ武装へ変化する。貴様にどこまで対応できるかな？」

アルディアは冷や汗をかきながら、不敵に笑った。

「やっぱり守りじゃダメみたいね。じゃ、こちらも攻めて行くわ」

立方次元迷路を分解し、今度は全ての楯を槍に変形させる。アルディアは体の周りに六本の槍を浮かべた。

「いくわよ、二番隊！」

「とどめだ、狂戦士！」

二本目の巨大な光の槍が、空を貫いた。

その輝きは、ハーキュラスと鍔迫り合いをしていたグラベルの目にも映った。

お互い押し合うようにして、一旦距離を取る。

「あの輝きは……」

「メルクリアの魔弓弾導よ」

「なるほど、あれが魔弓弾導のメルクリアか。噂には聞いたことがある」

ハーキュラスは自慢気に微笑んだ。

「メルクリアは強いわ。アルディアが殺されないうちに、あなたも投降しなさい」

「アルディアを殺してくれるのか……それはそれで清々するかも知れんな」
びっくりした顔でハーキュラスが声を震わせた。
「あっ、あなた、仮にも仲間でしょう！　なんてことを——」
グラベルは苦笑いで、銃剣の切っ先を下げた。
「だが、貴殿のことは知っているぞ。剣聖と謳われた一番隊の隊長ハーキュラス殿。このような状況ではあるが、こうして剣を交えることが出来るのは望外の喜びだ」
「余裕ですね、褐色の獣」
落ち着いた振りをしていても、ハーキュラスは自分の心が乱れるのを抑えられない。
グラベルは辺境の英雄で歴戦の勇士。パトランティスの軍門に降ってからも、彼女の第六征伐軍は無敗を誇っていた。
ハーキュラスの喉がごくりと鳴った。
実力で負けるはずはない。そう思ってはいるけれど……でも、何でこんなに心が落ち着かないの？
ハーキュラスは下唇を噛んだ。
正直言って、相手が怖い。じわりと涙が込み上げてくる。
ハーキュラスは剣を握る指に力を込める。己が最も頼りとする、幅広で魔術文字の刻まれた剣を構えた。そして
いつもと同じように、心の中で自分に言い聞かせる。
——がんばれハーキュラス！
「行きますよ褐色の獣！　我が剣『聖栄光剣』の露と消えるがいい！」

ハーキュラスはグラベルに向かって、聖栄光剣を振り上げた。
「受けて立とう」
グラベルの銃剣のリボルバーが回転し、弾丸がロードされる。
「はあっ！」

遥か遠い間合いから、気合い一閃、ハーキュラスの聖栄光剣が振り抜かれる。すると剣から粒子砲のように光の帯が撃ち出された。

グラベルは銃剣の引き金を引いた。銃口から、大口径の粒子砲が発射される。二つの光が空中で激突した。まばゆい光の爆発と共に、花火のように光の粒子が飛び散る。それを目くらましに、ハーキュラスが一気に飛び込んでくる。

「でやあああっ！」

煙を斬り裂き、聖栄光剣が振り下ろされた。銃剣の腹で受けると、激しく火花が散った。鋭い一撃だ。グラベルの胸の内にぞくりとしたものが走る。

休む間もなく、素早く回転するようにハーキュラスは剣を振るう。貴族出身の親衛隊らしく、踊るように優雅で美しい剣技だ。

グラベルは奥歯を噛みしめた。

――だが美しいだけではない。この強さは本物だ。

グラベルはリボルバーを回転して新しい弾丸をロードする。

「光刃斬！」

銃剣から光の剣が伸びる。

「!?」

ハーキュラスは間一髪で光の剣を避けた。逃げ遅れた髪の毛の先が切断され、金色の髪が宙に舞う。

「……つっ！」

ハーキュラスは自分の剣が相手に届かないことに衝撃を受けた。わずかに動きが鈍った隙に、グラベルは距離を空ける。

「出し惜しみをしていては勝てないか」

グラベルは銃剣を背中にしまうと、片手を伸ばした。その指先に魔法陣が展開し、その中から剣の柄が姿を現す。無造作にその柄を掴むと、魔法陣の中から新たな武装を引き出した。六本の銃身が円形に並び、その中心に十字形の剣を備えた武装、『銃剣奇環』。グラベルの魔導装甲ゾロスの背徳武装だ。

強力な武装ではあるが、グラベルにとっては賭けだった。銃剣奇環は銃剣以上に振り回しづらい武器だ。接近されれば、ハーキュラスの剣撃を防ぐのは難しい。

――勝負。

お互いが仕掛けようとした、その時――、

『緊急通信です！』

グラベルとハーキュラス、双方の通信ウインドウが開いた。

出鼻をくじかれ、両者とも決まりが悪そうにウインドウに返事をする。

「こちらグラベル。どうした？」

アタラクシアのオペレーターの女の子が、慌てた様子でまくし立てる。

『アタラクシアとイズガルド艦隊の被害甚大！　艦隊の三分の一が撃沈！　保有魔導兵器の半数が撃墜されました！　アタラクシアのシールドも持ちません！　至急、援軍を！』

「くっ……」

グラベルの奥歯が、ぎりっと音を立てた。

「グラベル！」

そこへアルディアがやって来た。

「アルディア……随分、やられたな」

アルディアは血濡れた笑顔で嬉しそうに答える。

「へへへ、いいでしょ？　半分は返り血よ」

顔も、服も、血でべっとり濡れている。半分は返り血だと言っているが、腕や足に切り傷も見え、かなりダメージを受けていることが見て取れた。

「それよりもアタラクシアがまずい。応援に行かなければ」

ハーキュラスの許にもメルクリアがやって来ていた。

「だ、大丈夫!?　ひどい傷よ？」

「余計なお世話だ。この程度、何でもない」

メルクリアも、アルディアと同じくらいに傷を負っている。悔しげに顔を歪めると、吐き捨てるように言った。

「な、なによ！……って、そんな場合じゃないわ。グラベル、あなたのところにも緊急の通信が入ったのでしょう？

もうすぐあなたの旗艦が落ちるわ」
「そうか？　こちらはまだ余裕があるという報告だったが？」
ハーキュラスは、ふうと息を吐いた。
「降伏しなさい。グラベル」
「……残念だが、今の私は指揮官ではなくてな。ただの魔導騎士だ」
「そう……だったら、艦隊を助けに行かなくても良いの？　我々も、アイネス様を追わなければならないから、どいてくれると助かるわ」
「……く」
平然とした顔を装っても、グラベルの胸の中では焦りが渦巻いている。
ここでハーキュラスたちの相手をしていては、アタラクシアが落ちてしまう。だが、アタラクシアを助けに行けば、愛音がグレイスを説得するという作戦に邪魔が入る。
その間にも、戦況を伝えるデータから味方の戦艦の姿が消えてゆく。
──くそっ！　ここまでか⁉
『ハァイ★　みんなーっ！　元気にしてるーっ⁉』
グラベルの顔の前に、ウインクをするユリシアのアップが突然現れた。
「ユ……ユリシア⁉」
驚いたのはグラベルだけではなかった。顔を上げると、アルディアはもちろん、ハーキュラスとメルクリアの前にも同じウインドウが表示されている。
ユリシアはキラキラした派手なステージ衣装を身にまとっている。そしてカメラが引くと、姫川とシルヴィアの姿が画面に飛び込んできた。
『天地穹女神です！』
『それとぉ～』
三人は紹介をするように片手を横に差し出す。
『マスターズでーす！』
今度はスカーレットをセンターに、ヘンリエッタ、クレメンタイン、シャロン、レイラのマスターズが並んで登場した。当然のように、きらびやかで可愛らしいステージ衣装を身に着けている。
「な、何なの……この非常時に、こんな能天気な……」
ハーキュラスは呆れたというより、呆然とした顔でつぶやいた。
グラベルがアタラクシアの通信ウインドウを覗くと、アタラクシアの艦橋にも同じ映像が送られているのが分かった。惚けてスクリーンを見上げている者、通信の出所を探って右往左往している者が入り乱れている。
怜悧は口元をさすりながら、難しい顔でつぶやく。
「この放送は一体……何だ？」
ケイがデータを収集しながらキーボードを叩く。
『これは、双方向の通信じゃない。恐らく、この全戦闘領域の全通信端末に向けて、一斉配信されている』
「何だと……？」
ケイの報告通り、この放送は全ての戦闘領域、さらにゼルティス内の全ての通信端末に向けて配信されていた。
個人用、公共用問わず、全ての情報インターフェイスに割り込み、強制的にウインドウを開かせている。
これはパトランティス宣伝局が管理している、緊急用ブロードキャスト回線を利用したものだった。すなわちマリスの職権乱用である。
アタラクシアとイズガルドの連合軍、パトランティス軍、ゼルティス市内の全ての画面に天地穹女神とマスターズの姿が映し出されている。
その画面の中で、ユリシアは意地悪そうな笑みを浮かべた。
『みんなー本当は心の中では思ってるんでしょ？　殺し合うのなんかいやだ、何でこんなことしなきゃならないんだーって』
姫川が手を合わせ、真摯なまなざしを真っ直ぐに投げかける。
『こんな戦いは無意味です。それは皆さんも本当は分かっているはずです。こんな争いをするよりも、力を合わせてこの世界の危機を乗り切る方法を考えましょう。イズガルドとレムリアの人たちだって、この世界が崩壊したら困るはずです。だからこそ、無理をしてゼルティスにやって来たのではないでしょうか』
シルヴィアが両手を握りしめ、必死な顔で訴えた。
『まず話を聞いてみるデス。それで、イズガルドやレムリアの皆さんがゼルティスを侵略するつもりでしたら、そ

のときケンカすればいいデス』
クレメンタインが頭をかきながら上を向いた。
『と言っても、頭に血が上ったヤツには聞こえないかもなー』
スカートの裾をふわりと広げ、シャロンがくるりと回転する。
『いつも通りにしてみるといい……お気に入りの服を着て。親しい人と一緒に過ごすの……お話しして、自分はどうしたいのか、どうするのが一番いいのか……考えて』
いつもとは違う、真面目な声色でレイラが話す。
『そうね。みんな親しい人には無事に帰ってきて欲しい。戦場にいる人だって無事に帰りたい。それは当たり前のことよ？　だって、命はお金じゃ買えないもの』
メガネの位置を直しながら、ヘンリエッタが前に出る。
『とにかく、慌てたり興奮したりしてパニックをおこさないこと！　兵士だけでなく市民のみなさんも、落ち着いて行動するように。間違っても暴動なんてみっともない真似はしないでね！　堂々とした態度で、客人を迎え入れましょう』
うつむいていたスカーレットが顔を上げ、片手を上げ天に向かって指さす。
『だって、あなたたちは誇りあるバトランティス帝国民でしょ？　そして、何よりも……』
勢いよく腕を振り下ろし、画面に向かって指をさす。
『このあたしたちのファンなんだから！』
天地穹女神とマスターズの後ろで花火が上がった。魔術で作った花火は、七色に光る破片となってステージ上に降り注ぐ。そして照明がステージを照らし出し、アイドルたちの姿を浮かび上がらせた。
天地穹女神とマスターズの八人の声が揃い、イントロの歌声が聞こえると、合わせるように音楽が流れ始める。メロディーが始まった瞬間、八人が大きくジャンプした。
全身で楽しさと、喜びを表現するかのように。
無人のバトランティス帝国劇場に魔力の光が縦横無尽に駆け巡る。キラキラと反射する光の粒が降ってくる。光の演出がステージ上を盛り上げ始めた。そしてバトランティス帝国民を魅了した歌声が、ゼルティス全市と全戦闘領域に響き渡る。

ゼルティスから逃げだそうと、城壁に押し寄せていた人々の足が止まった。
「この歌は天地穹女神とマスターズ？　こんな時にライブをやってるのか？」
「いい歌ね……聞き惚れちゃう」
「聞いてなかったの？　いま帝国劇場でライブやってるんだって」
「えっ⁉　中止じゃなかったの？」
「こんな非常時にやるわけないだろ？」
個人用の受信機を持っている市民が、近くにいる人にライブの画面を見せた。
「いや間違いなく生放送だよ、これ。でも天地穹女神がライブやってるんだよ？　そんなに慌てて逃げなくたっていいんじゃない？」
「確かに……そんなヤバい状況だったら、天地穹女神がライブなんてやるわけないし……」
市内は徐々に落ち着きを取り戻していった。歌とダンスに魅了され、みんな画面に釘付けになっていた。子供が映像を見て、ダンスを真似て踊り出す。それを見る人々の顔に微笑みが戻ってきた。そして大人たちも曲に合わせて腕を振り、飛び上がる。
その人混みの中を、一人の少女がくぐり抜けてゆく。
「ちょっと、あんたどこへ行くのよ！」
心配した人が声をかけると、少女が足を止めた。大きくロールしたツインテールが特徴的な、小柄な少女だった。幼く見える可愛らしい顔に、期待で一杯の笑みを浮かべた。
「帝国劇場よ！　天地穹女神の貸し切りステージだなんて、見逃せるわけないじゃない！」
そう叫ぶと、きびすを返して人の流れとは逆の方向に走ってゆく。
元親衛隊。東京奪還作戦の折にシルヴィアと戦い、記憶を失った少女ラグルスは、楽しみで仕方がないという笑顔で走った。
その笑顔を見て、その場にいた天地穹女神とマスターズのファンは、はっと気付いた。
「そうか……今行けば、このステージ、観られるのね」
「くそぅ、公演中止って言われて追い出されたけど……やってるじゃないの！」
その言葉に触発され、同じように公演中止の連絡を受けて会場から出て来たファンが後に続いた。一度帰りかけ

た観客が、帝国劇場へ続々と戻ってゆく。さらにはチケットを持っていない人間も、今ならタダで入れるのではないかと思って、どんどん集まってきた。ゼルティス市民の心は、既に戦闘の方向には向いていない。
帝都ゼルティスは、今や天地穹女神とマスターズに完全に制圧されていた。

◇　◇　◇

パトランティス側の最前線に陣取る第一征伐軍も、今まさに選択を迫られていた。
『こちら親衛隊。第一征伐軍、なぜ砲撃を止めた？　場合によっては軍法会議ものだぞ！』
その通信を、第一征伐軍の隊長は憮然として聞いていた。
「隊長、どういたしましょう？」
副隊長にそう迫られても、隊長は長い髪をいじるだけで返事をしない。旗艦の艦長席に深々と座り、目の前のウインドウで流れている天地穹女神とマスターズのステージを、ただ眺めていた。その歌と踊りは、戦いに疲れた心を癒やしてくれた。
「選びようもないわ。でも……」
「でも？」
口の重い隊長に苛立ち、副隊長は先を促した。
「正直、もう戦意を喪失しちゃったわよ。まあ、それが答えかしらね」
副隊長は回れ右をすると、艦隊に指示を送った。
「第一征伐軍、全艦に告げる。レムリア・イズガルド軍には絶対に手を出すな！　但し警戒を怠らないように！　いつでも戦闘が再開できるようにしておけ！」
同じようなやりとりが、征伐軍の艦隊のあちこちで起きた。そしてパトランティスからの砲撃が、次々と止んでゆく。
その様子を、ハーキュラスは信じがたい思いで見つめていた。
「一体、何をしているの……彼らは」
グラベルは戦況を伝える画面を見つめ、目を細めた。
「彼らなりの答えだろうよ」
「そんな……」
この戦いは皇帝陛下のご命令によるもの。このゼルティスに侵略して来た敵を倒すためのもののはず……それがどうして、こんなことに？　なぜ、征伐軍が命令を聞かない？
——分からない。
瞳に涙を溜め、ハーキュラスは肩を震わせた。
「ハーキュラス。お前も分かってくれないか？　我々はパトランティスを支配しに来たのではない」
聖栄光剣を握る指に力を込め、ハーキュラスは震える声で答えた。
「たとえ帝国民がどう思おうと……我ら親衛隊は皇帝陛下の御心のままに！　アイネス様がご乱心遊ばされた今、グレイス様からのご命令がなくば、我ら親衛隊、剣を納めることはできません！」
ハーキュラスは通信ウインドウを開いた。
「全親衛隊隊員に告ぐ。征伐軍は役に立ちません。親衛隊の手で、レムリア・イズガルド軍を討ちます！　全艦前へ。敵艦隊を討ち滅ぼしなさい！」
命令に従い、ゼルティス上空に待機していた親衛隊の戦艦が動き出す。前線に並ぶ征伐軍の艦隊を追いやるように、アタラクシアに向けて進んでいった。
「親衛隊員も魔導装甲を着装の上、出動のこと。三番隊、四番隊は敵旗艦を沈めなさい。一番隊、二番隊は王城へ戻りグレイス様をお守りするのです！」
「ハーキュラス！」
グラベルが呼び掛けるが、ハーキュラスには届かない。
「この程度では、私と親衛隊の価値観は揺るがないわ」
グラベルはアタラクシアとの通信ウインドウに向かって叫ぶ。
「レイリ、気を付けろ！　親衛隊が向かっているぞ！」
アタラクシアでも、接近する艦影を捉えていた。明らかに今までの戦艦より動きが速い。それに統率も取れている。
敵の動きを見ながら、怜悧は舌打ちをした。

「今までの敵とは格が違うな……親衛隊が出て来たか」

数は少ない。せいぜい戦艦二十隻程度に、魔導兵器が二百機といったところだ。だが、今まで相手をしていた征伐軍よりも格段に手強いだろう。

足の速い魔導兵器と、間もなく接触する。指示を出そうとした怜悧を突き飛ばすように、アタラクシアが大きく揺れた。

「どうした⁉」

怜悧の質問に、オペレーターやケイではなく、甲板にいるガートルードが答えた。

『戦艦が砲撃してきやがりました！　狙いは正確ですし、威力も段違いでいやがります！』

甲板にいるガートルードはたまったものではないだろう。シールドがあるとはいえ、間近で砲弾が爆発するのだ。その音と衝撃は凄まじい。

遠くを見つめるガートルードが、引きつった笑いを浮かべた。

『うわー、よりにもよって、敵は魔導装甲まで出してきやがりましたよ……』

親衛隊員は自分の率いる戦艦を自動か、リモートで動かすことが出来る。ハーキュラスの指示どおり、自分は魔導装甲に身を固めてアタラクシアを目指していた。

『あれに来られたら……本当に、終わりでいやがりますねえ……』

『シールド限界。もって、あと二、三発』

そう言った側から、続けて衝撃波が襲った。オペレーターが泣きそうな声を上げた。

「前面シールド破られました！」

言い終わるより前に、今までとは比較にならない程大きな揺れがアタラクシアを襲った。船体が傾き、怜悧も椅子にしがみついた。

「奴らには……天地穹女神の歌声も届かんか」

『怜悧。高速で接近してくる部隊がある』

ケイの報告に、怜悧は覚悟を決めたように笑った。

「今さら何を。バトランティスの親衛隊だろう」

『違う』

「……なに？」

そのとき、魔導装甲がアタラクシアの艦橋に向かって突っ込んで来た。

どことなくネロスに似た形の魔導装甲は、剣を片手に向かってくる。直接艦橋に乗り込んで、乗組員を攻撃するつもりだ。

その魔導騎士が剣を構え、にやりと微笑んだ。

「覚悟しろ。レムリアの――」

その体が吹き飛んだ。

いや、巨大な爪につかまれて、一瞬で魔導装甲が砕け散った。

「な……」

怜悧は何が起きたのか理解出来なかった。

窓の外を金色の装甲が流れてゆく。いつまでたっても通り過ぎないことから、その物体が恐ろしく巨大であることが想像できた。

やがてその物体は、アタラクシアの前方へと姿を現す。大きく持ち上げた、長さ百メートル以上はある長い首。金色に輝く四枚の翼。首の二倍はある、巨大な尻尾。

バルディーンの切り札、『黄金竜帝』だ。

「こ……これは……」

その姿を怜悧は呆然として見つめる。

黄金竜帝は親衛隊の戦艦に向かって口を開いた。翼が輝き、金色の光が竜の胴体へと集まってゆく。そして、激しい輝きと共に、口から膨大な量の粒子を吐き出した。それは巨大な粒子砲だ。光が爆発したと思ったときには、親衛隊の戦艦が貫かれていた。

戦艦は大爆発を起こし、光の破片をまき散らしながら沈んでゆく。

その様子を見ていたグラベルは、目を細めた。

「……来てくれたか。バルディーンの竜型部隊」

グラベルが空を見上げると、いつの間にか、竜の形をした魔導兵器が群れをなして飛んでいた。ハーキュラスは悔しそうに唇を噛んだ。

「この程度の援軍が何だというの。行くわよ、褐色の獣！」

ハーキュラスは剣を構える。その背後で、メルクリアは矢をつがえた。そして、二人の連係攻撃がグラベルに襲いかかろうとした、そのとき——、

上空から灼熱の炎が降ってきた。

「なっ⁉」

凄まじい圧力を持つ紅蓮の炎が、ハーキュラスとメルクリアを直撃した。

「きゃあああああっ！」

咄嗟にシールドを張ったものの、猛烈な衝撃に吹き飛ばされた。何とか踏みとどまり、上を見上げる。

「これは……」

グラベルも上空を仰ぎ見た。

三本の首を持つ影が舞い降りてくる。全長百メートル近い体に、赤く光るクリスタルの翼。カテゴリー超級の魔導兵器、三つ首竜だ。

「ほほほほほほ、この時を待っておりましたのよ！　ああ清々します！　何てすがすがしいのかしら！　いつぞやの屈辱、バトランティス軍にお返し致しましたわ！」

「これは指揮官ルレオ殿。随分とご機嫌だな」

三つ首竜の背中に乗った女性が、柔らかいウェーブのかかった水色の髪に指を絡める。

数ヶ月前、愛音の初陣としてバトランティスがバルディーンに遠征したことがあった。そのときルレオは、指揮官としてバトランティス軍を迎え撃った。しかし、その時はゼロスとコロスの能力の前に、なす術なく敗れ去っている。

「ほほほ、バトランティスに怨みを返すことが出来るのですもの。それは機嫌も良くなろうというものですわ！」

ルレオが腕を上げると、上空から竜騎兵などの竜型魔導兵器が、次々と降下してくる。

親衛隊員にとっては、その光景は悪魔が舞い降りたように映るだろう。

「ルレオ殿。怨みは分かるが殺すなよ」

「まあ失礼な。ちゃんと不時着できる程度に手加減するように言ってありますわ」

そして意地の悪そうな微笑みを浮かべる。

「おのれ……」

ハーキュラスとメルクリアは、憎らしげな目でルレオを見上げた。

「これからの人生を、このあたくしに敗北した記憶を大事に抱えて生きて頂かねばなりませんもの♪」

グラベルはあきらめたように首を振った。

しかし、これで親衛隊とも対等に戦える。だが、親衛隊を殲滅することが目的ではない。それよりも、一刻も早く創世の御柱の対処をしなければならないのだ。

グラベルは城壁のはるか彼方にそびえる、創世の御柱とそのふもとに構える王城を見つめた。

——頼んだぞ。キズナ、アイネス殿。

三章 虚無と死の対決

Hybrid × Heart Magias Academy Ataraxia

どうやら廊下のようだが、それにしては天井が高く、道幅も広い。壁の装飾も植物や人を象った手の込んだ造りだ。廊下ではなく、異常に細長いパーティ用のホールか応接室と言われても納得しそうだった。

「ここは……城の中か」

地下迷宮を抜け、やっと辿り着いた扉を開くと、そこは既に王城の中だった。初めて見る王城の内部を、傷無は物珍しそうに見回した。

「きっとグレイスは謁見室か……もしくは自室にいるはず」

愛音はきびすを返すと、迷うことなく廊下を走ってゆく。やや遅れて、傷無も後を追いかける。やがて突き当りに、高さ五メートルはあろうかという扉が現れた。彫刻が一面に施された重厚な扉だ。恐らくここが愛音の言っていた謁見室であろう。

扉は少し開いたままになっていた。気になるのは、亀裂が入っていることと、片方の扉が傾いて外れかかっていることだ。

「……何かあったらしいわね」

愛音は振り向くと、険しい顔で傷無を睨んだ。

「傷無は部屋の外で待っていて。絶対に中に入っては駄目よ」

「分かった……頼んだぞ」

愛音は緊張の面持ちでうなずくと、扉の隙間から部屋の中へ入って行く。

謁見室には人の姿はなかった。百メートル四方はある部屋は、がらんとして寒々しい空気が漂っている。窓が割れ、壁の至る所にヒビが入り、せっかくの精緻な天使の彫刻が粉々になっていた。床にも亀裂と幾つものへこみが

ある。

――ここで一体、何があったの？

愛音は玉座に向かって歩いて行く。部屋の中央まで来たとき、正面の階段の上に人がいるのに気が付いた。どうやら椅子の上で、手足を縮めて丸くなっているらしい。

「……グレイス？」

人影がぴくりと動く。

それっきりしばらく動かなかったが、やがてゆっくりと虚ろな瞳を向ける。

「ねえ……さま？」

「ええ、あたしよ。グレイス……ただいま」

グレイスは椅子の上に勢いよく立ち上がった。

「ね……姉様っ！」

そして転げるように、階段を駆け下りてくる。本当に転げ落ちるのではと、声を上げそうになった。しかしその前にグレイスは大きくジャンプし、赤い絨毯の上に着地する。そして愛音の前まで全力で走って来た。

「姉様あああっ！」

顔を涙でぐしゃぐしゃにしながら、愛音に飛びついた。

「グレイス!?」

愛音は妹の体を抱きとめた。グレイスは無我夢中で愛音に抱きついてくる。それは、その存在を確かめるようでもあり、消えて無くなるのを恐れるかのようでもあった。愛音は、妹の小さな背中を抱きしめた。

「大丈夫、大丈夫よ……グレイス。あたしはここにいるわ」

グレイスはしゃくり上げながら、愛音を呼び続ける。呼ばれる度に、その声が愛音の心に刺さった。ぐすぐすと鼻を鳴らしながら、やっとグレイスが愛音から体を離した。

「姉様。やっと戻ってこられたのじゃな……良かった。本当に良かった」

「グレイス……」

「馬鹿な者どもが、姉様が敵軍に与し、あまつさえ先頭に立っているなどと妄言を報告しよった。全く許しがたい愚か者共じゃ」

「あ、あのね、グレイス」

グレイスは愛音の二の腕をつかんだまま話しかける。

「だが、うるさい下衆どもがこのゼルティスに押し寄せてきておるのは本当じゃ。なあに、妾と姉様の二人であれば、蹴散らすことなど造作もない」

「だめよ、グレイス！」

「姉様？」

「違うの。イズガルドもレムリアも戦いに来たわけじゃないの」

グレイスは不思議そうな顔で姉の顔を見つめた。

「姉様、何を言っておるのじゃ？」

「パトランティスが攻撃を止めれば、彼らも攻撃しない。彼らは侵略しに来たのではなくて、創世の御柱を修復してこの世界を救うために来たの」

「正気か姉様!?　そんな話、信用出来ぬ！」

「本当なのよ、グレイス！」

グレイスの顔が曇った。

「姉様は……敵に洗脳でもされておるのか？」

「されてないわ、そんなこと！」

「ならばなぜ、妾に反対する？　なぜ、妾ではなく奴らの味方をするのじゃ！」

「それは……この世界を、救いたいと思って」

グレイスは、ぐっと息を飲み込む。

「妾のことは、どうでもいいとでも……」

「違うわ！　あたしはグレイスを助けたいと思ってる。でも、このままじゃ……」

「姉様は今までどこにいたのじゃ！」

愛音の体が、びくっと硬直する。

「……レムリアに、いたわ」

「レムリアに魔王を討ちに行ったのであろう？」

「ええ……そうよ」

「当然、討ち取られたのじゃな！」

「……負けたわ」

グレイスが驚きに口を開けた。

「姉様が、負けた？　冗談ではないのか？」

「本当よ。本当にあたしは全力で戦ったわ……でも」

「それで姉様は敵から逃げてきたのか？　いや、だが無事に妾の許に戻ってきてくれたのじゃ。今度は二人で力を合わせて、魔王を討とうということじゃな？」

愛音はうつむいて首を振った。

「グレイスに停戦の命令を出して欲しいの。今は戦争よりも、創世の御柱を修復するのが先だわ」

グレイスが愛音の腕を放した。よろけるように、愛音から遠ざかる。

「こんな……こんなの、嘘じゃ」

「待ってグレイス。誤解しないで。あたしはみんなを助けたいの」

「もう、妾のことはどうでもいいのじゃな。この世界よりもレムリアが……妾よりも、レムリアの魔王がいいのじゃな!?」

「何を言っているのよ!?　どっちが大切とか、そういうことじゃないの。このままじゃ、みんなが死んでしまう。グレイスだって助けたい！　だから――」

愛音はグレイスに手を伸ばす。しかし、グレイスはその手を思いっきり叩いた。

乾いた音が謁見室に響いた。

「嘘じゃ！　姉様は妾に嘘を吐いた！　妾を裏切った！　妾を捨てたのじゃ。一度ならず、二度までも……」

「違う！　違うわ、グレイス！　あたしは――」

「姉様が妾のものにならないのであれば、こんな世界願い下げじゃ！　滅びるならば、ちょうど良い！　砕けて、消えてしまえば良いのじゃ！」

「待って、グレイス！」

「コロス！」

グレイスの体がピンク色の光に包まれた。他のハート・ハイブリッド・ギアや魔導装甲の着装とは桁違いの輝きが放たれる。謁見室を光が満たし、そして一気にはじけた。

グレイスの体は全裸と見紛うほどだった。羽を象った飾りが、辛うじて胸の先と股の間を隠すのみ。そして両腕には爪のある装甲。両脚には金と銀の薄い装甲が装着され、かかとには天を翔るための翼が備わる。腰には尾羽のような装甲が宙に浮き、頭にはティアラが装着された。

そして背中に生える刃物でできた骨だけの翼を、大きく広げる。金と銀に彩られた、とても美しく、禍々しい翼だった。その翼を羽ばたかせ、グレイスの体が宙に浮く。

これがグレイスの魔導装甲、殺戮の天使『コロス』。

それはまさに、王者に相応しい魔導装甲だった。

「うわあああああああああああああっ！」

雄叫びと共に全身から魔力を放出する。それは凄まじい衝撃波となり、謁見室を揺さぶった。四方の壁が爆発するように吹き飛び、天井を支える柱が砕けて折れる。その衝撃波は、謁見室の外にいた傷無の体すらも吹き飛ばそうとした。

「……っ！　何て馬鹿力だ！」

魔力の波動だけで城を破壊してる。恐るべき魔力量の持ち主だ。

傷無は退避しようとしたが、まだ愛音が謁見室の中央で立ち尽くしているのを見つけ、思いとどまった。

「お願い、グレイス！　話を聞いて！」

グレイスに自分の気持ちを伝えようと、愛音は必死だった。しかしグレイスは、かんしゃくを起こしたように頭を振る。

「聞きたくない！　姉様なんか嫌いじゃ！」

愛音の胸がずきっと痛んだ。今までグレイスの口からは、一度も聞いたことのない言葉だった。どんなときも自分のことを好きだと言ってくれていたグレイスなのに。

愛音は無防備に両手を広げた。グレイスが飛び込んでくるのを待つかのように。

「落ち着いて、グレイス。あたしはあなたの味方よ……どんな時も」

「姉様もこの世も消えてしまえばいいのじゃ！」

宙に浮かぶグレイスは、上から殴りつけるように片手を突き出した。その腕から、魔力の光が飛び出す。爆発的な破壊力を秘めた拳が、愛音に向かって飛んだ。

「愛音!!」

扉の陰から傷無は飛び出した。愛音と絶頂改装を行っていた傷無は、ゼロスと同等の速度で謁見室を横切り、愛音の前に割り込んだ。

「傷無っ!?」

グレイスの光の拳が傷無に命中した。凄まじい閃光と爆発が傷無と愛音を包む。激しい爆発は床の石を砕き、剝がれた床が四方に飛ぶ。砂埃と蒸気の煙が立ち込め、視界を奪った。やがて砕けた壁から吹き込む風が煙を晴らす。その中から現れた姿に、グレイスは顔を歪めた。

「……レムリアの魔王」

絶対領域を展開し、傷無が愛音の前に立ちふさがっていた。

「まったく、大層な二つ名を付けてくれたもんだ」

傷無の前に張った絶対領域が砕け散った。咄嗟に張った絶対領域は五枚。その内四枚が一瞬にして砕かれた。ただ暴れた勢いで放った一発。いわば手を振ったら、たまたま当たってしまった、という程度の攻撃だった。

——それで、この威力かよ。

「レムリアの魔王、ヒダ・キズナよ。貴様が姉様をたぶらかしたのじゃな。貴様が姉様をかどわかしたのじゃな」

「違うんだ。愛音はレムリアとアトランティス、どちらも救いたいと——」

「愛音などという者はおらぬ!!　妾の姉様は、アイネス・シンクラヴィアじゃ!」

グレイスが手を振ると、手の平から光の粒子が発射された。まるでレーザーのような光は、先程放った一撃とは明らかにレベルが違う。

「——っ!」

傷無は愛音を抱いて地面を蹴った。大理石にも似た美しい石の床が、爆発を起こしたように砕け散る。ほんの一瞬前、傷無と愛音がいた場所をグレイスの放った光線が貫いた。その光は床に穴を穿ち、城の最下層まで突き抜けた。

傷無は愛音を胸に抱いたまま、スラスターを全開にし、壁の穴から城の外へ飛び出した。

「愛音!　交渉決裂だ。襲ってくるぞ!」

「そんな……でも、どうしたら」

愛音は瞳を伏せ、抱かれた傷無の胸に拳を押し付けた。

「姉様からその汚い手を離せ!　レムリアの魔王!」

グレイスが翼を広げて追いかけてくる。

「姉様を狂わした貴様だけは、世界が崩壊する前に、この手で殺さねば気が済まぬ!」

傷無は大きく旋回し、王城に幾つも屹立する巨大な尖塔の間を縫うように飛んだ。

「愛音、戦わない限り収まりが付かなそうだ」

「でも……」

「あの様子じゃ、言葉は伝わらない。でも戦って俺たちが勝てば、少なくとも話を言い聞かせることはできる。俺たちの思いを伝えるために……今は戦うしかない!　ケンカをしても、後で仲直りすればいい。だが、世界が崩壊したらそれも出来ないんだぞ!」

愛音はぐっと口元を引き締めた。

「分かったわ……あたしは絶対にグレイスを死なせはしない」

傷無は愛音を抱いていた手を離し、空中に留まった。尖塔の間をくぐり抜けて姿を現したグレイスは、愛音と傷無が待ち構えているのを見て、急停止した。さすがに警戒をしているのか、離れた位置から二人を睨み付ける。

「逃げても無駄と悟ったか」

グレイスの体から、魔力の光がオーラのように湧き上がった。

愛音は手の平を前にかざした。その指先から魔法陣が展開する。魔法陣の中に手を入れると、中からゼロスの唯一の遠距離攻撃武装を引っ張り出した。

——背徳武装『全時空粉砕』

「グレイス、あなたと戦うのはつらいけど……あなたを愛しているからこそ、今は戦うわ」

グレイスに狙いを付ける愛音に、傷無は顔色を変えた。

「お、おい、確かに戦おうとは言ったが、何も背徳武装まで持ち出さなくてもいいんじゃないか?　自分の手で殺したら、何の意味も——」

「傷無。グレイスと戦うといった以上、覚悟を決めて。あたしの妹を舐めてかかると、一瞬で命を食い尽くされるわよ」
「なに？」
「こんなもので倒せるとは思っていないけど、コロスの能力を測るには使えるわ」
傷無の頬が引きつる。
「全時空粉砕がただの測定器……って、戦艦だって消滅させるのにか？」
傷無はあらためてグレイスを見た。全時空粉砕を恐れるどころか、バカにしたような微笑みを湛えている。
「そんなものを構えて、一体どうしたのじゃ姉様？」
愛音の周りの空気が振動し、地鳴りにも似た音と激しい放電が走る。全時空粉砕が発射準備をしている証拠だ。
「いくわよグレイス！」
愛音は迷わず引き金を引いた。次の瞬間、周囲から音が消える。そして目がくらむほどの光が全時空粉砕の砲口から爆発した。凄まじい轟音が響き、全ての時間と空間を粉砕する輝きがグレイスに向かって走る。
グレイスは自分を包むように、コロスの翼を手前に折りたたんだ。その翼に向かって、全時空粉砕の光が直撃する。グレイスの体が、粉砕の輝きに包まれ見えなくなった。
しかし、その残忍な輝きの中から、平然とした声がした。
「何のつもりじゃ姉様？　妾にプレゼントか？」
目の前で起きた出来事が、傷無には信じがたかった。
「な……っ!?」
その場に存在するものを、時間的にも空間的にも粉砕する兵器。物質を微細な単位に分割し、存在していた位置、存在していた時間をずらす。それにより、どんな存在であろうと粉々に粉砕してしまう、ゼロスの必殺兵器だ。
だが、グレイスは刃物で出来た翼の向こうで、馬鹿にしたような微笑みを浮かべている。
全時空粉砕の効果がなくなったわけではない。効果の及ぶ範囲、すなわちグレイスの後ろにあった王城の尖塔などは、音もなく消滅していた。全時空粉砕の輝きの中で、グレイスとコロスだけが無事なのだ。
愛音は全時空粉砕を下げた。砲身の排気口から蒸気が一気に排出される。
「全時空粉砕のエネルギーも吸収してしまうのね……」

傷無の眉間に汗が流れた。
「ゼロスの全時空粉砕が効かない……それも、ダメージを受けるどころか、むしろ逆だ。まるでエネルギーを補給したような……」
「グレイスのコロスは、他人の魔力を吸い取るの。それが人であっても、魔導兵器であってもね。そして魔力による攻撃も……グレイスに魔力を供給しているだけのようだわ」
傷無はごくりと喉を鳴らした。
グレイスは翼を広げた。帯電したように輝く翼の光が、グレイスの体へと移動して行く。それにつれグレイスの肌はより艶やかに、ピンク色の髪はますます美しく輝きだした。
「うむ、姉様の魔力はとても美味じゃ。有象無象の駄物とは格が違う」
小さな舌を伸ばし、ピンク色の唇をぺろりと舐める。その唇が光沢に輝いた。
「少しお返ししようかの」
骨組みだけの翼を羽ばたかせた。翼に残った輝きが、その勢いで傷無と愛音に向かって放たれる。
「傷無！」
愛音の叫びを合図に、二人は後退した。スラスターを全開にして、城の尖塔の裏側へと隠れる。散弾のような光の粒が、尖塔に次々と吸い込まれてゆく。そして、真っ赤な炎を吐き出し、大爆発を起こした。
「うおっ!?」
傷無と愛音も爆発に飲み込まれそうになる。爆風と衝撃波に吹き飛ばされ、転がるように宙を舞った。そこへ粉々になった石の破片と、直径数十メートルにもなる巨大な石の筒が降って来る。
「くそっ！」
辛うじて避けると、折れた尖塔の先は城の敷地へと落下してゆく。地面に衝突し、砕けながら砂煙の粉塵を巻き上げた。
傷無と愛音はスラスターで姿勢を立て直すと、グレイスから距離を取るべくその場を離れた。そして創世の御柱を迂回して、王城から離脱する。足下にはゼルティスの市街地が広がり、その上空では、バルディーンの竜型部隊と親衛隊の戦闘が展開されていた。
「な、なんだ!?　竜の形をした魔導兵器だらけだぞ！」

傷無は驚きの目で、空を飛び交う竜騎兵や三つ首竜などの竜型魔導兵器を見回した。
「バルディーンの竜型部隊だわ……援軍に来てくれたのね」
さらに二人の前に、新しいウインドウが開いた。
『みなさーん！　まだまだ行きますよ。元気残ってますか？』
姫川は楽しげな顔で手を振っていた。
「なっ……姫川⁉」
『では聴いて下さいデス。次の曲は……ゴッド・スピードっ！』
シルヴィアが曲名を口にするのと同時に、観客の興奮が沸騰する。恐らくはヒット曲なのだろう。客席を埋め尽くす光が激しく波打つ。人々がサイリウムのような光る棒を振って、喜びを表現しているのだ。
しかし、傷無はその光景を見て度肝を抜かれた。
「なんなんだ？　これは」
傷無は答えを求め愛音を見つめるが、愛音も驚きの表情で画面を見つめていた。
「しかもこれ……ライブだわ。生放送よ」
「なにい⁉」
シルヴィアたちの歌声に被せて、アラートが鳴った。
振り向くと、グレイスが背中の翼をいっぱいに広げている。輝く光が翼に宿り、まるで羽毛の生えた翼のように姿を変えた。愛音の背中に、ぞくりとしたものが這い上がる。
愛音はフローティングウインドウを開くと、周囲一帯に通信を送った。
「いけない！　みんな気を付けて！」
通信を受信したグラベルが、驚きの声を上げた。
「アイネス殿⁉　キズナも！」
「アイネス様⁉　一体どうされたのです！」
ハーキュラスとメルクリア、それに竜型部隊も、愛音の警告の意味を測りかねた。指揮官のルレオも、怪訝な顔で突然の警告に首をひねる。
「これは、アイネスからの通信？　間違って敵にも送ってきたのですの？」

愛音が叫んでも、みんな戸惑って足を止めただけだ。
「だめだわ！　このままじゃみんなを巻き込んでしまう。旋回して反対側に――」
だがその時、グレイスの翼は光の羽を蓄え、まるで本物の天使のような姿へと変貌していた。そして、全ての魔力を刈り取る殺戮の鎌が放たれる。
「魔力吸収」
グレイスの翼に生えた光の羽が、一斉に放たれる。それを見て、竜型部隊の指揮官であるルレオの脳裏に恐怖の記憶が蘇った。たった一人でバルディーンの竜型部隊を全滅させた、死神の羽。あの恐るべき魔力吸収が再び襲いかかってきた。
「た……退避！」
しかし既に遅かった。
魔力吸収の羽は恐るべき速さで襲いかかる。竜型部隊が真っ先に餌食になった。
竜型部隊の魔導兵器は、コロスの羽に貫かれるとたちまち輝きを失った。先程まで生き生きと戦場を駆け巡っていた竜は、ただの石像のように固まって地面へと落下してゆく。
その姿を見つめるルレオは顔面蒼白になり、もう一度叫んだ。
「退避！　撤退よ！　急いで逃げなさい！」
自らが乗る三つ首竜に鞭をくれ、ルレオもその場から逃げ出した。
敗走する敵を見て、親衛隊員から歓声が上がる。だが、それはほんの一瞬のことだった。
「ぎゃああああああああ！」
魔導装甲を身に付けた親衛隊員が羽に貫かれ、断末魔の叫び声を上げる。親衛隊員の顔色が一瞬で変わった。敵味方の区別なく、魔導兵器の数十機が次々と餌食となる。コロスの翼から放たれた光の羽は、縦横無尽に空を駆けた。そして、魔導兵器の魔力を手当たり次第に吸収してゆく。
ハーキュラスの顔色が真っ青になった。
「なっ！　退避っ、緊急――きゃあああっ！」
魔力吸収は親衛隊にも容赦なく襲いかかる。ハーキュラスも魔力吸収に魔力を吸い取られ、魔導装甲を失った。
「くそっ！　ハーキュラス！」

気を失ったハーキュラスを抱きとめ、メルクリアは残った魔力で何とか不時着を試みる。同じように直撃を受けた魔導騎士が、次々とゼルティスの街へと落下して行った。
「まずいっ！　アルディア、逃げるぞ！」
グラベルが叫んだとき、運悪くアルディアにコロスの羽が襲いかかる。
「ゼエルの楯で防ぐわ！　だから今のうちに――」
しかし魔力吸収の羽は、防いだ楯ごとアルディアの体を貫き、魔力を刈り取った。
「アルディア！」
体を守っていたゼエルが消失し、アルディアの体が落下してゆく。
「く……っ！」
空中でアルディアの体をつかまえると、グラベルは安全な場所を探しながら降下した。そして悔しそうな顔で、日の暮れかかったゼルティスの空を見上げる。
「ここまでか……あとは頼んだぞ。キズナ！」
愛音と傷無も魔力吸収の羽を振り切ろうと、アクロバティックな動きで宙を舞い必死で逃げていた。しかしどれだけトリッキーな動きをしようとも、魔力吸収の羽は遅れることなく付いてくる。
「くそっ！　何なんだよ、あのホーミングは！」
「あの羽自体の魔力が尽きるまでは、どこまでも追いかけてくるわ！」
魔導兵器や魔導装甲を貫いて魔力を吸い取った羽は、グレイスの許へと戻ってゆく。そして羽は翼に収まり、その輝きはグレイスの体へと吸収され魔力を供給する。
「あれがグレイスの強さの秘密。グレイスだけは、魔力……ハイブリッド・カウントが尽きるということがないの」
「厄介な妹だな！」
後ろから追ってくる羽が見る見る距離を詰めてくる。
――くそっ！　もう駄目か⁉
魔力吸収の羽が眼前に迫る。その瞬間、巨大な影が視界を覆った。
「なにっ⁉」
三つ首竜が魔力吸収の前に立ちふさがった。

「これは……」
三つ首竜は、魔力吸収の羽をその身で受けた。羽が三つ首竜の体を何度も貫く。美しく輝いていたクリスタルの翼が光を失った。その巨体がゆっくりと落下を始める。ルレオは悲しそうな目で、三つ首竜の背中から離れた。そして、三つ首竜の魔力を吸い取った羽が飛び去るのを、悲しげな瞳で見つめた。
傷無は感謝を言うべきか、謝るべきか悩み、咄嗟に言葉が出てこなかった。
「……すまない。でも、おかげで助かった。ありがとう」
だが、ルレオは傷無を無視し、愛音をじっと見つめた。
「パトランティスのアイネス……正直、あなたには怨みがありますわ」
その視線に、愛音はびくりと体を震わせる。
「ですが……今のあなた方は、あのグレイスと戦っているように見えましたわ」
ルレオは淡々と語る。
「あたくしはグレイスのコロスの力も、あなたのゼロスの力も見ています。正直、コロスを倒す手段が思いつきませんの。ですが――」
ルレオは愛音の瞳をじっと見つめた。
「アイネス、あなたのゼロスが唯一の対抗手段であることは間違いありませんわ。再びあたくしの竜を失うことは耐えがたい苦しみですが、今あなたを失えば勝つ手段が失われてしまう」
「あなたは……」
愛音もその瞳を見つめ返す。
「ですから、グレイスのコロスを必ず倒してくださいまし」
愛音は引き締めた顔でうなずくと、魔力吸収の羽が戻って行った先を見つめた。
「分かったわ。ありがとう」
スラスターが光を放つと、愛音はグレイスのいる方向へと飛び立った。その後を傷無が追いかける。
「愛音。あの能力に対抗する手段は何か？　傷無は速度を上げ、愛音の横に並ぶ。
「愛音。あの魔力吸収に術式解体は通用するのか？」
「分からないわ……でも、それしか手段がない」

もし、それが駄目なら本当に打つ手がなくなる。

「だから傷無は離れていて」

「しかし……」

俺も一緒に戦うと言いかけたが、自分が近くにいては術式解体の能力を思う存分振るうことが出来ない。

「分かった。無理するなよ」

傷無はグレイスが見えてきたところで停止した。妹の許へ向かう愛音の背中を、不安な気持ちで見守る。

「おお、姉様。来てくれたのか」

戻って来た愛音に向かって、グレイスは嬉しそうに微笑む。

「グレイス……みんなを巻き込むのはやめて」

「うむ？　みんな……じゃと？」

グレイスは今さら気が付いたかのように、彼方のバルディーンとバトランティスの両軍を眺め渡す。そして、地上に落ちていった魔導兵器と魔導装甲の姿を見て、つまらなそうに頭を振った。

「どうりで、まずい魔力じゃったわけじゃ。まあどうでもよい。どうせこの世が終われば、全ての者たちが滅びる。早いか遅いかの違いじゃ」

「グレイス！」

鋭い愛音の叱責も、グレイスは薄ら笑いで跳ね返す。

「さあ、滅びまでのつかの間の時を共に過ごそうぞ。だが、姉様の命は妾のものじゃ。たとえ運命の女神であろうと、渡すつもりはない。姉様のすべては妾だけのもの……」

「グレイス……あなたは」

愛音の背中にリング状のパーツが組み上がる。

「術式解体！」

リング状のパーツを中心に、青く光る魔術文字と図形が展開し、魔法陣が描き出される。

「魔力吸収！」

グレイスの翼から光の羽が、矢の如く発射された。十数本の光の矢が絡み合うようにして、愛音に向かって襲いかかる。

帯状に伸びた術式解体の魔法陣が、愛音を守る様に周囲を取り囲んだ。そこへ魔力吸収の光の矢が激突する。二つの魔力の光が激しい火花を散らし、鍔ぜり合った。

「あっ⁉」

愛音の口から驚きの声が漏れた。

——魔法陣が喰われている⁉

魔力吸収の光の矢が術式解体の魔法陣を吸収した。魔法陣の帯が少しずつ減ってゆく。愛音の瞳が赤く輝いた。体の周りをめぐる魔法陣の帯が数を増やし、回転速度が上がる。

「ほう……」

グレイスが感嘆の声を上げた。

嵐のように流れる術式解体の魔法陣に押し流されるように、魔力吸収の矢が魔術式へと分解される。

「さすが姉様。妾の魔力吸収を防がれたのは、これが初めてじゃ」

愛音は肩で息をしながらグレイスを睨み付ける。

「あたしの術式解体が効かなかったのは……二人目ね」

グレイスの片眉が上がる。

「二人？」

「ええ。初めては傷無よ」

瞬間的に怒りの炎が燃え上がり、グレイスの中を駆け巡る。

「二度とその汚らわしい名を口にするなあああ！」

ピンクサファイアのような髪が輝きを放ち、翼から光の矢が次々と放たれる。

「術式解体！」

愛音も魔法陣の帯をグレイスへと伸ばす。

両者が放つ魔力の光が交差する。光がぶつかり幾つもの閃光がきらめく。火花を散らし、小さな爆発が連鎖する。

二人から放たれる光の洪水が、空中で激しくぶつかり合った。

激突をすり抜けた光の矢が愛音の体を守る魔法陣を吸収し、逆に愛音の魔法陣がグレイスの翼の輝きを分解する。

お互い最強と謳われる魔導装甲を身に付けた姉妹。

その魔力の強さも拮抗していた。
最強の能力と最強の能力の激突には、小手先の戦法も戦略も役に立たない。
正面からぶつかり、ただひたすら殴り合い、お互いのガードを崩し合う消耗戦だ。
「はあああああああっ！」
愛音が雄叫びを上げた。
「姉様なんか嫌いじゃ！　もういなくなればいいのじゃ！　姉様も、誰も彼もみんな。みんな滅ぼしてやる！」
魔力吸収の威力が上がった。グレイスの気迫に愛音が押される。グレイスが悲しみを訴える度に、愛音の心が削り取られてゆくようだった。
その時、魔力の激突が臨界点を突破する。突如、愛音の前で爆発を起こした。
「愛音⁉」
煙の中から愛音が姿を現す。しかし、術式解体の魔法陣は全て消え去っていた。
魔力吸収と術式解体の能力がお互いを打ち消し合った結果だ。
傷無は愛音の生体情報を表示するウインドウが、赤く光っているのに気が付いた。その瞬間、傷無の胸の内がぞっと冷えた。
それは愛音のハイブリッド・カウントが、レッドゾーンに入ったことを知らせるアラートだった。パトランティスの艦隊を術式解体で片付けたときに、相当無理をさせてしまった。ここへ来て、そのツケが回ってきている。
「くそ……」
険しく刻まれた傷無の眉間に汗が流れる。
これ以上は愛音を戦わせられない。では、どうやってグレイスを倒す？
よく考えろ、傷無。
コロスは遠距離攻撃では倒せない。魔力を使用した砲撃などは、いたずらにグレイスに魔力を分け与えるだけだ。
ならば効果的なのは……。
──物理攻撃しかない。
接近して物理攻撃を加えれば、勝機が見えてくる。しかし近付けば、容赦なく魔力吸収がハイブリッド・カウントを奪いに来る。

ならば魔力吸収をかわせば？
それが出来れば苦労はない。光の矢をかわすだなんて、そんなスピード……。
──いや。
出来る。
俺はかつてユリシアと戦ったとき、瞬間的にではあるが光にも迫る速度で戦った。今、俺はあのときと同じように、ゼロスとの絶頂改装を行った状態だ。
──いける！
傷無は宙を蹴った。
「傷無っ⁉」
突然戦闘領域に入ってきた傷無に、愛音は狼狽えた声を上げた。
「来ないでって言ったでしょ！　早く離脱して！」
泡を食った愛音の声を無視し、傷無は加速した。
ユリシアと戦ったときのことを思い出せ。あの時のスピードをもう一度！
傷無の背中と脚にスラスターが生成される。何もなかった場所に、まるで体から部品が生えたかのように、あっという間に組み上がる。
「行くぜ！」
傷無の姿が消えた。
一瞬にして音の速度を超え、他の全ての速度を振り切る。
傷無の目には全てがスローモーションに見える。口を開けて叫んでいる愛音の横を抜け、グレイスへと翔る。
飛来する魔力吸収の光の矢が襲いかかる。その形が、ちゃんと羽の形に見える。速度は速いが、避けることは可能だ。隙間を縫うように魔力吸収の光をかわしながら、傷無はグレイスへ向かう。魔力吸収の光は傷無とすれ違い、気が付いたように向きを変えようとする。しかしその時には、傷無はすでにグレイスまであと一歩のところへ来ていた。
──もらった！
傷無は拳を引き、グレイスへの一撃を狙う。殺しはしないが、戦闘が不可能なダ

メージを与える。
「愛音の妹だが、悪く思うなよ。これも――」
その時、傷無は異変に気が付いた。
コロスの翼は骨組みだけの翼だ。その骨は一本一本が鋭い刃物になっている。
その内の一本がない。
「目障りだな。レムリアの魔王」
グレイスが鎌を振り上げていた。
「……なっ!?」
グレイスが手にしている鎌は、柄が長く、その先に弧を描く大振りな刃が冷たく光っている。これはコロスの翼の一部が分離して出来たものだ。それはまるで死神の鎌。グレイスが手にした姿は、まさしく殺戮の天使の異名に相応しかった。
「その程度の速度で、妾の目をごまかせるとでも思ったか」
傷無のスピードよりも速く、鎌が振り抜かれた。
「があああああああああああっ！」
傷無の胸を死神の鎌が斬り裂く。自分の中の生命力が刈り取られる気がした。ステイタスの表示を見なくても、ハイブリッド・カウントが音を立てて減少してゆくのを感じる。
必死にスラスターを噴射しグレイスから離れた。何とか愛音の前まで後退すると、そこで全身を貫く痛みに体を折り曲げた。
「傷無っ!?　どうしたの?　一体、何が……」
愛音の目には今の攻防は見えていなかったが、困惑しながらも傷無を介抱しようとする。
「ああ……目一杯加速して突っ込んだが、見切られた」

傷無はフローティングウインドウにエロスのステイタスを表示させる。
「やっぱり、あの鎌の一撃でハイブリッド・カウントが20％にまで減少させられている」
「鎌?　あ……いつの間に」
愛音はグレイスが手にする鎌を見て、目を白黒させた。

「接近しての物理攻撃でなら勝負できるかと思ったが……それも難しそうだ」

グレイスは余裕たっぷりに鎌を構え、微笑んでいる。その余裕は、いつでも殺せるというものではなく、どうやって殺そうか、と想像をめぐらせ楽しんでいるようにも見えた。

愛音も沈痛な面持ちで、妹の姿を見つめる。

「あたしが術式解体で隙を作るわ。その間に……」

「駄目だ。愛音のハイブリッド・カウントは、もう残り10％を切っている。何かの拍子に使い切ってしまったら……」

「大丈夫よ！　まだ出来るわ！　ここでグレイスを説得出来なければ――」

『傷無、聞こえるか？』

二人の前に、突然フローティングウインドウが立ち上がった。

「姉ちゃん！」

アタラクシアの艦橋に立つ怜悧の姿が映った。

『傷無、至急確認したいことがある』

「確認……って！　今はそれどころじゃ――」

食って掛かるような傷無に被せて、怜悧が話を続けた。

『お前が愛音と戦ったとき、最後に一体何をした？』

「え？……な、なんだよ、そんなこと今は関係ないだろ⁉」

『大ありだ、馬鹿者！』

逆ギレしたような怜悧の怒鳴り声に、傷無は震え上がった。

『愛音との戦いの際、最後に起きた現象。あれをもう一度、再現させるのだ！』

「現象……？」

思わず傷無は愛音と顔を見合わせた。

『アタラクシアの機能が停止していたので詳細は分からん。しかし、わずかに計測出来たデータを確認したところ、あの瞬間、ほんのわずかな時間だがゼロスとエロスの能力が跳ね上がっている。あの時、お前と愛音の間で何かが起きたはずだ。それを再現出来れば……勝てる！』

傷無は何かに思い当たった。

「愛音との戦いの最後って……まさか」

そういえばあのとき、体の中から力が湧き上がってくるような気がした。接続改装や絶頂改装と似ている。でも、もっと強烈な何かだった。

だが、ハイブリッド・カウントは回復していなかった。むしろ、ほぼゼロに近い状態だった。だから気のせいなのかとも思ったが……怜悧の話を聞いて納得がいった。

――心当たりは、ひとつしかない。

傷無は愛音を見つめた。

「愛音……」

「ひっ、ひゃい！」

真っ赤な顔をして、愛音は声を裏返らせる。

「すまない。これも任務だ。その、こんな状況で嫌だろうが……」

「えっと……」

愛音は恥ずかしそうにうつむくと、両手の指先を絡み合わせた。そして、蚊の鳴くような声でつぶやいた。

「いいわよ……別に。嫌じゃないし」

そして上目遣いで、ちらっと顔を上げる。

「姉様、レムリアの魔王。作戦会議は済んだか？　それともお別れでもしておったのか？」

グレイスがイライラしたように鎌を振り回した。

「ああ……待たせて悪かったな。打ち合わせは終わったよ」

傷無は愛音の肩を抱き寄せる。それを見て、グレイスのこめかみに血管が浮かんだ。

「その汚い手で姉様に触れるなと言ったであろうが！　姉様にさわっていいのも、殺していいのも、妾だけじゃ！」

そうして死神の鎌を構えた。

「いくぞ、愛音」

「ええ……傷無」

二人は見つめ合うと、どちらからともなく顔を近付ける。

愛音の心臓が大きく脈打つ。胸の鼓動はどんどん速く、強くなり、音が聞こえてきそうだった。艶のある唇が微かに開き、その中から舌が覗く。

「ん？　何をするつもり――じゃっ!?」

傷無の唇と愛音のピンク色の唇が触れ合った。

唇に感じる柔らかさに、傷無は心が溶かされそうだった。ここが戦場で、死闘を演じている相手が目の間にいることも忘れてしまいそうになる。

その感触は、傷無の心をとても幸せで、安らかな気持ちにさせる。腕の中の愛音が愛おしくなり、強く抱きしめる。それは強く守られているような気持ちを愛音に与え、愛音の心に深い安心感が生まれた。

唇を開き、愛音はそろそろと舌を伸ばす。いつ傷無の舌がやって来ても、迎えられるように。むしろ、早く来ないかな、と楽しみに待っているかのように。傷無の舌が、一つにつながった口の中に伸びる。愛音の口の中を、様子を窺うようにゆっくりと進む。

そこで、愛音の舌の先と出会った。

慌ててお互い少し引っ込めるが、すぐにまた舌を伸ばし合う。再び舌先が、ちょんと触れ合う。今度は離れたくないというように、舌先を回転させ、お互いの舌の感触を味わう。愛音の舌は柔らかく、甘い味がした。ふわっとして、ぬめりのある感触は軟体動物のようでもあった。自分の舌で、愛音の舌の表面を撫でてやると、びくりと舌が逃げる。それをまた追いかける。つい口の中で行われる舌の追いかけっこに夢中になる。

そうしている内に口の中に与えられる刺激で、愛音の顔がうっとりとしたものになる。目元を赤く染め、口の粘膜を撫でられる快感に体が震える。

口腔内に与えられる快感で、愛音の胸の先は硬く尖ってきた。パイロットスーツの上からでも分かるほど、胸の先に付いた突起の形を浮かび上がらせる。

傷無の舌が愛音の歯茎に触れた。その瞬間、愛音の体がびくんと跳ねる。

それは未知の感覚だった。他人に歯と歯茎を舐められる。そんなことは想像もしたことがなかった。傷無の舌は念入りに上あごの歯を一本一本確かめるように、ゆっくり歯茎を舐めてゆく。それが終わると、今度は下の歯茎と唇の間に舌が割り込む。そして愛音の歯をなぞってゆく。経験したことのない快感が愛音の体を走り、背中がびくびくと痙攣した。脚の力が抜けそうで、より強く傷無の体に抱きつく。

やっと歯茎を一周したと思ったら、今度は裏側に舌が伸びた。そのくすぐったさと快感がない交ぜになった感覚に、愛音は気を失いそうになる。目を開けていたら、きっと白目を剥きそうになっていただろう。

さわっていなくても、股の間から熱いものが流れ出しているのが分かった。

息苦しくなって、一旦唇を離す。

二人の唇の間に、唾液が糸を引く。傷無も興奮しているのだろう、頬を赤くし瞳の中には魔力の光が浮き上がっている。

愛音も快感に思考能力を奪われ、絶頂改装を行っているとき以上に蕩けきった顔をしていた。とろんとした瞳に魔力の光がキラキラと輝き、目の周りを赤く染めてぼんやりと傷無を見上げている。だらしなく開いた口元からはよだれが垂れ、物欲しそうに舌が伸ばされていた。

唇よりも先に、舌と舌が触れ合う。そのまま、お互いの舌を舐めまわした。柔らかくぬめった感触が病みつきになりそうだ。

吸い付くようにして、再び二人の唇が重なる。

今度はより強く、大胆に求め合った。

貪欲に口の中と舌から得られる快楽をむさぼり合う。その快感は全身に伝わり、頭の中を蕩けさせ、足の指先を痙攣させる。

口の中でお互いの舌が絡み合う。お互いの口の中を、舌で触れてない場所がなくなるように。全てを味わい尽くすように、激しく暴れさせた。

その有様を、グレイスは呆然として見つめていた。

何が起きたのか、何をしているのか、頭が理解しようとしなかった。二人が唇と舌で交わす愛の行為を、なす術なく見守る事しか出来なかった。

やがて腹立たしさと、悲しさ、悔しさが込み上げてくる。それは涙となって、グレイスの瞳から溢れ出した。

だが、それだけではない。

不思議な感覚がグレイスの体を襲った。自分もバルディーンの儀式の折に、愛音と愛の行為を行った。だが、今感じているものは、その時のものともまた違う。胸が高鳴り、顔が火照ってくる。そしてお腹の下がもやもやと切ない感覚に苛まれる。

——な、なんなのじゃ、これは？

愛音と傷無の体が、帯電しているかのように光を放ち始めた。

あまりの快感と幸福感に、愛音の閉じた目から涙がこぼれ落ちる。

——大好き。

強く、お互いの口を吸った。口の中で交わった唾液がお互いの喉を通る。愛音の唾液は甘い香りがした。そして愛音は傷無の唾液を飲み込んだとき、意識が真っ白になった。

その時、新たな扉が開かれた。

二人の体から光の爆発が起きた。

「なっ、なんじゃ！　これは!?」

あまりのまぶしさに、グレイスは顔を背ける。とてもではないが直視できない。その輝きを放っている傷無と愛音も、この現象に驚いていた。

「これは……」

接続改装や絶頂改装でも魔力は生み出される。しかしその場合、体の中に吸収されるか、空中に消えてゆくはずだ。だが今は、ピンク色の光の粒子が二人の体を覆ったままだった。

『成功だ、傷無！』

フローティングウインドウの中で怜悧が興奮した声を上げた。

「成功？　この状態が？」

傷無はピンク色に光る自分の手を見て訊いた。どちらかといえば、絶頂改装の途中で止まってしまったような妙な感覚だった。

『ステイタスを表示してみろ』

傷無は言われるがままに、エロスのステイタスを表示した。基本的な出力、攻撃力、装甲の防御力など、現在のエロスのスペックが詳細に表示されている。その数字を見て、傷無は絶句した。

「!?」

絶頂改装時には、エロスは相手のハート・ハイブリッド・ギアの能力と同等の性能を得る。だから今はゼロスと同等のスペックのはずだ。

「これは、ゼロスの能力を完全に超えている……どころじゃねえ！　二倍、いや三倍以上の数値だぞ!?　姉ちゃん、これはどういうことなんだ!?」

『それこそ新しき改装！　名付けて接吻改装だ！』

愛音も体に駆け巡る力を感じていた。確かにこれが、前に傷無とキスしたときに感じた感覚だ。だが、今はあの時とは比べものにならない力が、全身にみなぎっている。

「これが……キスチャージ・ハイブリッド」

傷無も全身を駆け巡る力を抑えきれないように、興奮気味に叫ぶ。

「今なら、普段は不可能なことも可能に出来そうだぜ！」

だが怜悧が深刻な顔で告げた。

『だが、この改装はハイブリッド・カウントを補給するものではないようだ』

「え？　それってどういう意味だ？」

『データを解析したところ、接吻改装は、残っているハイブリッド・カウントを一度に放出することで、無理矢理に性能を上げるものらしい。同じ量の燃料を少しずつ燃やすか、一度に燃やすかという違いに過ぎない。当然、体にも無理がかかるだろう』

「成る程な……上等だ！　やってやるぜ！」

『接吻改装はハイブリッド・カウントを大量に消費する。愛音は十秒。傷無はあと十五秒がいいところだ。一気に仕留めろ！』

「なにい!?　十五……っ、くそお！」

まずグレイスに仕掛けるのに何秒かかるかが勝負だ。グレイスが逃げれば、それだけでタイムリミットが来てしまう。

傷無は、見えない壁を蹴るようにして、グレイスへ飛んだ。

——なに？

一瞬でグレイスの懐に飛び込んだ。

「な……!?」

グレイスが驚愕の声を漏らした。

慌てて鎌を振るう。しかし先程とは違う。傷無の目には、その動きが手に取るように分かった。傷無は片手で鎌の柄を掴んだ。

「……っ！」

信じられないものを見るような目で、グレイスが鎌を掴む傷無の腕を見る。

「うわあああああっ！」

グレイスは鎌を手放すと後ろへ飛んだ。そして大きく翼を広げる。

「魔力吸収！」

コロスの翼から光の羽が放たれ、傷無に襲いかかる。

「術式解体！」

傷無の後ろから愛音が術式解体の魔法陣を伸ばす。帯状の魔法陣が傷無を避け、魔力吸収の光の羽を振り払った。

しかしその瞬間に、愛音の体を包む光が消えた。接吻改装が時間切れを迎えた。どうやらハイブリッド・カウントが完全にゼロになる前に、自動的に解除されるらしい。

「傷無っ！　お願い、グレイスを！」

愛音の声を背中に受け、傷無はさらに速度を上げた。警戒したグレイスは、再び翼から鎌を取り出し構える。そして同時にグレイスの体から翼に向けて魔力が走る。

もう一度、魔力吸収を放つつもりだ。しかし、今度は術式解体は使えない。

傷無はフローティングウインドウに表示されるカウントダウンをちらりと見る。

——あと、三秒。

エロスのスラスターが爆発的な魔力を噴き、傷無の体を瞬間的に音速の数倍の速度へ加速させる。エロスの装甲が空気との摩擦で燃え上がる。

「うおおおおおおおおおおおおおお！」

魔力吸収が発射される前に、その翼を殴りつける。凄まじい速度で繰り出された拳が刃物で出来た翼の骨格をへし折った。

——あと、二秒。

「この……！」

それでもグレイスはまだスピードについてくる。鎌が傷無に向かって振り下ろされた。あれに触れたら、その時点でハイブリッド・カウントがゼロになる！

爆発的な音を上げて傷無の姿が消えた。空気の壁を打ち破り、傷無はグレイスの体の周りを回る。

——あと、一秒。

コロスがエロスのスピードに遅れ始めた。グレイスの目が傷無の動きを追い切れない。傷無の姿が残像のように、瞳に映った。

「レムリアの魔王おおっ!!」

「グレイスっ!!」

そして、ついに傷無は全ての速度を振り切った。

傷無の目には、全てのものが止まって見えた。

傷無の耳には、何も聞こえない。

音もなく、動くものもない、静寂の世界。

ほんの一刹那ではあるが、

——傷無は時の壁を越えた。

だがその一刹那が、勝敗を分けた。

「でやあああああああああああああああああっ！」

背中の翼を打ち砕き、腰のジェネレーターも、尾羽のような羽も、足の翼も、一つ残らず叩き潰した。

グレイスからして見ると、傷無の姿を見失った次の瞬間に、体中の装甲が一斉に砕け散った。そんな不条理だった。

最後に、無防備になったグレイスの首筋に、傷無は手刀を振り下ろした。

「ぐうっ……っ！」

強さはそれ程ではないが、魔力の波動を送り込みグレイスの意識を失わせた。

——残り、〇秒。

気を失い、全身から力の抜けたグレイスの体を抱きとめる。それと同時に、傷無の体から魔力の粒子が散った。

完全な時間切れだ。傷無は大きな溜息をついた。

「はあ……何とか間に合ったな」

辛うじてエロスはまだ形を留めているが、すぐにハイブリッド・カウントの限界が来る。

「傷無！」

愛音が傷無の体を横から支え、力を貸した。お互い、ハート・ハイブリッド・ギアが消失する寸前だ。

「傷無、あそこへ降りて！」

足下に王城が見える。愛音は、創世の御柱を中心に円を描く尖塔の中で、一番大きな塔を指さしていた。その塔の上層階には、外へ張り出した大きなバルコニーがある。

グレイスを抱いた傷無は、愛音に支えられながら、そのバルコニーへ降り立った。床にグレイスを横たえた瞬間に、エロスとゼロスが消滅した。

「ギリギリでセーフって感じだな」

傷無が額の汗を拭き、安堵の溜息を漏らす。

愛音はグレイスの頭を撫でながら、目を細めた。

「傷無……ありがとう」

「別に礼を言われるようなことはしていないさ。俺もお前の妹と話をしてみたかったからな。それにしても、凄い妹だな。何度死ぬと思ったか分からないぜ」

傷無が引きつった微笑みを浮かべると、愛音も可笑しそうに微笑んだ。

その笑い声に呼び起こされたように、グレイスの瞳が開いた。

「グレイス！」

虚ろな赤い瞳に、姉の姿が映る。

「ねえ……さま？」

傷無も心配そうにのぞき込んだ。

「体には傷を付けないようにしたつもりだが……どこか痛むところはあるか？」

グレイスの瞳が、今度は傷無を捉える。

「レムリアの……そうか、妾は負けたのじゃな」

自嘲的な微笑みを浮かべ、グレイスは力なく言った。

「殺せ……もう、どうでもいい……妾には生きる意味などないのじゃ。希望も、目的も、大事なものも……なにもない」

愛音は妹の手を取って、両手で包むようにして握った。

「グレイス。そんな悲しいことを言わないで、あたしの話を聞いて」

「姉様が支えじゃった。姉様がいつか戻ってくると信じていたから、今までも頑張ってこられたのじゃ。だが、もうダメじゃ……妾の好きな人はもういない。妾を愛してくれる人は、もうおらぬのじゃ」

グレイスの瞳から涙があふれた。一度流れ出すと、止めどもなく涙が落ちる。

「本当は、姉様と一緒に……仲良く、ずっと……ひっく、うえぇえん」

嗚咽を上げ、子供のように泣きだした。

愛音はグレイスの体を起こし、その頭を自分の胸にうずめさせた。

「……姉様？」

「いい？　グレイス。あたしはグレイスのことが大好きよ」

「でも、姉様は妾を裏切った……のじゃ」

愛音は首を振った。

「あたしも、アトランティスとレムリアが共存するなんて無理だと思ってた。でも、傷無と戦って、話をして……それで信じることが出来たの。あたしたちは、もう一度やり直せるって」

グレイスの頬に熱いものが落ちてきた。

「姉様？」

愛音の目から涙が流れ落ちる。

「あたしの大切なグレイス。あたしと違って、有能で、優秀で、強くて……自慢の妹だわ。姉妹ゲンカくらいしてもいいけど、それっきりなのは嫌なの。だって、大切な、あたしの妹だもの」

「姉様……妾は姉様に嫌いと言ったのじゃぞ？　あまつさえ殺そうとしたのじゃ。それを許すと言うのか？」

愛音は、つい最近自分もそんなことをしたな、と思った。傷無を見上げると、少し照れたようにはにかんだ顔があった。

愛音はグレイスを抱きしめる手に力を込めた。

「ええ、許してあげる。だって……あたしは、グレイスのお姉ちゃんだから」
「姉様……」
「グレイスと戦ったのだって、あなたに停戦命令を出してもらうためよ。戦いをやめて、二つの世界を救うために力を合わせたかったの。また、あなたと一緒に暮らせる世界を守るために」
グレイスは愛音の胸に頭をこすりつけると、泣きはらした顔を上げた。
「分かった……」
グレイスはフローティングウインドウを開いた。
「バトランティス全軍に告ぐ。直ちに戦闘を止めよ。停戦じゃ。これより一切の戦闘行為を禁止する。レムリアから来た艦隊は好きにさせろ。手出しは無用じゃ」
その放送は戦場の全ての兵士に届いた。ゼルティス市内にも、そしてアタラクシアにも。
艦橋のスクリーンに映るグレイスの停戦宣言に、オペレーターたちの歓喜の声が上がった。涙を流して、抱き合い、喜びの声を上げた。
「総司令、親衛隊の艦隊からの砲撃止みました！　魔導兵器も帰還を始めています！」
その報告を聞き、怜悧は倒れるように艦長席に座り込んだ。リクライニングさせた背もたれに体を預け、疲れた微笑みを浮かべた。
「……疲れた」
『怜悧。傷無たちから連絡が入っている』
ケイがそう言うと、艦長席に沈む怜悧の前に傷無からの通信ウインドウが開いた。
「傷無、ご苦労だった」
『それより姉ちゃん。早くラボの技研科の連中をよこしてくれ。創世の御柱の近くに母さんの研究所があるらしい』
怜悧は大きく息を一つ吐くと、飛び起きた。
「了解した。すぐに向かう」
怜悧はアタラクシアを創世の御柱に向かって前進させた。もはや、その行く手を遮る者は何もない。
傷無はバルコニーから、近付いてくるアタラクシアの艦影を見つめた。

「見えてきた。もうすぐで、到着するな。そうしたら、すぐに創世の御柱の修復だ」
そう愛音とグレイスに言葉をかけると、正面にそびえる創世の御柱を見上げた。
「俺は一足先に、母さんの研究所へ――」
そう言いかけたとき、異変が起きた。
音もなく、創世の御柱が崩れ落ちてきた。
傷無は目を疑った。
遅れて、何かが砕ける音が地鳴りのように近付いてくる。
創世の御柱が、まるでビルがダイナマイトで解体されるときのように、轟音と大量の砂埃を巻き上げ破壊されてゆく。それは一見、創世の御柱が地下に姿を消してゆくようでもあった。
明らかに目の前で起きていることだが、理解が出来ない。
愛音も、グレイスも、その有様を呆然として見守っていた。愛音が震える声で、つぶやいた。
「そんな……創世の御柱が、倒れた？」
見えざる巨大な手によって、創世の御柱が上から押し潰されて、根元から粉々にされてゆくような光景。驚くほど、現実感のない眺めだった。
見たものが信じられなかった。グレイスもうわごとのように唱える。
「世界の……終わりじゃ」

四章　新しき神

Hybrid × Heart Magias Academy Ataraxia

その時、ゼルティスにいる全ての人間が、信じがたいものを見た。
有史以前から存在した世界の中心。自分たちを生み出してきた母なる存在。その創世の御柱が崩れ落ちる姿だ。
人々は、ただただ呆然と、見慣れた柱の消え去った夕暮れの空を見上げた。そこにあるべきものが失われた空は、拠り所を失った不安を人々に感じさせた。
「これから、私たちどうなるの？」
「もう、終わりだ。この世界は終わるんだ」
「それって、みんな死んじゃうってこと？」
不安が恐怖を呼び、恐怖が混乱を招く。ゼルティスが混沌とした騒乱に陥っていった。
人々の喧噪に被せて、地鳴りのような音が響いて来た。
「ねえ、何の音？　これ……」
その音は足下からではなかった。人々は空を見上げた。
「なっ、なによ、あれ!?」
空が揺れていた。まるで地震で大地が揺れるように震動し、その動きはやがて空に亀裂を刻んでゆく。そして、砕けた空が、破片となって落ちてきた。
「きゃああああああっ！」
その破片は街の建物を次々に破壊した。欠けた空の向こうには、奈落のような黒い闇が広がっている。虚無の闇を隠した、ひび割れだらけの空が落ちてくるのだ。少しずつではあるが、確実に人々の頭上に迫ってくる。それはこの世界の、死へのカウントダウンだ。
逃げ場のない崩壊の予告に、人々は絶望と混乱の渦に巻き込まれた。

それは一般市民も、親衛隊の魔導騎士も、王族である愛音やグレイスも同じだ。震える脚で立ち上がったグレイスは、夢遊病者のように歩いて行く。
「本当に、倒れてしまった……のか」
バルコニーの端までゆくと、グレイスはすがり付くように手すりにもたれかかった。
「も……もう終わりじゃ」
愛音はグレイスの肩を抱き、自分の体に寄り掛からせる。しかし愛音の体も震えていた。どれほど強大な戦闘力を有していても、世界の運命の前には無力だ。雷に怯える獣のように、身を寄せ合って震えている。
傷無はアタラクシアに連絡を取ろうと、フローティングウインドウを起動した。
「こちら傷無！　姉ちゃん、識名さん、創世の御柱が倒れた！」
怜悧が眉間にしわを寄せ、早口で答えた。
『こちらから見えないとでも思ったか！　今、王城へ向かっている。お前たちはどこにいるのだ？』
「一番大きな塔にあるバルコニーにいる。愛音とグレイスも一緒だ」
ケイの入力するテキストが怜悧の前に表示される。
『それで那由多博士は？』
傷無は気付いたように、グレイスに訊いた。
「グレイス。母さんは……那由多博士は、どこにいるんだ？」
しかしグレイスは力なく首を振った。
「知らぬ。じゃが奴の研究所は柱のふもとじゃ……この有様では、潰されたやも知れぬな」
那由多の研究所は創世の御柱のすぐ足下にあった。今では柱の破片が山となっている下あたりだ。到底無事では済まないだろう。
「ナユタは……生きています」
部屋の中から人の声がした。
「その声は……ゼル？」
明かりが消えた薄暗い部屋の中から、体を引きずるように二つの人影が姿を現した。

その姿を見て、グレイスが声を上げた。
「ゼルシオーネ！　それと、ヴァルデではないか！　今まで、どこに行っておったのじゃ」
外の光を浴び、露わになった二人の姿に愛音は目を見張った。
「その傷……一体、どうしたの？」
二人の姿は、激しい死闘をくぐり抜けてきたことを思わせる姿だった。魔導装甲は既になく、親衛隊の制服姿だがそれもボロボロだ。破けて穴だらけの服には血が滲み、露出した肌にも血が滴っているのが分かった。特にゼルシオーネが深手らしく、ヴァルデの肩を借りて足を引きずっている。バルコニーへ出ると、力尽きるようにゼルシオーネの膝ががくりと崩れた。
「ゼル！」
愛音は慌ててその体を支える。傷無も手を貸し、床に体を横たえた。
ゼルシオーネは血に濡れた唇から、苦しげな声を吐き出した。
「ナユタは……やはり、創世の御柱を修復する研究などしておりませんでした」
ヴァルデは顔を伏せた。拳を握る肩が震えている。その足下に、ぽつりぽつりと涙が染みを作っていった。
傷無は険しい表情で二人の姿を見つめた。
「やはり母さんは……くそっ！　今度は何を企んでいたんだ!?」
ゼルシオーネは腹の傷を押さえ、苦しみに顔を歪めた。傷無がここにいることも、この際どうでもいい。それよりも伝えることを伝えねば。その使命感で、激痛に耐えながら言葉を絞り出した。
「や、奴が研究していたのは――」
「人ならぬ存在へと進化すること」
――!?
見知らぬ少女がいた。
それもバルコニーの外。夕日を背にして浮かんでいる。
「君は……？」
見た目は小学校に上がるか上がらないか、というくらい。風になびく漆黒の長い黒髪がきれいだった。何も身に着けていない幼い裸身に、体の大きさに似合わない長い白衣だけを羽織っている。

身に着けているのはそれだけだ。魔導装甲を着装するわけでもなく、ただ生身で宙に浮いている。その姿はとても可愛らしく美しいのに、得体の知れない恐ろしさを感じる。初めて会うはずだが、傷無はその少女とどこかで会ったような気がした。

——そうだ。姉ちゃんの昔の写真に似てるんだ。

それは正解ではない。しかし、真実に近しい感想だった。

ゼルシオーネが苦痛をこらえながら、語気を荒らげた。

「奴が、ナユタです！」

「えっ？」

傷無には、その言葉の意味が分からなかった。

「この子が母さんって……どういう意味だよ？」

愛音もグレイスも、通信ウインドウ越しに見ているアタラクシアの怜悧とケイも、傷無と同じ気持ちだった。

その少女は傷無に向かって微笑みかける。

「傷無。母親の顔を見忘れるなんて、親不孝にも程がありますね？」

——そんなことは有り得ない。

「何を言っているんだ？　えっと、君は何者なんだ？」

不用意に近付こうとした傷無に、ゼルシオーネが苦しげな声で叫ぶ。

「気を付けろ！　そいつはかつてのナユタじゃない！　化け物だ！」

傷無の足が止まった。

宙に浮かぶ少女が、困ったような仕草で口を尖らせた。

「失礼なことを仰いますね、ゼルシオーネ様？　化け物ではなく、神様と呼んで頂きたいものです」

『神……だと？』

通信ウインドウの中で、怜悧が忌々しそうに言った。

『確かにその不遜な物言い、母親らしくはある。だが、その姿はどういうからくりだ？　我々の視覚情報に何らかの影響を与えているのか？　それともアンドロイドか？　若作りにも程があるぞ』

少女はころころと笑った。

「ふふふ、ご覧の通りですよ。私は若返ったのです。いえ、生まれ変わったと言った方が良いですね。人間ではない新たな生物として」

傷無も徐々に理解してきた。というよりは実感が湧いてきた。原因や手段は分からない。だが、この少女のまとう空気、存在感。この少女は、

——間違いなく、母さんだ。

怜悧もそれを感じているのだろう。少女と言葉を交わすにつれ、ますます苛立ってゆく。

『新たな生物……だと？　それは、どういう意味だ⁉』

「より進化した生物ということです。ハート・ハイブリッド・ギアのコアや創世の御柱を作った存在と同じレベル……と言えば分かりやすいでしょうか」

こちらの理解出来ない言い回しをして、話を煙に巻くのは那由多の得意とするところだ。傷無はじれったくなって叫んだ。

「ハッキリ言うが、あんたが何を言っているのか全然分からない！　母さん……あんたが本当に母さんなら、どんな生物になったとかそんな話はいい。それよりも、この世界の崩壊を止めてくれ！」

愛音も我に返ったように、切羽詰まった声を上げた。

「そうよ！　あなたはその為の研究をずっとしていたんじゃないの？　那由多博士！」

那由多は可愛らしく肩をすくめてみせた。

「していましたよ。と言うよりも、創世の御柱のテクノロジーを解明する研究を。創世の御柱の秘密を全て理解すれば、自ずと修復の方法も見つかるでしょうから、嘘を吐いていたわけではありません」

グレイスが恨めしそうに那由多を睨み付ける。

「詭弁を弄するな！　ならばなぜ柱が崩れたのじゃ！　貴様に命じたことは修復であって、破壊ではないわ！」

那由多は悪びれる様子もなく、にこにこ微笑んだ。

「意図的に破壊したわけではありません。この私を作り替える仕事をさせたので、かなりの負荷がかかったのでしょう。元々、メンテナンスもせずにずっと稼働させていたので、機能不全を起こしていました。それが今までのアトランティスにおける天変地異の原因です。そのような状態で使い続けていたので、寿命をどんどん縮めていたのですね。それがたまたま、先程限界が来たというだけです」

愛音の奥歯がぎりっと音を立てる。怒りをこらえ、那由多に向かって話しかけた。
「那由多博士……あなたが調べた結果を聞かせて。創世の御柱とは、何だったの？」
「創世の御柱の正体は、世界を作り上げるツールです。すなわち、創造主がこの世界を造ったときの工具……その置き土産です」
——この世界の、創造主だと？
那由多の話が、途端に胡散臭そうな話に聞こえた。
「それは、いわゆる神様ってやつか？」
「そうです。言い換えれば、この世界を作り上げた、別の世界の生物とも言えます」
つまりは、別の世界の誰かが、この世界を造った……ということになる。
「コアも同じです。これは創世の御柱を作った者たちが、自分に姿を似せるために用意した物のようですね」
「なぜ、そんなことをするんだ？　その創造主とやらは」
那由多は小さな頭を振った。
「それはまだ分かりません」
怜悧がウインドウの向こうから、殺意のこもった声を投げつける。
『先程、貴様は神になったと言ったな？　つまり貴様は創造主と同じ存在、この世界を作り上げた生き物と同じ存在になったとでも言うのか？』
「あら、怜悧にしては理解が早いのね」
那由多はわざとらしく驚く仕草をしてみせた。
「私は、コアや創世の御柱のテクノロジーを理解したいと思いました。そして、解析を続けるにつれ、これらを作った創造主そのものに興味を持ったのです。彼らはどんな存在なのか。どうしたらその超絶的な存在に近付く事が出来るのか」
小さい手を上げ、人差し指をぴんと伸ばした。
「そこで私は考えました。創世の御柱が世界を構築し、生命を作り出すことも出来るのであれば、私自身を作り替えることも出来るのではないかと」
那由多は白衣の裾を広げ、くるりと回転した。

「そして、ご覧の通り——大成功です」
満面の笑みを浮かべる那由多は、無邪気で、可愛らしく、禍々しかった。
「しかし、このアトランティスと我々の世界であるレムリア、その両方を作ったほどの存在です。まだまだ不明点が多い。私はその存在を明らかにし、この世界の全てを理解するために研究を続けていたのです。ですので、これはその実験の一つに過ぎません」
ケイのウインドウが那由多の目の前で立ち上がった。
『那由多博士、識名です』
「ああ、ケイ。元気そうね。何かしら？」
『先程、我々の世界も創造主が作ったとおっしゃいましたが、その根拠は何でしょう？　仮にそうだとして、なぜ地球にはコアや創世の御柱がないのですか？』
那由多は薄笑いを浮かべた。
「レムリアにもちゃんとありますよ。コアも、創世の御柱に相当するモニュメントも。だからこそ、我々の世界も創造主が作ったと言えるのです」
——何だ、それは？
傷無は我慢出来ずに、話に割り込んだ。
「一体何処にあるっていうんだ！　そんなものが発見されれば大ニュースだろ？　だが、そんな話は聞いたことがないぞ！」
「いいえ。傷無はとても良く知っているはずよ」
「……俺が？」
那由多は傷無を指さした。
「エロスは地球で発見されたコアよ」
——なに？
傷無は自分の胸に手を置いた。
このエロスのコアが……元々、地球にあった？
「他のコアは異世界間衝突の際に、こちらの世界に落ちてきたものと思われます。しかし、エロスだけは違う。約

百年前に地中海の島で発見された謎の物質。でも、どうみても近代の工業製品か玩具にしか見えなかったからでしょうね。オーパーツと騒がれることすらなく、とあるコレクターの倉庫にずっと眠っていたものよ」

そんな……

全てのコアは異世界間衝突の際に地球に落ちてきた、異世界の物質だと思っていた。だが、元々地球にもコアがあっただと？

そうすると、俺たちの世界を造った奴がいて……それは、このアトランティスを造った奴と同じ存在ということになる。

俺たちがいた世界も、誰かが造ったものだと？

傷無の頭は混乱した。

理屈は分かったが、理解も納得も出来ない。

それは傷無だけではなく、この場にいる全員が同じ思いだった。

怜悧やケイも驚愕した。

怜悧は視線を泳がせながらも、母親に食って掛かった。

『しかし……創世の御柱なんてものは、どこにもない！　あなたの妄想ではないのか!?』

「あります。ただ発見されていないだけ」

『あんな巨大なものが、発見もされずにどこにあるというのだ！』

「それは……あら？　のんびりと話している場合ではなさそうね？」

一段と空が下がってきた。夕日に染まった空一面に一斉に亀裂が走り、割れたガラスのように空の破片が落ちてくる。

「もうこの世界は終わりね。衝突面でつながったレムリアに、どれくらいの影響が出るか楽しみだわ」

その言い様に、傷無の中で何かが切れた。

「今まで、この世界を救うために……俺たちがどれだけの思いで、ここまで来たと思っているんだ！　あんたは！」

傷無は拳を握りしめる。燃え上がる怒りが、体中にエネルギーを循環させる。

「母さん！　この世界を救うのに協力してもらうぞ！　力尽くでもな！」

「まあ。こんな幼女相手に、殴りかかるつもりですか？」

「ぬかせ！」

くすりと笑うと、那由多は口元を押さえた。

「ハイブリッド・カウントも底をついている状態で、私を相手に出来るのですか？」

那由多の体が魔力の光で輝き始めた。

「まさか……」

傷無の動悸が激しくなる。

那由多の体から生まれた魔力の光が魔術式を書き、その式が瞬時に物質化されてゆく。それは体から機械の部品が生成され、見えない手によって次々と組み立てられてゆく様を思わせた。

愉悦に満ちた微笑みで那由多は語る。

「神は己の姿に似せて人間を造ったといいますが、ハート・ハイブリッド・ギアも創造主が己の姿に似せて造った物。あなたたちに、特別にオリジナルを見せてあげましょう」

背中から生成された部品が左右に伸びて、大きく太い腕が構築されてゆく。そして脚に穿くような形で、ロボットのような大型の脚部ユニットが造られる。腕も脚も、それぞれが那由多の身長よりも大きい巨大な物だ。

そして背中には、美しい光沢を持った板が扇を広げたように展開する。それは楯のようでもあり、翼のようでもあった。美しい規則性を持った扇は左右対称に開き、翼幅は六メートルにも及んだ。

「これが今の私の真の姿」

頭にはかんざしの形をしたヘッドセットが、体には大きく肩を出した振り袖のような着物が作り上げられる。それは七五三を祝う貴族の娘の如き出で立ちだ。

着飾った那由多とコーディネイトしたかのように、装甲もまた美しい。優雅なラインと漆のような光沢。典雅な装飾と艶やかさ。戦う為の兵器というよりは、儀礼用か観賞用ではないかとすら思える。

生まれ変わった姿を見せた那由多に、傷無は思わずつぶやいた。
「ハート・ハイブリッド・ギア……」
紛う事なき、大型のハート・ハイブリッド・ギアだ。しかし、傷無のエロスや愛音のゼロスなどとは、一線を画する存在感がある。それは単に大きさだけでなく、造型や質感の違い、そして全身から放つ高貴な魔力。他のハート・ハイブリッド・ギアとは明らかに格が違うことを感じさせた。

そしてもう一点、違和感を覚えることがあった。それは、那由多と装甲が完全に融合しているような一体感にあった。生物と機械の境目が曖昧になってしまったような存在。そんな別種の生き物に変わってしまったような、そんな気がしたのだ。
那由多は自慢するように、両手を広げた。
「さあ、力尽くで言うことを聞かせたいのでしょう？　構ってあげますよ。子供と遊んであげるのも、親の役目ですから」
「く……」
傷無の奥歯が、ぎりっと音を立てる。
傷無も愛音もハイブリッド・カウントが限りなくゼロに近付き、もはやハート・ハイブリッド・ギアを維持することも出来ない。グレイスなら魔力は残っているだろうが、今はまだダメージが残っているだろう。
傷無はちらっと、倒れているゼルシオーネの様子を窺った。
ゼルシオーネは戦うどころか、すぐに手当てをしないと危険な状態だ。
今度は部屋の中へ視線を送る。
ヴァルデは部屋の中央で座り込み、虚ろな瞳で床を見つめている。あれでは、とても戦えるとは思えない。
傷無は必死に考えた。
——今からグラベルを呼ぶか。しかしグラベルもアルディアも、ガートルードだって、消耗しきっているはずだ。
傷無はもう一度、空に浮かぶ那由多の姿を見上げた。ステイタスを確認したわけではない。だが、分かる。分かってしまうのだ。幾つもの死線をくぐり抜けてきた本能が警告をする。あれは強い。途轍もなく。
「畜生……打つ手なしかよ」
「遠慮しているのですか？　それでは私の方から行きましょうか」
那由多が機械の腕を前に伸ばす。その手の先が分解して、変形する。パズルのように部品の組み替えが行われ、手の先に粒子砲の砲口が出現した。
それは、元々そういった機構が備わっていた……という風には見えなかった。まるで、今必要になったから造った——そんな感じに見えた。

傷無の胸の内に、得体の知れない恐ろしさが湧き上がった。かつて自分の母だった生き物。それが、正真正銘の怪物に変貌したことを理解させられた。

粒子砲の砲口に魔力の光が集まってゆく。今この状態で放たれたら、一巻の終わりだ。

「さあ、傷無。行きますよ」

——その時、粒子砲の金色の光が、夕闇の迫る空を横切った。

その光が那由多に命中する。強烈な光の爆発が、傷無の目の前で起きた。

「うおっ⁉」

衝撃波に体を突き飛ばされ、傷無は後ろによろけた。

今の光は——まさか⁉。

一瞬で空を渡る金色の大口径粒子砲。

遠距離からの正確な砲撃。

「キズナーッ！」

聞き覚えのある声が、傷無の名を呼んだ。

「ユリシア‼」

懐かしさすら感じる、青いハート・ハイブリッド・ギア。金色の髪をなびかせ、世界最強と謳われた少女が飛んでくる。

「ほんっとうに久しぶりの戦線復帰よ！　たまったストレスを解消させてもらうからね！」

頼りになるアメリカの元エース。天地穹女神のユリシア・ファランドールだ。

「弩弓駆剣！」

そのユリシアの後ろから、空飛ぶ剣が飛来する。四本の剣は縦横無尽に空を駆け、那由多に襲いかかった。

「姫川！」

傷無の声が弾んだ。

「那由多博士！　これ以上の悪行狼藉は許せません！　姫川ハユル、参ります！」

姫川は腰の鞘から壮鋭刀を抜き、那由多に突っ込んで行く。

那由多は背中の扇状の翼をシールドとして、弩弓駆剣を弾き返す。しかし、弩弓駆剣は何度でも空中で向きを変え、執拗に那由多の隙に斬り込んで行く。そこへ姫川自身も、壮鋭刀で斬りかかった。

「なるほど。天地穹女神も勢揃いというわけですね」

那由多は背中と脚のスラスターから魔力の粒子を吐き出すと、姫川の斬撃をかわして上昇する。しかし、かわした行く手に巨大な影が立ちふさがった。

「逃がさないデス！」

その大きさは、那由多のハート・ハイブリッド・ギアすら凌ぐ。シルヴィアの超巨大ハート・ハイブリッド・ギア『タロス』だ。

「那由多博士、この世界を救う方法を教えるデス！」

タロスはハンマーのような巨大な右腕を振り下ろす。喰らえば、一撃で圧縮され、地面に叩き付けられるであろう強烈な一撃だ。

「ふふ、そのハート・ハイブリッド・ギアには興味がありました」

那由多が生身の腕を上げると、機械の腕も同じように上を向く。そして、タロスのハンマーを受け止めた。金属同士がぶつかり合い、軋みを上げる音が轟く。

「う、受けきったデスっ⁉」

「コアのインストール方法を変えるだけで、ここまで結果が変わるとは。実に興味深い」

そのとき、シルヴィアの後方から大量のミサイルが接近してきた。

タイミングを見計らってシルヴィアが離脱する。その直後、那由多に四方八方からミサイルが着弾した。爆炎が連鎖を起こすように広がり、那由多が炎の塊に包まれた。

「あたしたちだっているんですからね！」

五機のハート・ハイブリッド・ギアが傷無の頭上を通過する。

「スカーレット！　それに——」

五人は空中で停止すると、くるりと回ってポーズを決めた。

「マスターズ参上！」

どうやらアイドル活動が体に染みついているらしかった。しかし、名乗りを上げるやいなや、一斉に銃を構える。

そして爆炎の中から姿を現した那由多に向かって、迷わず引き金を引いた。弾丸が雨あられの如く、那由多に降り

かかる。

「イエーイっ！　数ヶ月ぶりのこの感覚！　やっぱ、最ッ高だぜえええええええ！　トリガーハッピー!!」

クレメンタインは危ない目をして、壊れたようにライフルの引き金を引きまくる。オレンジ色の髪を編んだ二つ編みを大きく暴れさせ、心の底から楽しそうに弾丸を発射する。

その隣では、シャロンがゴスロリのパイロットスーツの上にハート・ハイブリッド・ギアを身に付け、アサルトライフルを連射していた。

「本当に……ひさしぶり。ふふっ、ちょっとイイかも」

調子に乗って連射をしていたせいで、弾切れを起こす。すぐさま腰のユニットから新たなカートリッジを引き抜き、弾切れとなったカートリッジと交換する。そして空になったカートリッジを、腰のユニットに差し込んだ。ハイブリッド・カウントから弾丸を生成し、自動的にカートリッジに給弾される仕組みだ。

那由多が遠くを見ようとすると、自然と視線の先がズームアップされる。しかもマスターズの一人一人の姿が、個別に映像情報として伝わってきた。肉眼では通常有り得ない、複数枚のモニターを同時に見ているような感覚だった。

「マスターズ……そういえばあなたたちはアイドルになる前は、アメリカ軍のハート・ハイブリッド・ギア部隊でしたね」

スラスターから光の粒子を放ち、那由多の体がふわりと弾丸を避ける。スラスターの制御による機械的な動きとは思えない、流れるような自然な動きで空中を漂う。ハート・ハイブリッド・ギアを自分の体の一部として、完全に制御している証拠だった。

「あたしが動きを止めてやるわ！」

金髪ショートカット、守銭奴のレイラが銃身の短いショットガンを片手でぶっ放す。光が凝縮した弾丸が、レイラの前一帯にばらまくように発射された。

「今日は出血大サービス！　弾丸の在庫一斉処分よ。今日ばかりは、赤字覚悟だからね！」

那由多は空中で足を止めた。

「散弾が広がり、広範囲の敵を一度に殲滅する武装ですね……しかし、一発一発の威力はさほどではありません」

「うわっ！　むかつく！　ヘンリエッタやっちゃってよ！」

レイラの横には、長大なアンチマテリアル・ライフルを構えるレイラがいた。

「動きを止めてくれて助かったわ」

引き金を引くと、那由多の眼前で大きな火花が散った。小型の爆弾が破裂したような衝撃波が辺りを襲う。

アンチマテリアル・ライフルの爆発力は、着弾地点だけでなく発射したときの衝撃波も半端ではない。殴りつけるような衝撃波がヘンリエッタを囲むマスターズ全員の横っ面を叩いた。ミサイルユニットを開き、次のロットを発射しようとしていたスカーレットも、思わず怯んだ。

「ぶわっ！　ちょっとヘンリエッタ！　もっと離れて撃ちなさいよ、迷惑じゃない！」

「ええっ!?　そんな、もうちょっと言い方ってものが……」

理不尽な仕打ちに、ヘンリエッタが泣きそうな顔になる。仲間に不評を買いながらも放った一発だが、那由多にはそよ風ほどの影響もなかった。

「確かに、破壊力は高いですね。ですが、この程度では絶対領域のテストにもなりません」

残念そうな那由多に向かって、スカーレットはアレスのミサイルユニットを開いた。

「第二陣、一斉発射！」

再び那由多が爆炎に包まれる。同時に、ミサイルユニットから大量に噴き出した炎と煙は、近くにいたマスターズのメンバーを包んだ。

「げほっ！　おい、スカーレット！　迷惑ってレベルじゃねえぞ！」

クレメンタインがぶち切れて怒鳴る。

「確かに……ヘンリエッタのライフルどころじゃない」

シャロンもじっとりした目をスカーレットに向ける。

「し、しょうがないじゃないの！　ミサイルなんだし！　その分、破壊力だって大きいんだから！」

必死に言い訳するスカーレットに、レイラが吐き捨てるように言った。

「いいから、どっか行ってよ」

スカーレットはショックを受けて、目が点になった。

「なによおおおお！　そんな言い方しなくたって、いいじゃないのよ！」

そんなやりとりを、傷無と愛音は呆れた目で見つめた。

「緊張感とか危機感って言葉とは無縁の世界に生きているよな……あいつら」
「そうね……でも、あのバカなやりとりの間も攻撃の手を緩めないのは、さすがと言っていいのかしら？」
『傷無！』
怜悧からの通信が傷無の前に開いた。
「姉ちゃん！　今、天地穹女神とマスターズが母さんと戦っている。俺もハイブリッド・カウントを回復させたいんだが、何か方法はないか？」
『接続改装をするための装置を発射した。お前がいる部屋の中央に着弾予定だ。注意しろ』
「部屋の中って……!?」
そこにはまだヴァルデがうずくまっていた。
傷無ははじかれるように部屋に飛び込むと、ヴァルデの手を掴んだ。
「立て！　バルコニーへ来るんだ！」
そう言った傷無の耳に、空気を切り裂く音が聞こえた。
「やばい！　間に合わねえ！」
傷無はヴァルデの体を抱えて、バルコニーへ向かって飛んだ。その瞬間に部屋の壁がひび割れた。壁を突き崩して、直径三メートルの弾丸が部屋に飛び込んできた。絨毯の上に、壁の破片が散らばり、粉塵が巻き上がる。
倒れた傷無が顔を上げると、砲弾型のカプセルがつま先ギリギリの位置に滑り込んでいた。傷無は安堵の溜息を吐いた。
「……何とか助かったな」
傷無は体を起こしヴァルデに話しかけた。しかしヴァルデはまだ、心ここにあらずという様子だった。まるで魂の抜け殻だ。
ヴァルデは那由多のことを信じていた。心酔していた。母のように慕っていた。それだけに、ショックだったのだ。欺かれ、裏切られたことが。
「立てるか？」
自分を助けてくれた男にそう言われたが、答える気になれなかった。いっそ、死んでも良かったのに。そうヴァルデは思った。

ヴァルデは顔を上げ、部屋に飛び込んできた物体を見上げる。ぼんやりした瞳で見つめていると、側面に付いたハッチが開き、中から黒髪の女性が姿を現した。
「傷無、それとそっちの君。怪我はないか？」
ヴァルデは雷に打たれたように、立ち上がった。
「ナ……ナユタ、さま？」
しかしその女性は、あからさまに不機嫌な表情を浮かべると吐き捨てるように言った。
「私をそんな生き物と一緒にするな」
ヴァルデは怯えたように縮こまる。
その女性——怜悧は溜息をつくと、傷無と愛音を呼んだ。
「傷無、愛音！　急げ。接続改装を行うぞ！」
傷無は驚きのあまり、声が裏返りそうになった。
「何だって!?　いくら何でもこの状況じゃ無理だろ!?」
「この状況だからこそだ！」
怜悧は上空で展開される、那由多と天地穹女神とマスターズの戦闘を見上げた。
「相手はあの那由多だ。接吻改装をしたお前たちの力が必要になるはずだ！」
愛音は心配そうに、隣に立つ妹の顔をのぞき込んだ。
グレイスは愛音の瞳を見つめ返すと、安心させるように微笑んだ。
「心配無用じゃ、姉様。それより、何か大事な用事があるのじゃろう？」
「ええ。でも……」
「那由多め。奴には妾も腹に据えかねるものがあるのじゃ。ここは妾にまかされよ」
そう言うとグレイスは己のコアを呼んだ。
「コロス！」
グレイスは、再び金と銀の翼を持つ魔導装甲を着装した。それを見て、ゼルシオーネも震える腕で体を支え、体を起こそうとする。
「グレイス様……私も、お供致します」

「馬鹿なことを言うでない。ゼル、お前は休んでいるのじゃ」
「しかし……」
ゼルシオーネは、悔しげに奥歯を噛みしめた。
「おぬしの無念、この妾が晴らしてくれる。そこで見ておれ」
「グレイス様……っ！」
ゼルシオーネの目じりに涙が光った。
床を蹴って、グレイスは大空に舞い上がってゆく。その後ろ姿を見送ると、愛音は傷無に向き直った。
「行きましょう、傷無」
どこか吹っ切れたような、爽やかな笑顔で傷無に微笑みかける。
「……そうだな。一刻も早く、助太刀にいかないとな！」
傷無も部屋に飛び込んできたカプセルへ向かって駆けた。
「急げ！　ハッチを閉鎖するぞ！」
傷無と愛音をカプセルの中へ招き入れると、怜悧はハッチを閉じてロックをかける。
「……で、これって何なんだ？　ＬＯＶＥＲＯＯＭとは違うよな？」
怜悧は壁のスイッチを入れる。すると暗かった部屋の奥まで明かりが点いた。
真っ白いベッド。その向こうに、マイクロビキニを着た識名京がいた。
「しっ！……識名さんんっ⁉」
傷無は腰を抜かしそうになった。
自分よりもずっと年上だが、完全な幼児体型。背が低く、小柄で線が細い。胸だってほとんどない。そんなケイが、白のマイクロビキニを着てこんなところにいる不条理。
——いつもナユタラボで指示を送っている識名さんがどうして？
愛音も驚愕に目を見開いていた。
「な、なんで……識名さんが」
さすがに恥ずかしいのか、無表情なケイの頬に微かに赤みが差していた。
『これは慰安搬送装置一号。ＬＯＶＥＲＯＯＭの研究段階で造られた試作版のようなもの。残念ながら、ＬＯＶＥＲＯＯＭはアタラクシアと共に破壊されてしまった』
ケイの叩くキーボードの文字が、フローティングウインドウに表示された。
傷無は部屋の中を見回した。
少し薄暗い室内に輝くきらびやかなシャンデリア。座り心地の良さそうな革のソファ。その前に置かれたテーブルには、円柱状の金属製のケースが固定されていて、中には氷とボトルが入っていた。
「慰安……確かに居心地は良さそうだが……いや、でもそれなら、何で姉ちゃんと識名さんがここにいるんだよ？　外に出て、愛音と二人っきりにしてくれないと……」
ちらりと愛音の方を覗き見ると、赤い瞳を伏せ恥ずかしそうに顔をうつむかせた。
「いや、お前たちだけでは時間がかかりすぎる」
傷無と愛音は、「え？」と声を漏らしつつ顔を上げた。
「今回はいわばタイムトライアルだ。最短時間で絶頂改装を行わねばならない。そこで、だな……我々も協力することにした」
「それって、どういうことだ？　分かるように……うわあっ⁉」
突然、怜悧がシャツを脱ぎ、白い下着に包まれた豊満な胸をさらけ出した。繊細なレースで編まれたブラが、怜悧の大きな胸を健気に持ち上げていた。香り立つような色気が、傷無に目まいにも似た感覚を起こさせる。
「ねっ、姉ちゃん！　な、なななななんだよ、その恰好は⁉」
「だ、だから言っただろう。我々も協力すると」
頬を朱に染めて、怜悧が慌てたように叫ぶ。そして、己の羞恥心をかなぐり捨てるかの如く、一気にスカートを下ろした。これで怜悧は下着姿にハイヒールのみという背徳的なスタイルとなった。
「どうしたのだ傷無。顔が赤いぞ？」
そう言う怜悧も顔が赤い。恥ずかしげに体をよじる姿が、しなを作っているように見えた。そして羞恥にうるんだ瞳は、姉ではなく一人の女の顔に思える。
ドキン、と音がしそうな程、傷無の胸が大きくときめいた。
——お、落ち着け、俺！　相手は姉ちゃんだぞ。冷静になるんだ！
どぎまぎする傷無を、愛音がじっとりした目で見つめる。

「ねえ傷無……あたしのときより興奮してない？」
「な、なにをおっしゃっているんですか。そんなことありませんよ、愛音さん」
「……何で敬語なのよ」
ケイが携帯用のキーボードを両手に持ち、親指でキーボードを打ち始める。
『今までの実績から、傷無と愛音が最も興奮する方法を模索した。傷無には我々がランジェリーでもてなすことで興奮を押し上げる』
「ちょっと待ってくれ！　何で俺が姉ちゃんと識名さんに興奮しなきゃならないんだよ」
「いいから落ち着いて、そこに座れ」
怜悧は横から体を密着させ、傷無の腕を取った。そしてソファへ腰を下ろすように促す。体を寄せられたとき、怜悧の大きな胸が傷無の腕に押し当てられる。
――なっ、なんて気持ちよさなんだ⁉　大きさも愛音よりあるし！
傷無は言われるがままにソファに腰掛けた。左に怜悧、右をケイに挟まれる。
「何か飲むか？」
「あ、ああ」
下着姿の姉と、きわどい水着の姉の親友に挟まれ、傷無はどうしていいか分からなかった。見おろすと、怜悧の胸の谷間がすぐそこにある。きれいな曲線を描く、量感も存在感も満点な二つの双丘からは、甘い香りが立ちのぼる。
「ほら、特製の栄養ドリンクだ」
氷の入ったグラスを手渡される。
「……ありがとう」
のんびりこんなことをしている場合か、と思ったが喉が渇いているのも事実だ。口を付けると喉の渇きが一層刺激され、一気に飲み干してしまった。するとケイのウインドウが目の前に現れた。

『はっきり言うが、絶対に販売出来ない成分が含まれている』
思わずむせた。
「え、それって……」
『体力と精力を回復させる為、特別に開発したもの』

文句を言おうと思ったが、ケイのマイクロビキニが胸から浮き上がり、隙間から見えるピンク色の頂に目と意識を奪われた。

識名さん、ビキニじゃブカブカなんだ……胸。

しかし、起伏の小さい胸が妙に背徳的でもあった。それに、ケイの胸を見てしまったという事実に、嫌でも興奮させられた。

「もう一杯飲むか？」

「え……うん」

優しく微笑む怜悧のランジェリー姿は、ケイとは正反対だ。暴力的なまでに豊満な胸は、見ているだけで頭がぼうっとしてくる。動く度に、いちいち揺れる胸もそうだが、むっちりした腰に穿かれたショーツとその下に隠された部分がとても気になる。どちらも生地が薄く、その下に隠されたものの色がうっすらと浮かび上がっている。

傷無の視線に気付き、怜悧は股間を手で隠した。

「こ、こら、そんなに見るな」

「えっ⁉　いや、そそそんなに見てないよ⁉」

一度視線が捕らわれると、引きはがすのが大変だ。何とか逆の方を向くと、待ち受けているのは幼児体型の体にマイクロビキニを身につけたケイの裸体である。

普段黙々と研究をしていて、色気も何も感じさせないケイがである。それがこんな刺激的な恰好をしている非日常感。ランジェリーの姉と挟まれたここは、まさに異世界である。

『今回の絶頂改装における狙いは、過去一番効果的だった事例を踏まえ——』

ケイが再びキーボードをタイプする。『傷無には怜悧と』までタイプしたように見えたが、すぐにカーソルが戻り文字が消える。

『傷無には新鮮な刺激が必要。我々のような普段セクシャルなことを想像させない女性が、こういった恰好をすることで生まれる意外性。それが傷無の劣情と興奮を呼び覚ます』

「そんなバカな！　俺が、姉ちゃんや識名さんに？」

『事実、傷無の脈拍、心拍数、海綿体の血流がかつてないほど上昇している』

怜悧は傷無の股間に熱い視線を送ると、喉をごくりと鳴らした。

「もう、あんなに……あのときよりも……すごいな」

「あのとき？」

傷無は、怜悧のつぶやきに首を傾げた。

「い、いや！　何でもない。とにかく、そういう理由で我々も一肌脱ぐことにしたのだ」

愛音は不満そうな顔で腕を組んだ。

「誰が上手いこと言えと……でも、あたしにとっては逆効果よ」

『それは違う。愛音に対しても我々の存在は効果的』

「は？　総司令と識名さんがどうやって、あたしを興奮させるっていうの？」

『二人が絶頂改装を行うのを、ここで観察する』

「なっ……⁉」

愛音の顔色がさっと変わる。

『これほど近くで観察できる機会はそうそうないので、非常に興味深い。観測機器も用意してあるので、愛音の体の変化を克明に記録出来る』

「そ、そんなの……いやよ。人に見られてて、出来るわけないじゃないの！」

「出来なければ、無理矢理やらせるまでだ。普段、傷無とどんなことをしているのか、一度確認してみたいと思っていた」

怜悧がどことなく怒気を孕んだ声でつぶやいた。

蒼白になった愛音の顔色に、今度は逆に赤みが差してくる。胸がドキドキと音を立てた。太ももを、もじもじとこすり合わせる。

「そんな恥ずかしい真似……できない」

『せっかくだから詳細なデータを取らせてもらう。これからの行為は映像も音声も、全て記録させてもらう』

「そんな……」

愛音の瞳が潤んだ。待ち受けている仕打ちを想像して涙ぐむ。涙に混じって、魔力の光が泳いでいた。

傷無はその輝きを見つめ、舌を巻いた。

「確かに……効果はありそうだ」

怜悧は傷無の耳元に口を寄せると、息を吹きかけるようにして囁く。
「がんばるんだぞ♥」
傷無の背筋を、ぞくぞくした興奮が駆け上がった。

◇◇◇

那由多はマスターズの一斉攻撃を受けても、ぴくともしなかった。機械の体が発生させる、絶対領域。それを、肌に密着する形で全身に張り巡らせ、全ての弾丸を弾き返していた。那由多は、まるでそよ風を受けているかのような涼しい顔だ。
「マスターズの攻撃程度なら、弾き返してしまうのですね」
那由多は納得したように、一人でうなずいた。
マスターズたちの射撃の腕はさすがだ。しかし着弾はするものの、漆のような光沢を持つ装甲には、へこみ一つ入れることすら叶わない。
「銃が駄目なら、直接叩き斬って差し上げます！　弩弓駆剣！」
姫川の背後に控えていた空飛ぶ剣が、那由多に向かって飛びだした。一瞬で那由多を串刺しにするはずだった。
しかし、弩弓駆剣が向かった先に、那由多の体はなかった。
「えっ!?」
どこまでも敵を追跡するはずの弩弓駆剣が、那由多を見失った。それほど急激な動きだった。姫川は那由多の姿を捜し、きょろきょろと辺りを見回す。
センサーのアラートが上方からの危険を知らせた。
脊髄反射で弩弓駆剣を上へ飛ばす。弩弓駆剣が空を駆け上がり、落下してくる那由多を迎え撃った。しかし那由多も剣を抜くと、目にも留まらぬ早業で剣を振るい、弩弓駆剣をことごとく打ち返した。
「そんなっ!?」
驚愕する姫川に向かって、那由多が落下する。驚きのあまり、姫川の反応がほんの一瞬遅れた。その隙に那由多の容赦のない一撃が振り下ろされる。

「くうっ！」
何とか防ごうと、壮鋭刀を頭上に掲げる。しかし、那由多の剣は姫川の壮鋭刀をへし折った。そして、そのままネロスの装甲を叩き割る。
「つ……っ!!」
胸の装甲が砕け、破片が宙に舞う。体が痺れ、身動きできないまま地上へ落下していった。さらに追い打ちをかけようと、那由多は急降下する。
とどめの一撃を加えようとしたそのとき——那由多は真横に突き飛ばされた。横から衝撃を加えたのは、極太な光の柱。大口径の粒子砲の砲撃だった。
那由多は砲撃の飛んできた方向に目をやった。普通の人間の視力では、光が飛んできた方向を見ても何も見えない。しかし那由多の視力は、遥か遠方、亀裂の入った空の彼方にいるユリシアの姿を捉えた。
「なるほど。今のが攻機動粒子機関ですか」
感心したように粒子砲を受けた扇を撫でる。
那由多は少し思案すると、機械の腕を伸ばした。腕の先が、粒子砲へと姿を変える。
その右腕が爆発的な光を放った。腕の周りに光のリングが広がり、その中心を貫いて魔力の光がひび割れた空へ伸びてゆく。一直線に伸びる光の先には、ユリシアがいた。
那由多に照準を合わせ、次の射撃を狙っていたユリシアは、逆に自分が狙われるとは思っていなかった。
「ちょ……！」
咄嗟に攻機動粒子機関を攻撃力から推進力に切り替える。那由多の粒子砲の光が、ユリシアの顔をかすめた。美しい金髪の先が、数センチ蒸発する。
「この距離で!?　嘘でしょ！」
スラスターを全開にして急降下する。城から一番近い第一城壁の裏に隠れると、城壁に沿って周回する。突然、行く手の城壁が爆発した。
「うそっ！　正確に狙ってる!?」
那由多の粒子砲は、城壁を突き崩しながら、その後ろにいるユリシアを追い立てた。そしてついにはユリシアを正確に撃ち抜いた。

「くっ！」
攻機動粒子機関を破壊され、ユリシアが街中へ不時着する。
「それ以上はさせないデス！」
シルヴィアのタロスが那由多に向かって突っ込んでゆく。巨大なロケットは凄まじい推進力で、タロスの巨体を軽々と加速させる。タロスは右腕のハンマーを振り上げた。
「その攻撃は通用しないと分かっているはずでしょう？」
那由多はタロスの一撃を待ち受けた。
シルヴィアの目が光る。
「イグニス！」
タロスの両肩にある主砲が火を噴いた。戦艦の主砲並みの火力が、至近距離から那由多を襲った。激しい爆炎が那由多の姿を包み隠す。
「⁉」
那由多に直撃したと思われた。しかしシルヴィアの顔に緊張が走る。振り上げたハンマーを振り下ろす。そのまま体を一回転させ、確認もせずに真後ろにハンマーを叩き付けた。壁にぶつかったように、ハンマーがぴたりと止まった。
「いい勘をしていますね」
那由多が小さな手で、自分の体ほどもあるハンマーを受け止めていた。
「確かにパイロットとしての才能は突出したものがあります」
軽く手首のスナップをきかせると、タロスの巨体が地面に向かって吹き飛んだ。
「きゃあああああああ！」
城内にある五階建ての建物の屋上に落下した。その建物を押し潰し、次々とフロアを壊しながらタロスが地面に激突する。まるで解体作業をされたかのように、瓦礫と化した建物がシルヴィアの上に降りかかった。
那由多は自分の手首を回して、タロスを投げ捨てた腕の動きを確認した。
「だいぶ、この体の性能が分かってきました」
そこへ再びマスターズの砲撃が飛んでくる。一発一発は、魔導兵器を倒す威力を秘めている。にもかかわらず、那由多には傷一つ付けられない。
「あーもーっ！　何なのよ、あいつはっ！」
メガネのずり落ちたヘンリエッタが、大声を上げた。怒鳴らなければ、不安と恐怖でどうにかなりそうだった。自分たちの攻撃がまったく通用しない。ここまで無力さを感じたのは初めてだ。
「みんな頑張って！　あいつにだってエネルギーの限界はあるはずよ！」
スカーレットの激励に、マスターズは折れかけた心を立て直した。
雨あられと降り注ぐ弾丸に上乗せして、ミサイルの弾幕が那由多に向かって飛んで行った。那由多は避けることなく、そのミサイルを受ける。幾つもの爆発が起こり、那由多の体が見えなくなった。
「イエス！……え⁉」
ガッツポーズをしようとしたスカーレットの手が止まる。
炎の中から姿を現した那由多は、マスターズに向かって優雅に手を広げた。
「では、マスターズのみなさんと公平になるように、同じレベルの火力を用意しましょう」
那由多の背中に広がる黒漆と金屛風のような扉。その表面にマスターズが使っている武装が映り込む。
「あれ……あたしのライフル？」

「シャロンのだけじゃねえ。あたしのも……何だ、ありゃ？」
シャロンが怪訝そうな表情を浮かべた。
クレメンタインも首をひねった。
それぞれ愛用の銃器が、３Ｄモデルのように三百六十度回転する。そしてぴたりと正面を向くと、扉の中から浮き上がってきた。
「何よあれ⁉」
スカーレットが素っ頓狂な声を上げた。
扉に映っていた映像が実体化した。ライフルやショットガン、アンチマテリアル・ライフルにミサイルポッドなど、自分たちの武装と同じ物が那由多の周りを取り囲んだ。
那由多が小さい拳を前に突き出し、指を開く。
その瞬間に、マスターズに向けて一斉砲撃が開始された。

「うぎゃあああああああああっ！」
今まで自分たちが放っていた弾幕が、自分たちに返ってくる。マスターズは蜘蛛の子を散らすように、散り散りになって逃げ惑った。
生成された武器を見上げ、那由多はうっとりとした笑みを浮かべた。
「物質の生成も可能なのですね。まさに全知全能の存在……神と呼ぶに相応しい」
「貴様が神などと、片腹痛いわ！」
那由多の前に天使が現れた。剣の翼に鎌を振り上げた殺戮の天使、コロスを着装したグレイスだ。その手に握られた、命を刈り取る鎌が振り下ろされる。
那由多の顔の前で、鎌が何かにぶつかったように衝撃を受けて止まった。
「――っ!?」
那由多の小さな指が、巨大な鎌を挟んでいた。人差し指と中指で鎌の刃を押さえている。
「なん……じゃと」
グレイスは驚愕に目を見張った。
一撃で真っ二つになるはずだった。防がれたとしても、機械の腕で防ぐと思っていた。まさか生身の腕で、しかも指先で止められるとは信じがたい。
険しい顔のグレイスに、那由多は見た目だけは幼い顔で笑いかける。
「グレイス様の能力は相手の魔力……生命力を奪うこと。奪ってみますか？　この私の生命力を」
グレイスは奥歯を噛みしめた。そうしないと体が震えそうだった。
――恐怖を感じておるのか？　この妾が？
無垢な微笑みを浮かべる那由多を睨み付けた。
――そんなバカなこと、ありえん！
「魔力吸収!!」
グレイスのピンクの髪が輝き、コロスの翼から光の羽が那由多に向かって放たれる。那由多の体に面白いように光の羽が突き刺さった。
「もらったぞ！　貴様の魔力！」

那由多の体を突き抜けた羽が、那由多の持つ魔力を吸い上げてコロスの翼に持ち帰る。
「ははは、吸い尽くしてやるわ！」
目まぐるしく光の羽が行き来する。しかし、しばらくしてもその勢いが止まらない。してやったりという笑みを浮かべていたグレイスの頬に、冷や汗が流れた。
――こやつ、どれほどの魔力を持っておるのじゃ？
グレイスの体がどんどん輝きを増してゆく。これはグレイスの体に蓄えきれない魔力が溢れ出していることを意味している。
――もうこれ以上は吸い取れぬ。妾の体の方が破裂してしまう！
那由多がグレイスに向かって、無邪気な微笑みを見せた。その微笑みは、グレイスを震え上がらせた。
「もうお腹いっぱいなのですか？　思ったより小食ですね」
「ナユタ……貴様」
「では食後の運動でもしましょうか？」
言い終わるより先に、グレイスの体が吹き飛ばされていた。
「ぐあっ！」
突然全身を襲った衝撃に、グレイスは混乱した。
――な、何が起きたのじゃ!?
気が付くと、体が王城の尖塔にめり込んでいた。
「っ……!?」
はるか彼方に那由多が佇んでいる。
――あそこから……飛ばされたのか？　どうやって？　何で？
まばたきをした。
まぶたを閉じて、開くと、彼方にいたはずの那由多が目の前にいた。
「……!!」
腹に凄まじい衝撃を受ける。
「ぐはっ！」

那由多の機械の腕が、恐ろしい回転数で打撃を繰り出し続ける。その衝撃で、尖塔の石壁が崩壊する。亀裂が尖塔を取り囲み、爆発するように破片と砂埃を吐き出す。コロスの装甲にヒビが入り、翼が砕ける。
「がっ！……はあっ！……ぐっあああぁ！」
そしてついに尖塔は途中で折れた。破壊された尖塔と共に、グレイスの体が落下してゆく。降り注ぐ瓦礫をその身に受けながらも、グレイスは瓦礫の雨から離脱した。そして、城の中庭に転がり落ちるように着地する。
その前に、見上げるほど大きく、美しいハート・ハイブリッド・ギアが降り立った。
「自慢のコロスも大したことがないのですね……これならば、傷無と愛音の方が、まだ歯ごたえがあるかも知れません。やはりあの二人に相手をしてもらいましょう」
「ナユタ……」
グレイスは震える足で立ち上がった。しかし、視界がぐるぐる回り、まっすぐ立つのも難しい有様だ。
勝てるはずがない。だが、戦わなければならない。自分が倒れたら、次はゼロスを血祭りに上げようとするかも知れない。
「せっかく仲直りしたのじゃ……姉様に手出しはさせぬ」
そう呪文のように唱えると、翼から鎌を引き抜いた。
「うわあああああああああっ！」
渾身の力で、那由多に向かって斬り付けた。しかし、岩に跳ね返されたような手応えに、体がはじき飛ばされた。
グレイスの体が、芝生の上を転がった。
「ぐ……げほっ……ナ、ナユタ……」
那由多は機械の腕で鎌の刃を受け止めていた。しかし魔力を奪われた為、指先が切り落とされている。それを見て、グレイスがにやりと微笑む。
「ふふ……貴様の装甲も、魔力を奪われれば、消えて無くなるのじゃな」
しかし那由多は、余裕の微笑みを返した。
「ああ。これですか？　ご心配には及びませんよ」
そう言うやいなや、切断された那由多の機械の腕が、再び部品が根元から生えるように、再生してゆく。
「な……なん、じゃと？」

グレイスの目が、信じられないものを見たように泳いだ。
那由多は倒れているグレイスに近付くと、再生された腕でコロスの翼を掴む。力を入れると、大きく翼の骨組みがたわみ、あっさりと砕け散った。
にっこりと那由多は微笑む。
「他にはどんな武装があるのですか？　まさか、これだけではありませんよね？」
グレイスの目に涙が滲んだ。
「な、なめるな……まだ、これからじゃ！」
震える指で拳を作った。
「うっ……はあああっ」
那由多に殴りかかった。背が届かず、大きな脚部ユニットの装甲を殴った。しかし装甲の守りは堅く、傷一つ付けることが出来ない。しかし今できることはこれしかない。
「くすっ……姿が、姉様を……ぐあっ！」
那由多の鋼鉄の腕が、グレイスの首を掴んで持ち上げた。
「がっ……！」
首を絞められ、息が詰まる。
「グレイス様には失望しました。この程度の力しかなかったとは」
「くっ……ナ、ナユタ……きさま、だけは……ゆるさ……」
グレイスの視界がもやがかかったように、白くなってきた。
「お疲れ様でした。もう休んで結構ですよ」
グレイスの首を絞める力が強まる。
苦しい。そして身動き一つ出来ない。
――こんな、死に方なのか？
確かに姉様に裏切られたと思ったときは、こんな世界滅びてしまえと思った。
だが、姉様と一緒に世界を救おうと決意した。
その矢先に、これか。

何も出来ず、
何も救えず、
こんな奴に騙されて全てを失うのか。
グレイスの目から涙があふれた。
意識がか細くなってゆく。
――だれか、
――だれか、助けて。
――だれ？
「その手を離せ」
誰かが、那由多の鋼鉄の腕を掴んだ。
グレイスは薄れ行く意識の中で、その姿を見つめた。
黒い髪に黒い瞳。そして漆黒の装甲。
――レムリアの、魔王。
黒光りする装甲は、新品同様の輝きを放っている。
傷無は那由多の鋼鉄の腕をつかみ、若返った母親の顔を睨み付けていた。
「傷無……意外ね。あなたの存在に気が付かなかったわ」
相変わらず那由多は穏やかな口調だった。しかし、その微笑みに硬さが混じった。
「それは、母さんが俺の存在価値を認めていないからだろ」
那由多の腕を掴む、傷無の指に力が入った。
「！」
傷無の指が、那由多の機械の腕を握りつぶした。グレイスの体が地面に落ちる。
「げほっ！　がはっ……！」
目に涙を浮かべ、グレイスは激しく咳き込んだ。
「グレイス！」
愛音がグレイスの側に舞い降りた。そして妹の体を抱き上げる。

「大丈夫？　グレイス」
「姉様……来てくれたのか」
グレイスは姉の顔を見て、安堵の微笑みを浮かべた。那由多はグレイスと愛音の姿を横目に、己の息子と向き合った。
「純粋な腕力のみで、この私の腕を砕くとは……期待できそうですね」
拳を握り、傷無は己の母親に向かって構えた。
「母さん。はしゃぐのはここまでだ。創世の御柱を修復する方法を教えてもらうぞ。見ての通り、世界の破滅が近付いているからな」

深刻な表情の傷無に向かって、那由多は安心させるように微笑んだ。
「それならば、慌てる必要はありませんよ」
「なに？」
「私は神様になったのです。この世界が滅んだとしても、また新しい世界を私が造ってあげます」

傷無は怪訝そうに訊いた。
「それはどういう意味だ？　また、世界を造るだと？」
「ええ。この世界は、創造主が造ったもの。今の私は、その創造主たちと同じだけの力を持っています。ですので、この世界が滅びても、また新しい世界を造れるはずです」
――何を口走っているんだ？　この人は。
「母さんが言ってることは訳が分からない。仮に新しい世界を造ったとして、それが何だ？　それは俺たちがいる世界とは違う！　俺はこの世界を守りたいんだ！」
那由多は思案するように、指を口元に当てた。
「でしたらゲームをしましょう。私を倒すことが出来たら、この世界を救う方法を教えます。他の魔導装甲やハート・ハイブリッド・ギアでは、私の新しい体の実験には力不足のようです。是非頑張って、この体の限界がどこにあるのか教えて下さい」
「くそっ！　こんなときにまでゲームだの、実験だの言いやがって！」
傷無は激しい憤りを感じた。しかし今は、那由多の言うとおりにせざるを得ない。
「いいぜ。望みどおり、倒してやるよ！　その代わり、必ずこの世界を救う方法を教えてもらうぞ！」
「分かりました」
那由多はウインドウを開くと、何事か入力をした。
「万一私が命を落としても、全てのデータを残すように設定しました。では、頑張りなさい。期待していますよ、傷無」
那由多は傷無に握りつぶされた腕を前に出す。すると、破壊された内部構造が修復され、つぶれた装甲を押し上げる。そして装甲もまるで新品のような輝きを取り戻した。
傷無はその腕を、そして母親を睨み付けた。
「ああ……期待に応えてみせるよ」
那由多の姿が、ふっと消えた。
だが、傷無の目には、しっかりと那由多が離脱した動きが見えていた。
「今度こそな！」

その瞬間、傷無の姿が消えた。稲妻のような音と共に、傷無が立っていた地面がクレーターのように凹んだ。傷無は那由多の後を追って、大空に舞い上がった。しかし、予想以上に早く、空に走った亀裂が迫ってきた。

「こんなに空が落ちてきているのか……急がないと！」

傷無は顔の横に表示したフローティングウインドウを確認する。接吻改装の残り時間が表示されていた。

——三十秒。

那由多も消えるように空を駆ける。その後を追って、傷無が加速する。音速を遥かに超えた速度のドッグファイトが展開された。

ゼルティスの上空で、超高速で戦う影が交錯する。しかし、普通の人間には、その姿を捉えることは出来ない。二人は、誰にも追いつくことの出来ない領域で戦いを展開した。

空中で火花が散り、放電が起きる。そして遅れて音が響く。

二人の激突をうかがい知れるのは、それだけだ。

傷無の速度がさらに上がる。もう少しで追いつく、というところで那由多が急に振り向いた。そして手にした剣を一閃する。

「うおっ！」

剣の切っ先がエロスの胸の装甲を斬り裂いた。しかし構わず傷無は那由多の懐に飛び込む。さらに速度を上げ、体を左右に振って剣の攻撃を避けた。

加速した傷無の拳が、那由多の装甲に何発も叩き込まれる。美しい光沢を持つ装甲に、かすかに歪みが入った。

「なるほど、大したスピードですね。でも——」

傷無の拳が空を切った。

「な——っ！」

那由多は数キロ先にいた。そして、無数の粒子砲を背中の扇から生み出し、傷無に向けている。そして一斉に輝きを放つと、凶暴な輝きの渦が傷無に襲いかかった。

——まずい！

「ぐわああああああっ！」

咄嗟に張った絶対領域が一瞬で破壊された。エロスの装甲を砕きながら、傷無の体をはじき飛ばす。傷無の速度が一気にゼロに落ち、そして逆に後ろへ飛ばされた。

——くそっ！　このままじゃ！

那由多の力は未知数だ。無尽蔵の魔力、様々な武器の生成、破壊された装甲の再生、さらに音速を遥かに超える速度。そして、全ての基本能力がとんでもなく高い。

——このまま、世界は崩壊するのか？

そのとき、吹き飛ばされた体が、柔らかいものに抱きとめられた。

「傷無っ！」

「愛音？　それに……」

「しっかりしろ！　レムリアの魔王！」

「グレイス!?　どうして、こんなところまで」

愛音とグレイスに、両側から抱きかかえられていた。

「追いかけて来たに決まってるでしょ！」

愛音が怒ったような声を出す。

「ナユタは一人では倒せぬ。奴の力は圧倒的じゃ……しかし、力を合わせれば、隙が出来るやもしれぬ」

グレイスの真剣なまなざしが傷無に向けられていた。赤い瞳が、祈りを込めて訴えるように輝いている。愛音もうなずき、妹と同じ色の瞳で傷無を見つめ返した。

「ああ、分かった。三人で力を合わせよう！」

傷無が飛び出し、そのすぐ後を愛音とグレイスがついて行く。

「今の俺には母さんに対抗する手段がスピードしかない。直接の打撃だけでは致命的な攻撃を加えることが難しい！　だから、二人の力を貸してくれ！」

「分かったわ！」

「まかせておくのじゃ！　それで、どうすればよいのじゃ？」

傷無は二人と何事か言葉を交わした。そして傷無だけは、なぜか那由多とは別の方向へと飛び立った。その姿を見送り、愛音とグレイスはうなずき合った。

「それじゃ行くわよ。グレイス！」

「うむ。史上最強の姉妹の力を見せてやろうぞ！」
宙を蹴って、二人は一気に加速した。二人の速度が音速を超える。那由多は生成した粒子砲で、容赦のない砲撃を仕掛けて来た。愛音とグレイスは砲撃をかわしながら、一気に射程圏内へ飛び込んでいった。
那由多は動かずに、敢えて二人を迎え撃つ。
「たあああああああああああああああああっ！」
愛音の拳が唸りを上げる。そしてグレイスの拳が打ち出される。
姉妹の超高速の拳が、那由多に叩き込まれる。
「ふふふ、その調子です。もっと頑張りなさい」
那由多の機械の腕が、愛音とグレイスの拳を受けた。手の平で受け止め、払う。凄まじい速度で突き出される二人の拳を、二本の腕でかわし続ける。
「この……舐めないで！」
愛音が拳と蹴りのコンビネーションで攻め立てる。徐々に二人の攻撃速度が上がってゆく。打撃といえど、一発一発が爆弾のような破壊力を秘めた攻撃である。凄まじい爆発音と、火花が飛び散った。愛音とグレイスの拳と脚が、光の軌跡を描き三人の間に衝撃波と稲妻が轟く。
そして、ついに二人の拳が那由多の速度を上回った。
「届いた⁉」
しかし、那由多の装甲に拳がはじかれる。
「いくぞ、姉様！」
砲弾のような打撃を、容赦なく叩き込む。愛音とグレイスの拳から血が噴き出した。それでも構わずに、全力で拳を打ち付ける。
その時、那由多の美しい装甲に亀裂が入った。
「くっ！　もう一押しよ！」
「ああ！　打ち砕いてくれるわ！」
だが、それを合図に那由多の瞳が輝いた。底なしの魔力が全身を駆け巡る。
「⁉　装甲が！」

ひび割れた装甲が修復されてゆく。
「この化け物が！」
那由多が生身の両腕を、愛音とグレイスそれぞれの前に突き出す。那由多の手の平から魔法陣が開いた。
「いけない！　グレイス！」
愛音が叫んだときには、魔法陣の中から莫大な魔力が噴き出していた。
「きゃあああああああああああああ！」
暴風雨のような生の魔力が二人を翻弄した。それは凄まじい圧力と衝撃波をもって、愛音とグレイスを叩きのめした。魔力回路に割り込み、魔力機関を暴走させ、ハート・ハイブリッド・ギアと魔導装甲の命を奪う。
吹き飛ばされた二人の体は、一瞬にして数キロを駆ける。装甲を打ち砕かれ、全身から力を奪われた。
二人の瞳から涙が流れる。
手も足も出なかった。わずかに装甲に傷を付けただけ。
それもすぐに修復されてしまった。
——でも時間は稼いだ。
あとは、あの人に全てを託すだけ。
グレイスは砕けゆく翼の中から一番鋭い刃を抜いた。そしてそれを鎌ではなく、剣の形に変える。那由多にへし折られた、王者の翼。それを天に掲げる。
「レムリアの魔王よ！　持っていけ！」
赤い瞳から止めどもなく涙が流れた。
「妾とバトランティスの想いの全てを！　奴に相応の報いを」
その手から剣がなくなっていた。
空になった己の手を見つめ、グレイスは微笑んだ。
妹と同じように、愛音も己の武装を天に掲げた。
思えば、傷無と最初に出会って、ぶつかり合って、そのおかげで立ち直った。
これはその象徴。
自分の大切な思い出。

二人で壁を乗り越えた証。
「傷無！　お願い！　あたしと、あなたの世界を――」
――まかせとけ。
そう聞こえた気がした。
いつの間にか、愛音の手から武装が消えていた。
安心したような微笑みを浮かべ、愛音は空を落ちてゆく。
グレイスと愛音を背後に残し、傷無は空を駆けた。
二人と別れた後、傷無はひたすら加速を続けていた。
以前ユリシアと戦ったとき、時を超えるギリギリまで行くことが出来た。
だが、接吻改装をしている今なら、その壁を越えられる。
グレイスと戦ったとき、その壁の向こうをわずかに覗き見た。
その壁を完全に飛び越えるには、助走が必要だ。ユリシアの時も、一気に限界領域の速度を出すのは不可能だった。徐々に速度を上げてゆく必要がある。
その為の、愛音とグレイスによる那由多の足止めだった。
傷無は音を超え、
光を超え、
そして、
過去も、
因果も、
束縛も、
全てを振り切った。
「――⁉」
那由多は接近してくる存在に気が付いた。途轍もなく速い速度で接近する物体がある。
すぐに対処をすべく、移動を開始した。
だが、もう遅い。

時の静止した世界で、傷無は那由多の手の届くところまでやって来ていた。
そして手にはグレイスから託された、コロスの剣。
那由多の装甲はどんな攻撃も跳ね返す。そして傷を負わせたところで修復してしまう。
だが、それは通常の時の流れであればだ。
「うわあああああああああああああっ！」
傷無は剣を振るった。魔力を吸い取るコロスの剣だ。強固な那由多の装甲も、魔力を吸い取られれば傷も付く。魔力の供給も止まっている今は、ただの頑丈な装甲だ。傷無は、手にした剣を滅茶苦茶に振り回した。子供の姿をした母親を守る装甲を斬り崩す。
たとえどんな砲撃をくわえても、この装甲とシールドで跳ね返される。だが、装甲が失われれば、シールドも張れない。
時の止まった世界で、那由多は無防備な姿をさらした。
そして傷無はもう片手に持つ、愛音から託された武装を掲げた。
――全時空粉砕。
対象の時間と空間を裁断し、攪拌し、粉砕する。
その砲口を、母親に向ける。
幼い子供に戻った母親の姿。しかしその柔らかな微笑みは、間違いなく母親のものだ。
あらためて生まれ変わった母親の姿を見つめると、傷無は不思議な感慨に襲われた。
幼い、子供。
それは、この人の本質だったのかも知れない。
飽くなき好奇心。それを満たすための純粋で真っ直ぐな欲望。今のこの姿は、母親の無邪気な心を表したもの。
そんな風に傷無は感じた。
全時空粉砕のトリガーに指をかける。
傷無の目から涙が流れた。
「さよなら……母さん」
絶望的なまでの無慈悲な光が爆発した。

その瞬間、接吻改装がタイムアップを迎えた。
傷無を包むピンクの光が消え、時が動き出す。
那由多は、息子が背徳武装の砲口を向けている姿を見た。それは、己の装甲が砕け散る瞬間でもあった。
——これは、何が起き——
那由多の視界を全時空粉砕の放った光が埋め尽くす。
全てを打ち砕く神の雷が、那由多を嬲った。
あらかじめ砕かれた装甲は、那由多の体を守ることが出来なかった。わずかに発生させたシールドも破壊され、残った装甲が砕け散った。鋼鉄の腕が細切れに分割されてゆく。扇は根元から引きちぎられ、バラバラになって宙に舞う。那由多の体が軋みを上げ、骨格が砕ける。全身が複雑骨折を起こし、内臓が次々に破裂した。
「つっ……はっ！」
口から血を吐いた。瞳からは涙ではなく、血が溢れ出す。
そして、無限に続くかと思われた極限の暴力の光が突然消えた。
今までの殺戮が嘘のように、穏やかな風がそよぎ髪をなびかせる。同時に、傷無の周りにフローティングウインドウが次々と開いた。
『傷無！』『傷無くん！』『キズナ!?』『隊長っ！』
天地穹女神の面々が、口々に傷無の名を呼んだ。
だが傷無は、目の前にいる那由多から目を離せなかった。
『傷無！　やったのか!?』
怜悧が勢い込んで訊いてくる。傷無は答える代わりに、自分が見ている映像を送った。
『うっ……!!』
その映像を見て、怜悧は思わず顔を背けた。
那由多の装甲はほとんど崩れ去り、残った部品はわずかだった。そして生身の体は、凄惨の一言に尽きる。全身を切り刻まれ、血を流している姿は死体にしか見えなかった。
怜悧は気を取り直し、変わり果てた姿の母親を見つめた。
『母さん……』

「あら、まだ私のことを母親と呼ぶのね？　怜悧」
怜悧は思わず息を呑んだ。傷無も、死体にしか見えない母親の姿を驚きの瞳で見つめた。
「まだ生きて……喋れるのか……母さん？」
「とりあえず声帯だけは復元しました」
『復元……だと？』
怜悧の瞳が、一転して警戒の色を帯びる。
「ええ。この程度のダメージなら、修復可能です」
その言葉どおり、那由多の体が元に戻ってゆく。まるで時間を巻き戻しているかのように、破裂した内臓や骨格が元通りになってゆく。
傷無の胸の内が一気に冷えた。
——あれでも、倒せないのか？
もうハイブリッド・カウントは使い切った。戦う手段は残されていない。
使える手段は全部使った。あれだけやって倒せないなら、もうどうしていいのか分からない。冷や汗と共に、絶望感が湧き上がってきた。
怜悧が忌々しそうにつぶやいた。
『この化け物め……』
「ふふ。化け物ではなく、神様と——」
那由多が突然口をつぐんだ。血だらけの顔で表情は分かりづらいが、困惑しているように見えた。
「どうして……こんな、でも……」
慌てたように目を動かし、うわごとのように何かをつぶやいていた。様子の変わった那由多に、怜悧が顔をしかめた。
『どうした？　あなたが顔色を変えるところなど、随分と珍しいものを見せてくれるな』
那由多は血で赤く染まった瞳を虚空に向け、何かに気付いたように顔を上げた。
「ああ……そういうことなのですね。この体は、所詮はレプリカ。ならば、本物のデータがあれば……それには……」

那由多は血塗れた顔を、怜悧のウインドウの方へ向けた。
「実験は失敗です……この体は完璧ではありません。間もなく、崩壊するでしょう」
『なに？』
言葉どおり、那由多の体が光の粒子へと変換し始めた。
傷無は慌てて身を乗り出した。
「待ってくれ！　その前に教えてくれ。俺は母さんを倒した。渡してくれると言ったデータは、どこにあるんだ？」
那由多は徐々に消滅してゆく体で、首を振った。
「ここまで完膚なきまでに体を破壊されるとは思っていませんでした。残すつもりだった研究データはもうありません。あとは研究所を掘り起こして捜してみて下さい」
傷無の顔色が変わった。
「待ってくれ！　そんな時間はないんだ！　頼む、この世界を救うために！　消える前に、教えてくれ！　どうすれば創世の御柱を直せるんだ⁉」
那由多は流し目を送るような仕草で傷無を見つめた。
「……そうですね。傷無はとてもよく頑張ってくれました。ご褒美に、創世の御柱の修復方法を教えましょう」
「母さん！」
傷無は子供のように、嬉しそうな表情を浮かべた。その顔を見て、那由多もかすかに微笑んだかのように見えた。
だが、そうやって話をしている間にも、那由多の体が光の粒子となって消えてゆく。足は完全に消え去り、既に生身の上半身しか残っていなかった。
「……私は創世の御柱に刻まれた碑文を解読しました。その為に必要としたのが、欠落した創世の御柱のレリーフです。それはバルディーンの国宝となって保管されていました。それがとても重要な破片だったのです。そこに書かれていたのは、唯一言葉の意味が分かっている部分。すなわち、『女神は踊る。虚無と、死と、皇帝と。そして永久に』という一節です」
それは傷無も聞いたことのある言葉だった。
「そして同時に、その一節こそが創世の御柱をメンテナンスする方法でもあったのです。バトランティスでは忘れられたその方法が、バルディーンには残っていました。それは柱に捧げる儀式。特殊な催淫状態になり、お互い快感を与えることで魔力を補充し、魔力の流れを整える。そして、それが柱を維持するため必要な儀式だという言い伝えです」
傷無は驚き、心臓が大きく脈打った。
「どうですか傷無。そんな儀式を、どこかで聞いた覚えはありませんか？」
——ある。
「接続改装……か」
「その通りです。そして先程の歌の意味。これは接続改装を行うにあたって、具体的な仕様を指定したものです」
「……仕様？」
「『皇帝』とはこの儀式を執り行う主催者のことです。『虚無』はゼロス、『死』はコロス。『女神』とは創造主であり、この場合は創世の御柱を指します。踊りとは、バルディーンの儀式のこと。すなわち接続改装です。つまりは、主催者がゼロス、コロスとバルディーン式の接続改装をすることで、創世の御柱は永遠の稼働を約束する、ということです」
那由多の体は、既に胸から上しか残っていない。傷無の心に焦りが生まれる。
「この儀式は本来であれば、地道に魔力の補給とメンテナンスを行うものです。普通に行っても、さほどの効果はないでしょう。ただし——」
那由多は傷無を見つめた。
「傷無のエロスならば、話は別です」
「つまり、俺と愛音、それとグレイスの三人で連結改装を行うと、創世の御柱が修復される……そういうことだな？」
しかし返事はなかった。
「母さん？」
風に乗って、光の粒子が飛ばされてゆく。そこには、那由多の姿はもうなかった。
——そんな。
あっけない。
自分にとって、とても大きな存在だった。世界中の人間にとっても、あれだけ大きな影響力を持った人はいなかっただろう。それなのに、いざ消えるときは拍子抜けするほど、あっさりしたものだった。

「消えるの……早いんだよ」

――母さん。

『傷無。聞こえる？』

「識名さん……ごめん。話をちゃんと聞く前に、母さんが……」

『心配はいらない。大体のところは分かった』

「え！　本当ですか⁉」

『でも急ぐ必要がある。愛音、那由多博士の研究所の場所は？』

返事をするように、愛音のウインドウが開いた。

『今向かっているわ！　あたしの位置情報を辿って来て！』

『了解した』

アタラクシアが前進を開始し、ゼルティスの空を進んでゆく。その空は大部分が剝がれ落ち、暗黒の闇が広がっていた。そして頻発する地震が、市民の不安をさらに煽っている。

怜悧は深呼吸をすると、きつく腕を組んだ。

「ケイ。世界の崩壊まで、あとどれくらいの時間が残っている？」

忙しなくキーボードとタッチパネルを叩き、ケイが顔を上げた。

『予想ではあと二時間』

怜悧は口の端をつり上げ、無理矢理笑顔を作った。

「いよいよ正念場だな」

レムリアとアトランティス。二つの世界を救う、最後のミッションが開始された。

五章　神々の憂鬱

Hybrid × Heart Magias Academy Ataraxia

かつて創世の御柱が立っていた上空に、アタラクシアは待機していた。その下には、創世の御柱の残骸が山のように積まれている。ほとんどの破片は崩れたときに、光となって消えてしまったが、消えずに残った物もある。それらが全て一カ所に集められていた。残りといえどかなりの量で、ちょっとした小山くらいはある。

その前には四角いテントが張られ、即席の対策本部が設置されている。その中で、集められた破片の確認が行われていた。

「はい。我が国に伝わる創世の御柱の破片に間違いありません」

バルディーンの女王ランドレッドが石版を見てうなずいた。その石版には『女神は踊る。虚無と、死と、皇帝と。そして永久に』の碑文が刻まれている。ヴァルデと那由多がバルディーンの城から盗み出し、那由多の研究所に保管していたものだ。

「よし、いいぞ」

怜悧がうなずくと、アタラクシア技研科の生徒たちが、その石版を瓦礫の山の方へ運んでゆく。

「これで全部か」

怜悧は大きく息を吐くと顔を上げた。

「急な依頼にもかかわらず、ご協力感謝致します。バルディーン女王陛下」

「何をおっしゃいますの？　世界の危機であれば、当然のことですわ。それに、イズガルドからは事前に協力の要請も頂いておりましたし」

この世界で唯一、創世の御柱の儀式を伝え執り行っているのはバルディーンだけだ。それは王家のみに伝わるもので、全てを熟知しているのはバルディーン女王のランドレッドその人ただ一人である。バルディーンの竜型部隊と一緒に、このゼルティス近くまでやって来ていたのは僥倖と言えるだろう。

「それにしましても、総司令様。どうして貴女様はその様なお召し物で体を隠してらっしゃるのですか？」

「は？」

ランドレッドは大きな胸を揺らして、怜悧の側へ歩み寄った。その仕草は気品にあふれ、王族らしい堂々たるものだった。それだけに怜悧は大いに戸惑った。

なにせこの女王の服装は、ほとんど裸に近いのだ。服というのもおこがましい。はっきり言って、ただのアクセサリーだ。いかにも高そうな金と宝石で出来たアクセサリーで、胸の先や股の間を辛うじて隠しているに過ぎない。

ボリュームのある美しい髪をかき上げ、ランドレッドは妖艶に怜悧に微笑んだ。

「隠していても分かりますわ。その下にある美しい体が。貴女様のような位の高い方が、そのような姿では、士気に関わりますわよ？」

怜悧は思わず後ずさった。

「い、いや。こちらの世界の文化を学ぶのは、事が済んでからにさせて頂きたい」

「あら、約束ですわよ？」

色っぽく片目をつぶると、ランドレッドは体を離した。

怜悧は咳払いをすると、時計を確認した。世界崩壊の予測時間まで、残り一時間。

「少しお待ち下さい」

そう言い残して、怜悧は隣のテントへと移った。そこでは、ケイが一人で儀式に使用する機材の確認をしていた。

「ケイ、準備は整っているか？」

『問題ない、だけど』

珍しく、ケイがキーボードの上で指を止めた。

「どうかしたのか？」

ぱたりと手を下ろすと、不安そうな瞳で親友を見上げた。

「すごく、こわいの……」

怜悧以外には聞かせることのない、ケイの肉声だった。

「ん？　確かに世界の運命がかかったミッションだ。緊張するのは分かる。しかし――」

ケイは、ふるふると頭を振った。

「これ」

机の上に置いてあるファイルを手に取ると、怜悧に差し出した。

「何だ、これは？」

「さっき、技研科が持ってきた。研究所から掘り起こしたって」

怜悧はそのファイルの表紙の文字を読んだ。

――プロジェクト・バベル。

「中身は那由多博士が教えてくれたことが、詳細に書かれている」

怜悧は首を傾げた。

「それが、なぜ怖いのだ？」

「那由多博士は、自分の体を改造したのが失敗だったと認めた」

「そうだな。あの人のあんなに驚いた顔は、見たことがない」

楽しそうに、しかしどこか一抹の寂しさを感じさせる微笑みで、怜悧は答えた。

「でも、失敗する可能性を考えていなかったの？　那由多博士が？」

怜悧の眉がぴくりと上がる。

「あの時の那由多博士は、様子がおかしかった。何の見返りもなく、我々に情報を与えるなんて、考えづらい。きっと、那由多博士なりの目的があるはず」

「しかし、奴は死んだ」

「うん……」

二人の間に沈黙が流れた。

「……ねえ、れーり」

「何だ」

ケイは震える声でつぶやいた。

「那由多博士は、本当に死んだと思う？」

怜悧は言葉に詰まった。自分の心が、ざわざわと音を立てて不安に揺れるのを感じた。

「……当然だ。母は死んだ。人として許されない存在だったと思うが、死んだのであれば、もう心を乱されること

もない」

　それでもケイは不安そうな顔をしている。

「……仮に、母が何かを企んでいたとしても、今は儀式を執り行うしかない。しなければ、その時点で我々はお終いだ」

「うん、そうだね。ごめんね、れーり」

「構わん。それよりも、投影システムの方は頼むぞ」

「りょーかい」

　怜悧はテントを出ると、立ち止まって地面を見つめた。

　――バベル。

　旧約聖書の創世記に登場する巨大な塔の名前だ。神に挑戦しようと、人間は天に届く塔を築こうとした。その行為が神の怒りを買ったという内容だ。

「ただの神話だ……何を気にすることがある」

「総司令様？」

　テントからランドレッド女王が顔をのぞかせていた。

「どうかなさいまして？」

「あ……いや」

　怜悧は気持ちを切り替えると、背筋を伸ばした。

「教えて頂いた内容に則って、儀式の準備は完了しました。リハーサルをしている余裕もないので、ぶっつけ本番とします。是非、女王にも立ち会ってアドバイスを頂きたい」

　ランドレッドは上品に微笑んだ。

「喜んで」

　女王がテントを出ると、テントの前に控えていた竜型部隊の指揮官と参謀が、後ろから付いてくる。怜悧は女王を案内するように前を歩いた。

　百メートルほど離れたところに慰安搬送装置一号があり、その向こうには大型のテントがある。幅二十メートル、奥行きは百メートルほどもある、倉庫といった方が良さそうな大きさだ。

　怜悧はまず手前にある慰安搬送装置一号へ行くと、扉を開けて中に声をかけた。

「傷無、準備はいいか？」

「ああ、いつでもいいぜ」

　一人でベッドに横になっていた傷無が体を起こす。服はアタラクシアの制服を身につけていた。

「何だか、この恰好だとほっとするな」

「でも、すぐに脱ぎますわよ」

「え？」

　怜悧の後ろにいる、やたらゴージャスでセクシーなおばさんが、不穏なことを言った。

「姉ちゃん……この人は？」

　ほとんど全裸なので、正直目のやり場に困った。

「バルディーンの女王、ランドレッド様だ」

「は⁉」

　急に傷無はかしこまって、頭を何度も下げた。

「そ、それは失礼を。あの、俺は、いや私は――」

「挨拶は後で構いませんわ。一刻を争うときですし……それに、バトランティス帝国の皇帝と皇帝代行を、同時に手籠めにしようというのですから、私に対して何をそんなにかしこまることがありましょうか」

「え？」

「いいから行くぞ」

　きびすを返す怜悧に、傷無は慌てて付いて行く。この女王も何だか得体の知れない人だなと、傷無は思った。

　すぐ隣の大きなテントの前までやって来ると、ランドレッドは怜悧に話しかけた。

「しかし総司令様。この短時間で、よく人を集めることが出来ましたわね」

「はい。ただ、手近な者を集めただけですので、見目麗しい者という条件に適うかどうかは保証しかねますが……」

　傷無は具体的な内容については、まだ何一つ教えられていなかった。

　なので、テントの扉が開かれたとき、そこに広がる世界に驚いた。

「な、なんだ、これは？」

外見とは裏腹に、中は豪勢な内装に設えられていた。床には毛足の長い絨毯と毛皮が敷き詰められ、壁は美しい織物で囲まれている。この床なら、寝転がってもさぞかし気持ちいいだろう。しかし、ちゃんと大きなベッドが幾つも用意されている。そして中央にはジャグジーが置かれ、泡と湯気を噴き上げている。

だが設備だけなら、そこまでは驚かない。この部屋の至る所に半裸の女性がいるのだ。思い思いに、ベッドでくつろいだり、ジャグジーに入っていたり、或いは床で足を伸ばしていたりとリラックスして過ごしている。しかもその全員が薄い布を纏うだけの姿なのだ。胸も、お尻も透けて見える。

狼狽する傷無とは対照的に、ランドレッドは手を合わせて喜んだ。

「まあまあ、素敵ではありませんか。みなさん可愛らしいですし、これなら何の問題もありませんわ」

怜悧も平然としている。傷無はどういうことかと、二人の顔を交互に見た。

「こ、これは？　愛音とグレイスと連結改装をするんじゃ……なかったのか？」

ランドレッドは興奮に頰を染めて答えた。

「これも、その儀式の一部ですわ。我がパルディーン王家に伝わる、柱に捧げる儀式。出来るだけ、その様式に従った形を再現しているのです」

「つまり……この人たちも、その儀式に参加するってことですか？」

「はい。ですが、あなたと直接何かをすることはありません。彼女たちの役割は、この儀式を成功させるための場と空気を作り出すこと。彼女たちがここで踊ることで、儀式に必要な特殊な空間が作られます」

「なるほど……分かったような、分からないような――」

「キズナーっ！」

金髪の美女が、大きな胸を弾ませながら駆けてきた。

「うわっ！　ユ、ユリシア……うおっ⁉」

ユリシアは目に涙を浮かべながら、傷無に飛びついた。そして強くその体を抱きしめる。

「キズナ……会いたかった」

もちろん傷無も嬉しかった。しかしユリシアの恰好は、薄布一枚まとっただけのものだ。大きな胸が直接押し付けられ、形を歪めて傷無の体に密着する。傷無は喜んで良いのか照れて良いのか、混乱気味に返事をした。

「あ、ああ！　良かった……その、無事で……って、アイドルやってるの知ってからは、割と安心してたけどな」

少しむっとして、ユリシアは口を尖らせた。

「ちょっとぉ、あれだって大変だったのよ！　別に好きで始めたわけじゃ――」

「たいちょおおおおおおっ！」

今度は小さい体が走って来た。そして、思いっきり腹に体当たりをされた。

「ぐっ！……シ、シルヴィア……元気そうで、何より」

「うわあああああん、隊長っ、たいちょうおおおおお」

泣きながら顔をぐりぐりと押し付けられる。

「ちょっと、あなたたち！　何て破廉恥なことをしてるんですか！　再会を喜ぶのは良いですが、自分の恰好をよく考えてから行動して下さい！」

「うわっ！　ひ、姫川！」

頭から角でも出しそうな勢いで、姫川が仁王立ちをしている。しかしそう言う姫川自身も、他の人たちと同じように透けるほど薄い布一枚を体に巻いただけだった。しかも姫川の場合は、上半身はネックレスと腕輪をはめただけ。下半身は布を腰に軽く縛っただけ、というある意味一番露出度の高い恰好をしていた。

「うわっ、とは何ですか！　大体、助けに来るのが、いくら何でも遅すぎます！　こっちはその間、ずっとアイドルだなんて恥ずかしい真似をさせられてたんですからね！」

「なによ、一番ノリノリだったくせに」

ユリシアが呆れたように言った。

「な……い、言いがかりです！」

「姫川先輩はマジメですから、一番一生懸命だったデス。それは恥ずかしいことではないと思いマスが……違いマスか？」

シルヴィアの汚れのない瞳が姫川を射貫く。

「え……いえ、それは……」

ユリシアは意地悪そうに目を細めた。

「それより、その恰好の方がよっぽど恥ずかしくて、破廉恥でしょ？」

「えっ……きゃあああああ！」

姫川は慌てて両腕で体を隠した。しかし傷無の網膜には、しっかりと姫川の体が焼き付いていた。
「うう……つい、嬉しくて、自分の恰好を忘れてました……」
「あっ、キズナじゃないの！　久しぶりいいいい！」
ジャグジーの中から手を振る一団があった。
「おー、スカーレット！　それにマスターズのみんな！」
よく見ると、この部屋にいるのは見知った顔ばかりだった。
「ここにいるの、アタラクシアの連中ばかりだな」
「手当たり次第、総司令にかき集められたのよう……」
「うわっ！　胡桃沢か!?　お前まで？」
絨毯の上で三角座りをしている女の子は、技研科の胡桃沢桃だった。やはり同じように薄布一枚だが、体を見せないように縮こまっている。
「強制連行だもん……拉致よ、誘拐よ」
暗い顔で、穏やかでない単語を、口から垂れ流している。
返事に困った傷無の耳元で、ランドレッドがささやいた。
「心配いりませんよ。この香りが、すぐに幸せな気分にしてくれます」
ランドレッドの手には、いつの間にか香炉が握られていた。その香炉から立ちのぼる香りはとても甘く、嗅いだ瞬間に頭の中がふわふわするような感じがした。
「この香りが儀式の助けになります。心の壁を取り払い、行為への迷いがなくなるのです」
確かに、傷無はとても良い気分になってきた。きっと酒を飲むと、同じような感じになるのではないか、という気がした。
抱きついているユリシアやシルヴィアも、目がうつろになり、色っぽい吐息を漏らし始めた。姫川も酔ったように頬が赤い。瞳もうるんでいて、既に接続改装の予兆が現れているような状態だ。
なるほど、この香りが儀式を助けるというのは、納得出来る気がした。
ランドレッドは、やさしくユリシアとシルヴィアの手を引きはがした。
「主催者であるあなたは、奥の間へ進んでください。そこであなたのお相手がお待ちです」

「あ、ああ……分かった」
傷無はややおぼつかない足取りで、テントの中を進んだ。よく見ると、部屋のあちこちに香炉があり、甘い香りを漂わせている。その香りの効果か、近くのベッドで女の子同士がお互いの体を愛撫し始めていた。
あれは確か、二年甲組のクラスメートだった気がした。正気に戻ったら、後が大変だろうな、などと考えながら奥へと進む。テントの一番奥に四方をカーテンで仕切られた場所がある。そのカーテンを分け広げ、傷無は中へと入っていった。
何重にも囲まれたカーテンを抜けると、そこにはとびきり美しく、気品にあふれた美少女二人が正座をして待ち受けていた。
「傷無……」
「レムリアの……魔王」
この世界の頂点に君臨する二人。愛音とグレイスの姉妹だ。
グレイスとは会って早々に戦闘になったので、落ち着いて姿を見るのは初めてだ。確かに愛音と良く似ている。
「なんじゃ？」
「いや……怪我はないのか？」
グレイスはふんと顔を背けた。
「心配無用じゃ」
愛音からは、もうグレイスは傷無のことを殺そうとは考えていない、と聞いてはいたが、正直不安だった。顔を合わせた瞬間に襲いかかってくるかも知れないと構えていたのだが、それは杞憂に終わりそうだ。
「妾もこのような儀式、不本意ではあるが……アトランティス全土の命運がかかっているとなればやむを得まい。魔王よ、貴様もせいぜい相手を務めることじゃな」
「あ、ああ……頑張るよ」
ちらりと愛音の方を見ると、愛音は微かに微笑んでうなずいた。
愛音は金と宝石のみで作られたアクセサリーを、服代わりに身に着けていた。グレイスは羽の形を模したアクセサリーで、胸の先と股の間を申しわけ程度に隠している。二人とも、ほとんど全裸に近い恰好だ。それは、むしろ裸よりもいやらしい姿に思えた。

「そ、そんなに、見ないで」
愛音が恥ずかしそうに身をよじった。
「わ、悪い。でも……な」
見るなと言う方が無理じゃないのか、と傷無は心の中で弁解した。
「姉様、何を恥ずかしがるのじゃ。そんなに美しいのじゃから、堂々としていれば良いではないか」
「うう……そういう問題じゃなくて」
二人が身に着けているのは、皇帝とその代行の衣装だ。二人とも、バトランティス皇帝として傷無に抱かれようとしている。
傷無の喉がごくりと鳴った。
床に座っている二人の近くに、傷無も腰を下ろす。そして二人に手を伸ばそうとした。
こうして見ると、二人とも本当に綺麗だった。顔や体のつくりが、普通の人間とは違う。匠の手によって、長い時間をかけて作り上げられた美術工芸品。髪や睫毛、目や唇、鎖骨のラインから胸のふくらみとその頂点にある突起、その色つや。体中の全てのつくりが繊細にして大胆。普段なら絶対に近付けない、ショーケースに入った国宝の美術品。それに無断で手を付けようとするような背徳感があった。
だが、それでもさわりたい。香の香りによって気持ちも大きくなっているのだろう。二人も、うるんだ瞳で自分が来るのを待っているように見える。
あと少しで手が触れる。と、そのときカーテンを開けて、入ってくる人影があった。
「まだおあずけですよ。儀式には、手順がありますから」
バルディーンの女王、ランドレッドだった。瓶を手にしたランドレッドは、傷無の横に腰を下ろす。
「これは聖なる果実から作った神々の飲み物です。これを飲んでから、踊って頂きます」
「踊る？」
「ええ。碑文の踊るという言葉のことです。実際にして頂く行為は、あなた方の言うところの接続改装の類いと同じですよ」
「……分かった。時間もないし、すぐに飲もう」
緊張のせいか喉も渇いていたので、飲み物をもらえるのなら嬉しかった。傷無はランドレッドの持つ瓶に手を伸ばした。
しかし、女王は傷無の手を避けるように、瓶を隠す。
「いけません。これには作法に則った飲み方があるのです」
「飲み方？」
「アイネス様、グレイス様、よろしいですか？」
「ええ……何かしら」
「お二人には、器になって頂きます」
どういう意味だ？
傷無だけでなく、愛音たちも意味が分からないようだった。
「アイネス様は胸のアクセサリーを、グレイス様は股の羽をお取り下さい」
グレイスは眉を寄せた。
「そうなのか？　それなら最初から外しておいたものを」
「決まり事ですから」
グレイスは立ち上がると、股間を隠している羽に手を伸ばした。その羽は貼り付けてあるだけらしく、簡単に取り外してしまった。
その下は、髪の毛と同じ色で彩られていた。それほど濃くはなくふわりとした茂みはきれいに切り揃えられ、手入れが行き届いているのが良く分かる。
グレイスは平然として、再び座った。
「さあ、アイネス様も」
ランドレッドに促され、愛音も渋々胸のアクセサリーを外した。胸の先にキャップのように被せられていた金の装飾が取り払われると、その下からほぼ同じ大きさのピンク色の輪が姿を見せた。その先もぴんと立ち、愛音も興奮していることを知らせていた。
「ではアイネス様、胸を下から持ち上げるようにして、寄せて下さい」
「こ……こう？」
言われたとおりに愛音が自分の胸を寄せた。胸の双丘がぴったりと合わさり、その間に谷間が作られた。

「では……」

ランドレッドは、胸に作られたくぼみに瓶の口を近付けると、中身を注ぎ始めた。

「ひゃ……冷たい……けど、あの、これって？」

自分の胸の谷間に溜まってゆく液体に戸惑い、愛音はランドレッドに問うような視線を投げかけた。

「こちらのネクタルを魔王様に飲んで頂くのです。さあ、お飲み下さいと、お願いをしてください」

「ええっ⁉」

たちまち愛音の顔が朱に染まる。

「さ、時間がありませんよ」

ランドレッド女王が急がせるように言った。

「うう……傷無、あたしのネクタルを飲んで……って、これ恥ずかし過ぎるっ」

確かにこの行為は、飲む側の傷無も相当に恥ずかしい。だが、そんなことを言っている場合ではないことも分かっている。

傷無は愛音ににじり寄ると、胸の谷間に顔を近付けた。

「……ふっ」

谷間の杯に傷無の口が触れたとき、愛音が微かに声を上げた。

傷無はその液体を吸い上げる。

——⁉　美味い！

何の果実のジュースか分からないが、甘くそれでいて爽やかだ。飲んだ後も芳醇な香りが鼻腔をくすぐり、もっと飲みたくなる。傷無は夢中になって、愛音の胸の谷間に顔を押し付けた。

「んあっ、き、傷無……落ち着いて……ああっ」

それは愛音の肌でわずかに温められて、より香りが引き立っているように思えた。あっという間に飲みきり、愛音の胸に付いた雫までも舐め取った。

「ああん……傷無ったら……もう、お終いよ」

愛音は傷無の頭を撫でた。傷無は我に返り、口を離した。

「ふふ、このネクタルがお気に召したようですね」

ランドレッド女王が嬉しそうに微笑んだ。

「ええ、飲んだことのない味で……とても美味しいです」

「これは神々の飲み物とされているものです。特別な儀式でしか飲めない、とても高価で貴重なものです。では、おかわりをどうぞ」

そう言うとランドレッド女王は、正座をしたグレイスのもとへ行った。

「グレイス様、太ももをぴったりと閉じて、少し背中を反らせて下さい」

「む、こう……ひゃっ⁉」

ぴったりと閉じられた太ももと下腹部の間にくぼみが出来る。そこへ向かって、ランドレッド女王はネクタルを注ぎ入れた。

「さあ、グレイス様。お願いをして下さい」

「くぅ……屈辱じゃ……妾の体を杯代わりにされるなど……ま、魔王様……どうぞ、好きに飲むのじゃ……うぅっ」

グレイスは涙目になりながらも、ネクタルをこぼさないように、力を入れて足を閉じていた。その様子を見て、傷無は何だか可哀想に感じた。

「すまないな、グレイス……こんなことをさせて」

「むう……気にするでない。これは妾が望んでしておることじゃ。決して貴様のためではない。アトランティスとレムリアを救う為なのじゃ。仮にも一時は皇帝を務めた者としての責任を果たさねばならぬ……じゃから、好きに飲め！」

頬を赤く染めながら、より体を反らした。傷無に早く飲んで欲しいと言わんばかりに。

「それに……魔王には命を助けられた恩もある。聞けば姉様も命を救われたことがあるとか……じゃから、貴様ならば特別に許す」

心の平静を取り戻したグレイスには、世界を救いたいという想いがある。傷無に対しても恩義を感じている。ならば、傷無もその想いに応えなければならない。

体を前に倒し、グレイスの膝に顔を近付ける。透明な液体の中に、ピンク色の影がゆらゆらと揺れている。それは傷無の唇を手招きしているかのようだった。そして傷無は、グレイスの股間に溜められた神々の飲み物に口を付けた。

「ふあぁあっ！」
グレイスが震える声を上げた。傷無は吸い上げたネクタルを口の中で味わった。
――美味しい。だけど、さっきと味が違う？
甘みはさっき程ではないが、より濃厚な味で香りも豊かな気がした。
「ふふふ、さっきとはまた味が違いますでしょう？」
グレイスの杯から一旦口を離すと、傷無はランドレッド女王を見上げた。
「確かに……さっきと同じ瓶から注いだのに、どうして……？」
「このネクタルは注がれた杯によって味を変えます。ですから、一人一人異なる味が生まれるのです。グレイス様の杯は、きっと高貴な味がしたことでしょう」
「これが、グレイスの味……」
グレイスは頬を赤く染め、唇をわななかせた。
「い、いいから、さっさと飲まぬか！」
言われなくても、もっと飲みたいと思った。傷無はグレイスの腰を手で押さえると、股間に口を付けた。
「ひゃあああん！　ばっ馬鹿者、吸いすぎだっ、あああんっ」
舐めているうちに、味がどんどん濃くなってゆく。飲み尽くし、グレイスの太ももや下腹部についたネクタルも丁寧に舐め取る。
その頃には、傷無にも変化が現れた。顔が熱くなり、動悸が激しい。頭がふわふわして、とても良い気分だ。
「さあ、これで準備は整いました。これから先は、皆様三人だけで執り行って下さい」
「ええ……連結改装をするんですよね？」
「はい。ですが、魔王様には一つご面倒をおかけします」
そう言って、隅に置いてあった箱を傷無の前に押し出した。
「その中に指示が入っているそうです」
傷無は首を傾げながら、その箱を開けた。
『傷無。ご苦労様』
突然箱の中に通信ウインドウが開いた。

「識名さん？」
この箱自体にフローティングウインドウを表示する機能が備わっているのだろう。ウインドウにはケイが入力する文字が流れた。
『箱の中にカメラが入っている。確認して』
確かにビデオカメラのような機械が入っていた。持ってみると、手の平に収まりそうなくらいに小型で、片手でも楽々持てる重さだった。
『今回はそのカメラで、連結改装の一部始終を撮影してもらう』
「なにいいっ!?」
ランドレッドは傷無の後ろにしゃがみ込むと、その肩に手をかけた。距離が近い。女王の胸は、近くに寄っただけで触れてしまうほど大きいので、嫌でも胸が体に触れる。とろりとした柔らかい胸の感触が傷無の背中に広がった。女王は胸を押し付けながら、傷無の耳元でささやく。
「本来この儀式は柱の前で行う必要があります。柱は神であり、神は我々の踊る姿を見て楽しむ。だから、儀式そのものを柱にご覧頂く必要があるのです」
「場所的には確かに柱の前だけど……」
創世の御柱は既に崩壊して、今や瓦礫の山だ。
『創世の御柱に見せるということの意味を、我々は考えた。恐らくはその映像情報が、何らかの影響を及ぼすのではないかという結論に至った。そこで我々は、那由多博士が行っていた研究成果を検証し、一つの方法を考えた。それは、小型の魔導機関を内蔵したカメラで儀式を撮影し、その映像情報を創世の御柱の破片に送り込む方法』
「映像を……送り込む？」
『バトランティス製の映像システムは我々の技術とは異なり、魔力を利用した映像粒子を転送し、離れた地点で同じ空間を再現するというもの。その粒子をバラバラになった全ての破片に対して送り込めば、創世の御柱の前で儀式を行ったのと同じことになる』
「な……なに？」
傷無には今ひとつ、説明の意味が分からなかった。
『分かりやすく言えば、撮影した映像を創世の御柱の瓦礫に投影することで、映像粒子を瓦礫が吸い込む。すなわ

ち、柱の前で儀式をするのと同じ効果が得られる』

傷無はカメラのスイッチを入れてみた。撮影されている映像がフローティングウインドウとして、カメラの横に浮かび上がった。

「カメラ片手に連結改装なんか出来るのか？」

正直、自信がなかった。

『出来なくても、やってもらう。制限時間が迫っているという事情がある。こちらの予想では、世界の崩壊まであと三十分しかない』

もはや選択肢などない。やるしかないのだ。

「分かったよ。愛音、グレイス、俺たちで世界を救おう！」

三人はうなずき合った。

「識名さん。そっちの準備はいいのか？」

ウインドウに外の様子が映った。うっすらとライトに照らされた瓦礫の山が見える。空に浮かぶ飛行艇から撮影しているもののようだ。その瓦礫の山が、急に明るくなった。

「これは！」

地面に巨大な愛音とグレイスの姿が映った。傷無が驚いて手を揺らすと、映像も大きく揺れた。間違いなく、いま傷無が撮影している映像が投影されている。飛行艇にプロジェクターが搭載されており、創世の御柱の残骸に対してプロジェクションマッピングが行われているのだ。

一辺が三、四百メートルはありそうな、巨大なスクリーンだ。こんなでかでかと連結改装の行為が映し出されると思うと腰が引ける。

「なあ、識名さん……こんなでかでかと投影して、みんなに見られないのか？」

『むしろ、見せる。ゼルティス全市民に向けて、中継も行う』

「なにいいいいいいい!?」

——俺たちの行為を？　ゼルティス全市民にだと!?

傷無は腰を抜かしそうになった。そんな傷無に、ランドレッドが優しく語りかける。

「落ち着いて下さい。この儀式は出来るだけ大勢で執り行うのが望ましいのです。儀式に参加した人数が信仰の広さと厚さを表し、それは神である柱の喜びとなるのです。すなわち、より大規模に執り行った方が、成功する可能性が高いのです」

ランドレッドの言葉を、ケイなりに解釈した内容がウインドウに流れる。

『この儀式は傷無と愛音、グレイスの三人で行うもの。しかし、創世の御柱を再生するほどの魔力となると、三人だけでは無理。出来るだけ大勢の力を借りた方が良い』

「だからって、ゼルティス全市民とか極端だろ。外にいる姫川たちだけじゃ駄目なのか？」

『最初はこちらもそのつもりだった。しかし、それでは足りない』

たまらず愛音が口を差し挟む。

「話は分かったわ。でも、あたしたちの連結改装を、わざわざ市民に見せる必要はないでしょ？　創世の御柱に映すだけでいいじゃない！」

しかしランドレッドは首を振った。

「いいえ。コアを有する者たちならいざ知らず、一般市民が儀式に参加して魔力を提供するには、祭主の姿が必要です。すなわち、あなた方の姿を見せる必要があるのです。あなた方の行為が、他の者たちに影響を与え、儀式への参加をいざなうのです」

愛音は呆然とした表情で、宙を見つめた。正直言って、傷無も頭を抱えたかった。

『一つ付け加えると、アタラクシア内では中継は行わない。だから安心して』

「安心出来ないわよ！」

愛音が泣きそうな声で叫ぶ。

ランドレッドは微かに微笑むと立ち上がった。

「それでは後はお任せ致します。どうか……私の国と国民の命も救って下さい」

そう言い残すと、カーテンの向こうに姿を消した。

『投影システムは良好。連結改装を始めて』

「……了解した」

傷無は余計なことを考えるのをやめ、連結改装に集中することにした。カメラのファインダーの中では、愛音とグレイスが緊張した面持ちで座っている。

――まずは緊張をほぐさないと。
「愛音、表情が硬いぞ。リラックスして」
「そんなこと言われても……この映像を全市民が観ているのよ？　無理を言わないで」
愛音は蒼い顔で答えた。だが傷無は、怜悧やケイに見られながら絶頂改装を行ったことを思い出していた。
――恥ずかしさと興奮は表裏一体。上手くその気にさせることが出来れば……。
傷無はひとまず、グレイスの方にカメラを向けた。
「あらためて自己紹介とか……いいかな？」
グレイスは不機嫌そうな顔をしたが、仕方なさそうに口を開いた。
「妾はバトランティス帝国第二皇女。現皇帝代行のグレイス・シンクラヴィアじゃ」
心なしか頬が赤い。体もちょっと汗ばんで、もじもじと体をよじっている。
「具合でも悪いのか？」
傷無はピンクの前髪をかき上げ、おでこに手の平を当てた。
「ひゃあんっ！」
グレイスの体がびくん、と跳ねた。
「だ、大丈夫？　グレイス」
愛音も心配そうに顔をのぞき込む。
「う、うむ。さっき、ネクタルを飲ませてから……体が火照って」
それは傷無も同じだった。恐らく、グレイスは口以外のところから体の中に入ったのだろう。それで傷無と同じ効果が生まれているに違いない。
「確かにちょっと熱いな」
傷無は一旦カメラを置くと、制服を脱ぎ始めた。愛音とグレイスは、徐々に明らかになる傷無の裸体に目を奪われた。
「おう……これが……」
グレイスは、喉をごくりと鳴らした。
傷無は下着一枚の恰好になると、再びカメラを手に取りグレイスをフレームに収めた。

「しかし……グレイスは愛音にそっくりだな」
傷無の言葉に、グレイスは得意そうに胸を張った。
「そうであろう。妾は姉様の妹じゃからな」
傷無は右手でカメラを構え、左手でグレイスの髪を撫でた。
「ん……気安く、さわるでない」
口ではそう言いながらも、撫でられる猫のように気持ちよさそうな顔をした。そのまま耳を撫で、首筋に手を這わせる。
「あ……はぁん」
色っぽく首をしならせる。
「お姉さんよりも色っぽいんじゃないか？」
「ん？　くふふ、おだてても何も出ぬぞ、魔王よ」
気が付くと、隣の愛音が凄い目で睨んでいた。妹をおだてすぎると、姉が怒るらしい。連結改装には二人が気持ちを合わせる必要がある。愛音とのバランスには気を遣わなければならない。それはそうと――、
「あー……その、魔王っていうのはやめてくれないかな」
「ん？　では何と呼べばよいのじゃ？」
「そうだな……まあ普通に、傷無とか……」
「兄様……とか」
ぼそっとつぶやく声が聞こえた。見ると愛音が耳まで真っ赤にして、うつむいていた。
「む？　その『にいさま』というのはどういう意味じゃ？」
「あ、あのね、姉様の男版みたいな……感じ？　年上の男に対して使う呼び方というか」
ちらっ、と傷無の方を盗み見るように視線を送ってくる。
「いや、愛音。この場合は意味が微妙に――」
「文句ある!?」
「ありません」
――愛音さん。怖い。

「ほう。そうか……ならば、そう呼ぶかの」

愛音はご満悦といった微笑みを浮かべている。とりあえず愛音が良い気分になっているのなら、それが一番いい。

「じゃ、続きだ。グレイスの胸を見せてくれるか？」

「良いぞ。兄様」

グレイスは胸に張り付いている羽の装飾を外した。その下から、可愛らしくも、歳の割には立派な乳房が現れる。胸の先の突起は愛音よりも小さめだ。そしてピンク色に染まった部分も、色が薄く、面積が小さい。とても可憐な胸だった。

グレイスはネクタルの効果で、だいぶ気を許してくれている。後は愛音にもネクタルを飲ませた方がいいだろう。気分を盛り上げるのが連結改装への近道だ。

傷無はネクタルの瓶を取ると、グレイスの胸に中身を注いだ。

「ひゃ……な、なにをするのじゃ、兄様」

「愛音。一緒にグレイスのネクタルをきれいにしてやろう」

傷無の意図を察し、愛音はおずおずとグレイスの側ににじり寄った。そして、グレイスの胸を濡らしたネクタルの雫を舌で舐め取った。

「はぁんっ！　ね、姉様ぁ」

「んっ……美味しい。これ」

愛音は驚いたように顔を上げた。グレイスは姉が喜んだのが嬉しいらしく、恥じらうように微笑んだ。

傷無もカメラを愛音の方に向けながら、自分は反対側の胸に舌を伸ばす。その尖端に舌先を付け、舐め上げた。

「うくっ……やっ、それ……やあああんっ」

余程感じたのか、グレイスが足をばたつかせて暴れる。しかし傷無は構わず胸をねぶり続ける。柔らかなふくらみに口を付け、跡が付くほど吸い上げる。

「ふっ……く……ああんっ、やっあああっ」

反対側の胸は愛音が優しく揉みしだき、脇腹からおへそと、流れ落ちたネクタルを探すように舐め取っていた。その舌の感触が、グレイスの胸の内をぞくぞくとさせる。

「愛音、胸は任せた」

愛音もネクタルを口にしたせいか、頬を染め、少しぼんやりした表情を浮かべている。だがその瞳は淫蕩に光っている。その目を細め、嬉しそうにうなずいた。

愛音はグレイスの耳元に口を寄せた。

「グレイス……可愛いわよ」

「あん……姉様ぁ……」

愛音はグレイスの耳を唇で挟んだ。そして舌先で、そっと撫でる。

「んふっ！　あっ、あああああ……」

グレイスの体が、がくがくと震える。その間に傷無はグレイスの足を丁寧に撫でさすった。しなやかで細い足だ。膝から上にさかのぼるにつれ、太く柔らかな部分が多くなる。そして、その付け根へと上ってゆく。

そこはぴったりと閉じられた、グレイスの秘密の扉がある。傷無はカメラをその部分へ向けた。これが外に投影されているんだろうな、と思うとかなりの罪悪感を覚えた。しかもノーカット、無修正である。

「あ……に、兄様、そこは」

グレイスは太ももを閉じようとするが、既に傷無の体が足を割って入っている。

「大丈夫よ……傷無にまかせて」

愛音はグレイスの胸を揉みながら、首筋を舐めた。

「ううっ、ね、ねえさま……あんっ」

力の緩んだ足を広げさせ、傷無は汚れのないグレイスの秘密の部分に指で触れる。そして指を開くと、閉じられていた扉が開き、その瞬間ふわりと甘い香りがした。

「ああ……」

普段隠されている部分が、外気にふれたことを感じたのだろう。グレイスの口から吐息が漏れる。カメラを近付け、指で開いた部分を映す。そして、隠された秘密の割れ目に指を差し込んだ。

「ひゃあああぅあああっあんっ♥！」

グレイスが雷に打たれたようにのけぞった。今まで受けた快感とは別次元の強烈さだった。しかし上半身は愛音に、下半身は傷無に押さえられ動けない。

「いやっ、いやいや、だめっ、だめじゃそんなの……くぅあああああんっ！」

傷無は指を伸ばし、グレイスの中を優しく撫でた。嫌がるグレイスとは真逆に、そこは傷無の指をやわらかく包んで歓迎した。

「はあっ、いやっ！　くぅ……ああんっ！　はっ、あっ、はあぁああんっ」

グレイスはあまりの刺激に、涙を流してのたうち回った。瞳に光の粒子が泳ぎ、体からも魔力の光が生まれ始めた。

愛音も上気した顔で、グレイスを責め続ける。

「かわいい……グレイス」

片手でグレイスの胸の尖端をつまみ、もう片手は自分の太ももの間に伸ばしている。

「んっ」

愛音の体も、びくんと痙攣した。

傷無は指で中をかき混ぜながら、入り口の少し上にある小さな芽をぎゅっと親指で押さえた。

その瞬間、グレイスの体から魔力の光と絶叫がほとばしった。

「いやあああああはああぁぁんんん♥あああんぁあやあああああ！」

苦しそうに涙を流す悦びの顔。その表情をしっかりとカメラに収める。

愛音も体を硬直させ、びくん、びくんと痙攣をしていた。

二人が達する瞬間を同時に捉えると、傷無は愛音の顔を撫でた。

「き、傷無……？」

「ごめんな愛音。一人でさせて」

「なっ、何のことかしら？　あ、あたしは別に……」

しかし愛音の太ももはしっとりと濡れていて、絨毯には大きな染みが出来ていた。愛音は自分でなぐさめていたことを隠すことが出来ず、かあぁっと顔を赤くした。

傷無は再びネクタルの瓶を取ると、今度は愛音の体に振りかけた。

「きゃっ！　き、傷無。何するの？」

傷無は倒れて肩で息をしているグレイスを抱き起こした。

「グレイス、今度は姉さんを気持ちよくしてあげよう」

とろんとした瞳を愛音に向けると、グレイスは妖艶に微笑んだ。

「望むところじゃ。今度は姉様を可愛がって差し上げるのじゃ」

「ちょ、ちょっと待っ……ああんっ」

傷無が愛音の左胸に、グレイスが右の胸にしゃぶり付いた。

「はあっん♥……あっだめ、何だか、感じ過ぎて……あああんあぅ」

「姉様の胸……本当に美味しいの。大きくて、柔らかくて、さわっているだけでも幸せな気分になるのじゃ。兄様もそうであろう？」

グレイスがうっとりしたまなざしで傷無を見た。

「ああ。まったくだ。特にほら、ちょっと舐めると先っぽがすぐに大きくなってくるのが、楽しいよな」

「うむ。まったくの同感じゃ。兄様とは気が合うの」

愛音の胸を挟んで会話をするという、冷静に考えると良く分からない状況だ。しかし、傷無とグレイスが、愛音の胸を論じることで通じ合っていることは事実だった。

その間、愛音は恥ずかしさのあまり、顔を真っ赤にして結んだ口を波打たせていた。

「しかし兄様。姉様の乳首を一番大きく出来るのは妾じゃ」

「それは聞き捨てならないな。俺の方が上手く立たせることが出来ると思うが」

「ならば勝負じゃ」

「よし、望むところだ」

「あ……あなたたち……」

愛音の我慢が限界を突破した。

「バカ？　バカなの!?　何なのよ、その勝負は！　ありえないで——あはあぁん♥」

愛音の怒りを無視し、二人は胸にしゃぶり付いた。

「は、話を……き、いやああんっ、そ、そんなに強く吸わないで、やああん」

二人は競い合うように、愛音の胸に刺激を与えた。傷無は胸を吸いながら、左手でグレイスが姉の乳首をしゃぶる姿を撮影した。

「も、もうっ！」

愛音は対抗するように、傷無の体に手を伸ばすと、下着の中へもぐり込ませた。
「うっ！　愛音っ」
「な、なによ。傷無だって、こ、こんなに……おっきくしてるくせに！」
愛音は傷無のものを握ると、恥ずかしさのあまり目を回しながらも上下に動かした。その動きは、優しく、いたわるような動きだった。
傷無は大いに葛藤していた。
これは撮影すべきなのか!?　正直、自分を映すのは恥ずかしい。やはり人を撮るのと、自分を撮るのとでは話が違う。だが、今回の目的を考えれば、自分だけ映さない等ということが許されるだろうか？
「いや！　許されるはずがねえ！」
「き、傷無？」
急に叫んだ傷無に、愛音が驚きの表情を見せる。しかし傷無は自ら下着を下ろすと、カメラを向けた。
「えっ！　ど、どうしたの？」
「構わない。好きにしてくれ愛音」
愛音は頭から湯気を上げ、しどろもどろに答えた。
「すっ、好きって！　べ、別に好きとかじゃなくて、ただの対抗意識でっ！」
しかし傷無はまっすぐに愛音を見つめている。
——えっと……つまり、さわって欲しいってこと？
愛音は泣きそうになりながらも、再び傷無のものを握った。
「ううっ……こんなの……自分がされているところを撮られているよりも恥ずかしい……」
愛音の手は柔らかくて、とても気持ちよかった。
「ふふん、どうやら妾の勝ちのようじゃな」
その間にグレイスは念入りに胸を愛撫し、立派に乳首を育て上げていた。
「う……確かに、見事だ」
これ以上はないというほど、ぴんっと立ち、グレイスの唾液で濡れて光っている姿は美しくもあった。
「うえぇん……もう、こんなのいやあ……」

泣き言を言いながらも、愛音の体はしっかりと感じている。特に傷無に刺激を与えていることが、愛音の興奮を大きく煽っていた。
傷無も愛音に愛撫されているだけでは、連結改装どころか接続改装にも辿り着けないことは分かっていた。しかしカメラを構えた状態では、思うように動けない。しばらく考えて、傷無は空いている右手で愛音の背中を愛撫した。
「あ……はあぁぁぁん」
背筋を撫でられ、愛音が思わず甘い声を漏らす。傷無はそのまま背中を撫でさすりながら、徐々に下に進んでゆく。そして腰から、大きく盛り上がったお尻へと到達すると、念入りに揉み始めた。そして割れ目に手を割り込ませる。
「きゃんっ！　だ、だめっそこ」
逃げるように膝立ちになった。そこにすかさず手を割り込ませる。お尻の方から、愛音の一番大切なところにふれた。そこは熱く、湯気が出そうなほど潤っていた。
「愛音……凄い濡れかただな」
「う……そんなことないっ、くっ！　ああん」
傷無が指を動かす度に、水音が響く。その音が愛音の羞恥を否応なしに盛り上げた。
だが愛音も快感をごまかすように、傷無のものを握る指に力を入れた。そして、さっきの何倍もの快感を、叩き付けるように傷無に送り込んだ。
傷無は愛音と自分と、交互にカメラを向けた。
「兄様、妾が援護しようぞ」
グレイスが愛音の乳首をしゃぶりながら、股の間にも指を伸ばした。愛音の一番敏感な部分を指でつまみ上げた。
その瞬間、愛音の意識が白く飛んだ。
「♥!?……やあああああああああああっ！」
愛音の体が大きく跳ね、びくんっと痙攣を繰り返す。大きく開かれた瞳には魔力の光が泳ぎ、全身から輝く光があふれ出た。
その瞬間、傷無の体からもピンク色の光が宙に舞った。そして同時に、愛音にいざなわれた快感のほとばしりを

愛音の手の中に放った。

愛音は力が抜けたように、前に倒れる。倒れた後も痙攣を繰り返し、その度にお尻がふるふると揺れた。

「これで……連結改装とやらは、終わりなのか？」

「勝負はここからだ。世界を救うため、三人一緒に、一気に頂点まで駆け上がる」

「ところで兄様。続きをするとして……先程から気になっている点があるのじゃが」

グレイスは怪訝な顔で傷無を見つめていた。

「どうかしたのか？」

「いや、兄様には妙な物が付いておるなと思ったのじゃ」

凝視していたのは、傷無の股間だった。

「えっ!? ああ、まあ……確かに見たことはないか」

物珍しそうに、そして臆することなくグレイスは顔を近付けた。その様子を、傷無は腕を垂らして横から撮影した。

「なんと……奇妙な。しかし、不思議と……胸が高鳴るの」

グレイスはごくりと喉を鳴らした。

「ん……」

接続改装の催淫状態に入った愛音が、体を起こす。頬を上気させ、淫らに輝く瞳で傷無のものをじっと見つめた。それが傷無自身の液で汚れているのに気付くと、四つん這いで傷無に這い寄ってゆく。

「傷無……ごめんね。いま、きれいにするから……」

グレイスと顔を並べると、愛音はとろんとした瞳をいやらしく輝かせた。舌を伸ばし、傷無のものをぺろりと舐め上げる。

「うっ」

ただでさえ敏感になっている状態だ。傷無は思わず声を漏らした。

愛音は一心に、傷無のものに付着した液体を舐め取ってゆく。そして唇を開くと、その尖端を口に含んだ。その様を、傷無は快感に耐えながらカメラで撮影した。

「ね、姉様。それは、そのようにするものなのか？」

愛音はくわえたまま、こくりとうなずいた。

「そ、そうか……妾も、やってみたいのじゃが」

愛音は、ちゅぽんという音を立てて口を離すと、グレイスに場所を明け渡した。グレイスは恐る恐る舌を伸ばすと、大きく膨らんだ先にふれた。そして、ゆっくりと舐めまわしてゆく。

「どう？　グレイス」

「不思議な味じゃ。それに、ドキドキするような、落ち着くような不思議な気分じゃ」

再び愛音が口に含む。そして美味しそうに、すすり上げた。

そして愛音が口を離すと、グレイスがしゃぶり始める。パトランティス皇帝姉妹が仲良く自分のものをしゃぶる姿を、傷無は自分の視点で撮影した。

愛音とグレイスは、時折くわえたまま傷無を見上げる。そうすると自然とカメラ目線になる。それは背筋が震えるほど煽情的な眺めだ。傷無が満足していると確認すると、愛音は安心して再びしゃぶることに集中した。

傷無がカメラで撮影している映像は、全て創世の御柱の残骸に投影されている。映像粒子を吸収した残骸は、ほのかな光を放ち始めていた。そしてその輝きは、儀式の映像を見た者の網膜から体の中へ入り、意識を催淫状態へと変えてゆく。

間近でそれを見上げている怜悧とケイ、そしてランドレッドは真っ先にその影響を受けた。

「総司令様……さあ、我々も共に協力致しましょう」

ランドレッドは妖艶な微笑みを浮かべ、怜悧の体を抱きしめた。四つの大きな胸は、ふにゃっと形を変えながら二人の体を吸い付けるように密着する。

「ちょ……待って下さい、女王……ん？」

「れーり……安産型……すごい、さわりごこち……」

背後からケイが抱きつき、小さな手で怜悧のお尻を撫で回していた。

「お、おい、ケイ！　お前まで……んっ、はあっ♥」

怜悧の体の奥から、たちまち甘ったるい欲望がわき上がってくる。それは愛撫するランドレッドとケイの指先が巧みなだけではない。

「く……これが、この儀式の影響……か、はあんっ！　ま、まてっ、あぁっ！」

創世の御柱の残骸が発生する輝きは、怜悧の抵抗をあっけなくねじ伏せた。自分の意志では快感には勝つことが出来ず、怜悧たちは共に快楽の渦へと飲まれていった。

傷無たちと同じテント内の姫川たちは、より強くその影響を受けていた。

「ああ……傷無くんったら、あんな破廉恥なことを……んうあっ！　っはあぁん！」

テント内に映し出された映像に、姫川は目を潤ませた。

「本当ね。妬けちゃうわ、もう」

ユリシアは姫川と正面から抱き合うようにして、激しくお尻を揉みしだいた。

「はうっ、ユ、ユリシアさん、私のお尻に八つ当たりしないでくださいぃ」

「ハユルだって、さっきから……んうっ、わたくしのおっぱいを、揉んでるじゃない」

「だって……だって、これ。こんなの気持ちよすぎます。ずるいです、こんなもので傷無くんを誘惑してただなんて……」

姫川はユリシアの胸から手を離すことが出来なかった。自分とは違う圧倒的な大きさの胸が生み出す感触を、飽きる事なく愉しんでいた。

二人の向こうでは、シルヴィアの小さな体にクラスの女子五、六人が取り付いて、思い思いに愛撫を繰り返し、その体を丹念に舐めまわしていた。

「シルヴィアちゃん、可愛いわ……」

「それに、体中が甘い……お菓子みたい」

シルヴィアは幾つもの手が生み出す快楽に、体をのたうち回らせた。

「ふにゃあっ！　駄目デス。みなさん、そんなことを……はあぁぁんっ♥」

シルヴィアの瞳に、宙に浮かんでいる映像が映った。創世の御柱に映し出された、傷無たちの姿だ。その映像は淫楽の光となり、シルヴィアの幼い瞳に射し込んだ。

「隊長……シルヴィアも……がんばりますデス♥」

見る者を催淫状態へと導く映像は、ゼルティス市内の全ての映像端末に送られていた。

その映像を見た者たち全てが、その可憐で淫靡な姿に心を奪われた。

その中には、親衛隊一番隊の隊長であるハーキュラスと二番隊隊長のメルクリアもいた。二人は、王城にあるハーキュラスの部屋で、一緒に儀式の映像を見つめていた。

「ねえ、あれってアイネス様とグレイス様よね……」
「ああ……お二人とも、凄く、きれいで……いやらしい」
その映像を見ていると、二人の胸の奥が熱くなってきた。そして、今まで隠していた気持ちが急激にあふれてくる。
メルクリアがハーキュラスの肩を抱き寄せた。
「え……メルクリア？」
ハーキュラスは戸惑いながらも、逆らわずにメルクリアの腕の中に抱きしめられる。
「ハーキュラス……私は、ずっと前から……お前のことを」
メルクリアがハーキュラスの唇を奪った。そして柔らかな胸を揉みしだく。ハーキュラスはわずかな抵抗を示したが、すぐに瞳を潤ませてメルクリアにその体を委ねた。
二人の体から、キラキラと光る魔力の粒子が生み出されてゆく。星の光のような輝きが夜空を渡り、創世の御柱へと吸い込まれてゆく。
同じような魔力の光が、ゼルティスの至る所から立ちのぼっている。愛の行為による光は徐々に数を増やし、創世の御柱の残骸の上に集まっていった。
残骸に映し出された傷無と愛音、グレイスが全市民の先頭に立ち、快感の山を駆け上がってゆく。ゼルティス市民は、いざなわれ、煽られるようにして三人の後をついて行く。そして傷無は、そろそろ快感の頂点が近いことを察していた。
「ねぇ、傷無♥」
「兄様♥」
愛音とグレイスの姉妹が、絨毯に伏せてお尻を高く持ち上げている。バトランティス皇帝の姉妹が傷無に向かって、物欲しそうにお尻を振っていた。むっちりした愛音のお尻と、それよりは小ぶりなグレイスのお尻。どちらもつるりとして染み一つない、美しくも可愛らしいお尻だった。その奥にある二人の最も大事な場所。二人は手を後ろに回し、露に濡れたそのピンク色の花びらを開いて見せた。そして傷無の方を振り向き、切なく訴えるような視線で見つめている。
「傷無……お願い」

そこは物欲しげに熱い蜜をあふれさせ、絨毯に滴り落ちて銀色の糸を引いた。傷無はカメラを絨毯の上に置き、フレームに二人が収まるのを確認すると、熱く潤った二人の割れ目に手を伸ばした。
「ひっ！　ああああんっ、ふああゃあああああああああ！」
火傷しそうな熱い蜜壷に指を突っ込む。その瞬間に二人が背中をしならせ、大きな嬌声を上げた。傷無は蜜壷の中をかき混ぜるように、二人の体の中で指をうごめかせる。
「ああっ！　ひゃう！　んんっ、あっ、ああっ！」
二人の艶のある声が絡み合う。あえぐ声が合唱するように響いた。二人の柔肉が傷無の指をぎゅっと締め付ける。二つのお尻が痙攣するように震えた。
このまま二人を絶頂させても、連結改装にはならない。傷無は指をそっと引き抜く。二人は、何でやめちゃうの？と言いたげに不安げな顔を傷無に向けた。
「愛音、グレイス。そこに横になってくれ」
二人は素直に従い、絨毯の上に横になった。そして傷無の指示に従って、足を絡めて、お互いの大事な部分をこすりつけ合わせる。
「あ……ん」
それだけで二人は感じてしまい、腰が勝手に動いて大事な部分をすり合わせた。その動きをなだめるように、傷無は右手で二人のお尻を撫で、左手でカメラを構える。
「行くぞ、二人とも」
愛音は幸せそうな表情で、淫猥な光を瞳に映した。
「来て……傷無」
グレイスも淫蕩な微笑みで傷無に笑いかける。
「兄様、一緒に……」
傷無はうなずくと、己のものを二人の花びらが合わさった谷間に押し当てた。
「んっ……」
二人は微かなうめきを上げる。
そして傷無は、愛音とグレイスの秘部で作られた割れ目に、押し入った。

「んあああああああああっ♥！」
「はうあああああああんっ♥！」
二人は体をのけぞらせ、大きな嬌声を放つ。
愛音とグレイスのそこは、湯気が出そうなほど熱く潤っていた。突き入れたところから、蜜があふれて滴り落ちた。
二つの柔肉が、傷無のものを両側から咥えるように挟み込む。傷無のものを食べたいと言わんばかりに、ぴったりと吸い付いてきた。その花びらをこすりあげるように、傷無自身を突き入れ、引く。
「んあああああっ！　はんんっ！　きっ、きずな、やっ、だ、だめあああああん！」
「ひゃああっ！　に、にいさまっ、ああっあ、あたまが、どうにかなりそうじゃ」
突き入れる度に、二人の体から湧き出る蜜が傷無を濡らし、熱く蒸れた蜜壺を再現する。それは傷無が体験したことのない、極上の快楽だった。たとえようもなく柔らかく淫らな感触に、傷無は腰が溶けてしまいそうだった。
それはまるで、愛音のなかに挿入しているような感覚だった。そして同時にグレイスのなかにも入れているような、そんな錯覚を覚えた。
愛音とグレイスの姉妹二人のなかを、同時に蹂躙しているような、非現実的なまでの強烈な快感と幸福感。凄まじい快楽が、傷無の脳を焼き切りそうだった。
本能が体を突き動かし、腰を打ち付け、肌と肌がぶつかる音が響く。
「ああっ、ふあっ、きずなっ、きっ、きもち、いいっ……いいいいやあああんっ」
「だっだめっじゃ、わらわっ、はうっ！　あそこが、だめに……あああああああ！」
二人とも、蕩けきった表情で快感に身を任せている。今この瞬間は、世界の運命も、皇帝であることも、全てが吹き飛んでしまっている。あるのは三人の体と、通い合う心、そして共有する感覚のみだ。
三人の体が痙攣を始める。
「もっ、もうだめ……あっ、ああああっ飛んで、しまいそ……あああぁぁあああ！」
「わっ、わらわも、ああんっ、ど、どこかへっ、いって……いっ、いいいあああ！」
傷無も限界だった。最後に残ったわずかな自制心を総動員して、フローティングウインドウを立ち上げ、創世の御柱の状態を確認した。

そこで傷無が見たものは、創世の御柱の周りを取り巻く凄まじいまでの光の渦。それは創世の御柱を中心とした魔力の台風さながらの光景。それらの光のもとは、ゼルティスの至る所から立ち昇る生命の輝きだ。
全市民が力を合わせ魔力を発生させた、その結果だ。
——いける!!
「一緒に行くぞ！　みんなの愛の力、俺たちに分けてくれ!!」
傷無は最後の力を振り絞る。
そして力一杯、腰を打ち付けた。愛音とグレイス、二人の体の奥の奥まで傷無自身が到達した。二人の最奥を押し広げ、我慢と意識と理性の壁を突破した。
その瞬間、三人の体を壮絶なまでの快感が駆け抜ける。
「ふああああ♥あぁぁあああぁぁあああぃいんぅあああぅあんんんんっ♥!!」
「いやあぁんんんぁ♥ぃいいいいんんんんんぁあああああああああ♥!!」

A REC
19m56s

目の前に電流が走り、視界が白く染まる。

凄まじい輝きが、傷無たちから天へと立ち昇った。その輝きは創世の御柱の周りを渦巻いていた魔力と一つになり、全ての魔力の光を創世の御柱へと集束させてゆく。傷無たちから生まれた光が、映像の中の傷無たちに戻ろうとでもしているかのように。

ランドレッドとケイに絡みつかれていた怜悧は、服をはだけさせた状態で輝きを増してゆく創世の御柱を見上げた。

「やったのか……傷無」

時計を見ると、想定した崩壊の時間まであと三分。

——間に合うのか、果たして？

怜悧は創世の御柱の残骸を、息を詰めて見つめた。

「!! 動き出したぞ！」

創世の御柱の瓦礫は光の固まりへと姿を変えてゆく。そして収縮し、力を溜めるように振動を始めた。

「これは……」

「れーり」

ケイが怜悧の隣へやって来て、不安げに袖を摑んだ。

その時、創世の御柱が、突如として爆発的な輝きを放った。限界を突破したかの如く、魔力の光を天空に向かって打ち上げる。

凄まじい速度で駆け上がる光を見上げ、ランドレッドが感嘆の溜息を漏らした。

「素晴らしいですわ……このような奇跡を、生きている間に見られるなんて」

怜悧も、その光の行く手を見上げ、目を細めた。

「奇跡……か」

天に伸びる光の柱は、やがてひび割れた空に到達した。そして、そのまま空全体を力強く押し上げてゆく。その勢いは留まるところを知らず、光の先端も空も、今では遠ざかっているのかどうかも判別出来ないほどの遠くへ行ってしまった。

空へ伸びた光の先で、唐突に大きな爆発が起きた。光の輪が広がり、ひび割れた空が描き換わってゆく。

「星空が……」

怜悧は思わずつぶやいた。

真っ暗な闇の中から、満天の星空が生まれてゆく。その光の輪は、空を渡り、どこまでも広がってゆく。

恐らくは世界の果てまで。

屹立する光の柱が、徐々に暗くなってゆく。その下から現れたのは、石のような素材に文様の描かれた柱。

ランドレッド女王は溜息と共に言った。

「創世の御柱の……復活です」

美しく輝く表面に魔力の輝きが走っている。それは、ついこの間まで立っていた創世の御柱の姿とも違っていた。

その悠然たる姿には、汚れもひび割れもない、恐らくは創建当時の創世の御柱の姿、そのものだった。

◇　◇　◇

美しい夜だった。

星空の海に三日月が船のように浮いている。その星の世界に一筋の光が伸びていた。天上界への架け橋のように、大地から伸びる一筋の光。

それが、創世の御柱の光だ。

黒い柱に魔力の光が輝いている。この柱が復活して、それまでの絶望は一転した。今やバトランティス帝国に限らず、イズガルド、バルディーン、その他の多くの小国が国を挙げてのお祭りムードだった。

ここ帝都ゼルティスもその例に漏れず、創世の御柱の復活から一夜明けた今日から本格的なお祭りが始まった。

市民は全員店に繰り出し、飲めや歌えの大騒ぎ。通りの至る所で即席の宴会が始まっている。空にはひっきりなしに花火が上がり、市民の喜びを代弁していた。その騒ぎは、夜になっても収まる様子がない。

そんな大騒ぎのゼルティスの中でも、一番まぶしく、騒がしい場所があった。

「みんなーまだまだ行くよーっ！　元気は残ってるうーっ!?」

スカーレットの呼びかけに、観客席から轟くような歓声が上がった。広大なアリーナとスタンドが、人で埋め尽くされている。かつて殺し合いが行われていた円形闘技場。ここで、創世の御柱復活の記念イベントが行われていた。

「それじゃ、次はお待ちかねのジョイントコーナーよ！　今回の戦いで、あたしたちと並んで活躍した、このグループっ！」

一斉に花火が上がり、ステージの下から三人の少女が飛び出した。ステージ上高く、まるで空中で踊るように舞い上がった。そして着地。三人でポーズを決める。

「天地穹女神！」

そしてイントロが始まると、コロッセオの熱狂は最高潮に達した。

笑顔のまま、姫川がユリシアとシルヴィアに囁く。

「あの……戦いが終わったのに、なぜ私たちはこんなことをしているのですか？」

「……実は、シルヴィアも疑問に思ってたデス」

三人がステージの袖をちらりと見ると、マリスが満面の笑みでサムズアップをした。

ユリシアは溜息をつくと、あきらめたように言った。

「まあ……お祝いだからね。ここでやめたーって言うのも、無粋ってものよ」

「何だか、抜け出せない気がしてきましたデス」

「はっ！　それよりステージに集中して下さい！　歌い出しですよ！」

天地穹女神の美しい歌声と、キレのあるダンスが始まった。

「シルヴィアちゃーんっ！」

最前列の招待席では、ラグルスがライトを手にして、声援を送っていた。シルヴィアはラグルスに気付くと、ステージ上から手を振って応えた。

広大なアリーナには、花道でつないだステージが幾つもある。天地穹女神は歌いながら、次のステージへと走る。ユリシアはスタンドの最上段の窓に気付くと、指を銃の形にして、狙いを付けた。そして撃ったアクションをすると、その指先から煙でも出ているかのように、ふっと息を吹きかける。

その窓はアタラクシア専用のVIPルームだ。窓際では、怜悧とケイが丁度その様子を眺めていた。ケイは首を傾げると、自分の声で尋ねる。

「ねえ、れーり。ユリシアのあれ、何だったのかな」

「さあな。ただの挨拶だろう」

怜悧は全てから解放されたように、ゼルティスの酒を瓶から直接飲んでは溜息を吐いていた。この部屋には怜悧とケイの二人しかいない。だから二人とも、ナユタラボにいるときのようにくつろいでいた。

「れーり、那由多博士の研究所から、新たなデータが見つかったよ」

怜悧は瓶から口を離した。

「何か新しい情報はあったか？」

ケイは書類の束をめくり、その内容を読み上げた。

「あくまで、那由多博士の残したデータだけど……この世界にも、かつては男性がいたみたい。その時にはバルディーンに残されていたような儀式もやっていて、魔力に困ることもなかったって」

「ほう、それがなぜ女性だけになった？」

「このアトランティスでは魔力の強さが全ての価値観に優先してた。強い魔力を求めるあまり、人々は創世の御柱の力を借りて、生命を生み出すようになった……その結果、女性しか生まれなくなった……って書いてある」

「なぜ男が生まれないのだ？」

「女性の方が魔力が強いから……って」

怜悧は手にした酒をあおると、美味そうに飲み干した。

「成る程な。それでついには男が一人もいなくなった……というわけか」

「しかし、百年、千年と時を経るにつれ、この世界を満たす魔力がどんどん減って……そしてついには、創世の御柱に障害が起きるまでになった」

「しかし、それなら根本的な解決を図らなければ、また同じ事が起きるのではないのか？」

「その心配はないかも。毎日それなりの規模で儀式を行って……あと、戦争の為の戦艦や魔導兵器を山ほど生産しなければ」

怜悧は、また大きな溜息を吐いた。

「れーり、溜息が多い」

「こっちが一段落ついたら、今度はレムリア……地球側に戻って諸々解決しなければならないと考えると気が重い。そっちの方が大変そうだ」

「そうだね……でも、傷無と愛音がいれば、何とかなるかも」

ケイはVIPルームの窓から、向かい側にある皇帝の玉座の間を見つめた。

その玉座の間には、今は愛音と傷無の二人しかいない。

いつも側にいたゼルシオーネは入院中。そのせいもあって、グレイスは多忙を極めていた。さっきまで愛音の側にいたのだが、急用で慌ただしく部屋を出て行った。

「グレイスがいないと静かだな」

「そうね」

愛音は、可笑しそうに笑った。

「でも、これから愛音も忙しくなるな」

「ええ……レムリアとの停戦と平和条約を結ばないと」

——そう。異世界との戦争はもう終わったのだ。

しかし、まだ地球側へこちらの状況を伝えてはいない。もう二度と問題を起こさないように、しっかりと方針を立ててから、会談の機会を持とうというのだ。

「でも、地球側も停戦は望むところだろうしな。何とかなるだろ」

異世界間衝突における戦争も、お互いの理解を超えた現象が生じてしまったため、やむを得ず起きたことだった。

バトランティス帝国が魔導兵器を地球へ探索に出したのも、不自然な行為ではない。人類が惑星探査に、無人機を送るようなものだ。それを撃退しようと先に手を出した地球側も、得体の知れない兵器がやって来れば恐怖を感じるのは当然だ。

ただその結果、魔導兵器の防衛反応により戦火が拡大してしまった。

「色々あったけど、これからは二つの世界が仲良くしていければいいな」

愛音も嬉しそうにうなずく。

「そうね。これから二人で、二つの世界を見守って行ければ……」

「そうだな……きっとそうなるさ」

傷無は愛音の肩を抱いた。愛音は頭を傷無の肩に預ける。

「ねえ……」

愛音は頭を離すと、傷無と向かい合った。そして、うるんだ瞳で傷無を見上げる。
傷無も愛音の瞳を見つめた。
「愛音……」
二人の顔が吸い寄せられるように近付く。
相手の顔が近付くにつれ、自然と目が閉じた。
お互いの心臓の鼓動が聞こえそうだ。
地鳴りのような音が聞こえる。心音かと思ったその音は徐々に大きくなり、やがて体を大きく振動させた。そして巨大な金属をこすりつけるような、重低音の轟き。
「――!?」
二人は目を開けると、辺りの様子を窺った。
「何だ、この音は？」
嫌でも不安を煽るような音だった。こんな音は聞いたことがない。
いや。以前、どこかで聞いたことがある。
そう、誰もが一度は耳にしたことのある音。
――異世界間衝突!?
「まさか！」
傷無は愛音から離れると、窓際まで行って空を見上げた。
そこには、おどろおどろしい雲が渦巻いていた。
「傷無！　外へ出ましょう」
愛音が窓を開け、玉座の間から続くバルコニーへと駆け出した。傷無も慌ててその後を追う。外へ出ると、コロッセオの客席からも大きなどよめきが聞こえてきた。
「あれは……衝突面？」
愛音は空に浮かぶ、光の壁を見つめた。それは見慣れた衝突面よりも、強烈な光を放っている。
「異世界間衝突が起きるっていうのか……何で、今さら……」
「見て！　傷無」

愛音が指さす先に、人影があった。
まばゆい光を放つ衝突面の中に、四つの人影が浮かんでいた。
「あれは……ハート・ハイブリッド・ギア？」
遠くて、はっきりとは分からないが、何か大きな鎧を身につけているように見えた。
傷無が愛音を見ると、何も言わずとも愛音がうなずいた。
「エロス！」
傷無の体に、漆黒のハート・ハイブリッド・ギアが着装される。
「ゼロス！」
そして愛音も、白いハート・ハイブリッド・ギアを身にまとう。二人はコロッセオの空に舞い上がると、新しく出現した衝突面に向かって行った。
『傷無！』
傷無の前に、怜悧の通信ウインドウが開いた。
「姉ちゃん！　一体、何が起きているんだ？」
『まだ何も分からん！　注意を怠るな！』
「了解！」
衝突面までの距離が近付くと、そこから現れたものの姿が明らかになってくる。
全部で四体。
女性の姿に、機械のような手足と翼が付いている。
「やはりハート・ハイブリッド・ギア……いや、というよりは」
傷無の心臓が大きく鳴り響いた。
それは、そっくりだった。
――神となった那由多の姿に。
傷無と愛音は減速すると、空中に留まった。どう対処して良いものか分からない。だが、ただ見ていても始まらない。傷無は思いきって話しかけた。
「あなたたちは、何者だ？」

傷無の呼びかけに、四人が振り向いた。
その瞬間に、傷無は心臓が止まったかと思った。四人に見られただけなのに、
──殺されたかと、思った。
全身から脂汗がどっと噴き出る。
胸の動悸が激しくなって止まらない。
誰なのかと、もう一度問うのが怖くなった。
喉が嗄れ、体が震えて声が出せない。ただただ、目の前の存在に圧倒された。
衝突面の光がまぶしく、逆光で詳しい姿形までは分からない。にもかかわらず、そこにいる、と認識するだけで体が震えてくる。
「成る程な。交わってはならぬものが交わり、我らの想定しない力を呼び起こしたか」
涼やかで美しい響きの声がした。
思わず聞き惚れて、心まで魅了されてしまいそうだった。その声に、もう一つの声が応えた。
「となると、もう用済みですね。この世界は一度無に帰するしかありません」
傷無の中で、焦燥感と恐怖感ばかりが膨れあがってゆく。
となりの愛音を見ると、愛音は顔を蒼白にして、がたがたと震えていた。
──愛音も本能で恐怖を感じている。
しかし、恐怖に怯える愛音を見て、逆に傷無は落ち着きを取り戻した。
自分が愛音を守らなければならない。
傷無は背筋を伸ばし、もう一度尋ねた。
「あなたたちはどこから来たんだ？　どこかの国のハート・ハイブリッド・ギアなら、所属を教えてくれ」
光の中の四人は、そのとき初めて、傷無がコミュニケーション可能な生き物だと気が付いたようだった。
四人の内、一人が前に出た。
そして、その姿の詳細が、初めて明らかになった。
それはハート・ハイブリッド・ギアとも魔導装甲とも違っている。
装甲というには美し過ぎる。美術品というにはあまりに神々しい。

そう、これは神だ。
人の姿を象って現れた神。人類が営々として積み重ねてきた文明の粋を身にまとい、神殿という城を装甲として装って現れた、神だ。
美しい装飾に彩られた、太く長い足。それは神殿を支える柱のようであり、楯でもある。美しい曲線で描かれた強固な腕。それは敵と戦う槍であり、剣である。そして背中には天空を支配する大きな翼。豪華絢爛な装甲は、中心にいる女性が着装しているというよりは、融合しているような一体感がある。
そして巨大な装甲の中央にいる女性は、絶世の美女と呼ぶのが相応しい。那由多のような幼女ではなく、少なくとも傷無と同年代か年上に見えた。
長い金髪と青い瞳を持つ美しい少女だ。少女が着ている服、そして装甲のデザインは、どことなくギリシャの神々を彷彿とさせた。
その少女は、艶のある美しい唇を開いた。
「我々は『機械神』だ」
「……なに？」
──何だ？　デウス・エクス・マーキナーって？
「この世界の実験は失敗に終わった。残念だが消去することになる。君はこの世界で生まれた生物か？　今までご苦労だったな」
光の中にいるもう一人の機械神が、訂正するように言った。
「違いますよ、タナトス。彼の方がもう一つの世界の存在のようです」
金色の眉を寄せ、タナトスと呼ばれたギリシャ風の機械神がつぶやく。
「そうか……彼が元凶か。それにしても、別の世界のコアが共振を起こすとは……このような使い方をされるとは想定外だった」
タナトスは創世の御柱の方に視線を向けた。
「……それに、我々と同じような存在を生み出そうとした記録もある」

傷無の脳裏に、那由多の姿がちらついた。

「自らが神に近付こうとは愚かなことだ……やはりこの世界は失敗だ。消去してもう一度やり直すのが良いだろう」

――何だ、この違和感は。

会話がまったくかみ合わない。そして、勝手に話を進められているような、焦燥感と理不尽さが感じられる。

「傷無……この世界を消去するって……どういう意味なの？」

愛音が不安そうにつぶやいた。

傷無も、自分の体が震えているのを感じている。生身の人間がライオンなどの猛獣を前にしたときの、恐怖や絶望感。何も悪いことをしていないのに、火事や地震で死を迫られているような理不尽さ。

そんな感情と闘い、傷無はさらに質問を返した。

「お前たちは……この世界を消すとでも言うのか？」

「創造主として、失敗作を片付ける責任がある」

傷無の頬に冷や汗が流れる。

創造主。

まさか、

こいつらが母さんの言っていた？

コアや創世の御柱を造った？

傷無は震える声で訊いた。

「ふざけるな！　ここには、この世界に住む大勢の人々がいるんだ！　あんたたちの都合で、簡単に消されてたまるか！」

傷無の中で、何かが切れた。

限界を超えた恐怖を打ち消すように、感情のリミッターがオフになる。

傷無は機械神に向かって、一気に空を駆けた。

迎えるように、タナトスが手の平を前に差し出した。

――っ!!

傷無の本能が危険を知らせた。はじかれるように、その場から飛び退いた。

ほんの一瞬の差で、傷無のいた場所の空間を光の束が通過した。

「な!?」

タナトスの手から放たれた光が一直線に伸びる。その先にはゼルティスの街があった。

――やめろおおおおっ！

声を上げる間もなく、タナトスの輝きがゼルティスの街に着弾した。目を覆わんばかりのまばゆい輝きと共に、凄まじい爆発が起きる。建物を一瞬で粉々に砕き、蒸発させる。炎が空を覆い、衝撃波が地面すらも引きはがし、次々と建物をなぎ倒してゆく。その破壊力は、巨大で堅牢な城壁すらも打ち砕いた。突風が瓦礫を空高く舞い上げ、嵐が吹き荒れた。

核爆弾が爆発したような破壊力。圧倒的な暴力と殺戮の光が、ゼルティスの半分を一撃で消滅させた。

傷無の瞳が驚愕に震えた。

「こん……な」

「いやあああああああああああああああああああああっ！」

愛音の唇から絶叫がほとばしった。

拳を握り、絶叫と共に機械神へと突っ込んでゆく。

「うわああああああああああっ！」

ゼロスの背中にリングが組み立てられる。

「術式解体！」

「愛音っ⁉　く……モード・ゼロス！」

混乱した頭で何とか気を取り戻し、傷無はモード・ゼロスを発動した。そして機械神のいる上空へ向かって飛び上がる。その後を追いかけるように、術式解体の効果範囲が広がってゆく。渦巻く魔法陣が、四体の機械神をあっという間に取り込んだ。

「粉々になれ！」

愛音の赤い瞳とピンクの髪が輝き、術式解体の出力が上がる。

「残念だが、その能力では我々を倒すことは出来ない」

「え……」

愛音の表情が固まった。

「そのコアも我々が作ったものだ」

術式解体の魔法陣が、弾けて消えた。

「そんな⁉」

「うおおおおおお！」

傷無は急降下し、一瞬にしてタナトスの間合いに飛び込んだ。接吻改装を行っていないが、それでも音速の数倍に匹敵するスピードで拳を叩き込んだ。

――⁉

タナトスは片手で傷無の拳を受け止めていた。軽く上げた手は、傷無の渾身の一撃を受けても、一ミリも動くことがなかった。傷無の拳の衝撃など、毛ほどにも感じていない。

「貴様が余計なことをしなければ、世界を消滅させずとも済んだのだがな」

――え？

次の瞬間、全身に凄まじい衝撃を受けた。

気が付くと、体が創世の御柱にめり込んでいた。

――な、何が、起きた？　何をされたんだ？

「くっ……そおっ！」

体を引きはがそうとするが、力が入らない。そして次の瞬間、エロスが砕け散った。

――そんな⁉　ハート・ハイブリッド・ギアが、たった一撃で⁉

「傷無！　しっかりして⁉」

愛音は傷無の体を創世の御柱から、救い出そうとした。腕をつかんで、めり込んだ壁から引きはがす。

「愛音、みんな……こいつらは……ヤバい。早く、逃げろ」

傷無の言葉に、愛音は泣きながら首を振った。傷無の腕を肩にかつぐと、抱きかかえて宙に身を躍らせる。

間一髪で、タナトスの光が創世の御柱を貫いた。

「いやああああああああっ！」

愛音が悲痛な叫び声を上げた。創世の御柱が真っ二つに折れ、ゼルティスの街へ向かって倒れてゆく。崩れながら倒れた柱は、王城を押し潰し、街の通りや街並みを破壊した。折れた柱は崩れ落ちて巨大な粉塵を巻き上げた。

傷無は呆然とその有様を見つめた。

何も出来ない。

何も及ばない。
――これが、神の力なのか。
傷無の意識が、闇の中へ沈んで行く。その中で、タナトスの声が聞こえてきた。
「この世界に永遠を――」
それがアトランティスとレムリア、二つの世界の最後の瞬間だった。

そして、すべては無に帰した。

あとがき

久慈マサムネです！「魔装学園H×H」アニメ化決定です！ ありがとう！ そしてありがとう！ さらにありがとう！ くどいようだがありがとう！
さてアニメ化という祝うべき事態とは裏腹に、原作七巻ではまさかの展開！
（注）この七巻は決して最終巻ではありませんのでご注意のほどを！
一体これ、どうなんの!? とお思いのことでしょう。
しかし！ これからが「魔装学園H×H」の本番と言っても過言ではない。
さらに熱く、さらにエロく、夏に出版予定の第八巻はバカバカしいほどに全力全開でぶっ飛んで行きます！ どこまでやれば気が済むんだ!? とツッコまずにはいられないほどに。それにしても一体、どう続くのか？ その行く末、絶対に見届けてくれ！
それでは謝辞を。Ｈｉｓａｓｉさん！ メカデザインの黒銀さん。スニーカー編集部の担当編集Ｏさん。そして、読者の皆さん。本当にありがとうございます！
次回、「魔装学園H×H」第八巻。お楽しみに！

魔装学園H×H 8
ハイブリッド
ハート
Next Mission!
ちょ、ちょっと傷無！
世界が無くなっちゃったじゃないのよ!!
何とかしなさいよ!!!
お、俺にも何がなんだか……。
ね、姉ちゃん、どうなってんだ!?
うろたえるな！
物語はまだ続くから、
きっと大丈夫だ！
COMING
SOON!!

カバー・口絵・本文イラスト／Hisasi
メカデザイン／黒銀
（7巻：新規メカデザイン／久慈マサムネ）
カバー・口絵・本文デザイン／伸童舎

魔装学園H×H 7【電子特別版】

久慈マサムネ

平成28年2月1日　発行

(C) 2016 Masamune Kuji, Hisasi

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました
角川スニーカー文庫『魔装学園H×H 7』
平成28年2月1日初版発行

発行者　三坂泰二
発　行　株式会社KADOKAWA
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
03 3238-8521（カスタマーサポート）

http://www.kadokawa.co.jp/

久慈マサムネ
イラスト◆Hisasi
メカデザイン◆黒銀
Kuji Masamune
07
魔装学園H×H
ハイブリッド
ハート
Hybrid×Heart
Magias Academy
Ataraxia
角川スニーカー文庫

07
魔装学園H×H
Hybrid×Heart Magias Academy Ataraxia
ハイブリッド
ハート

ゼルティス帝国劇場—控え室—
「一体、どうしたのでしょう?」
「今日の公演は中止ね」

姉妹で連結改装(コネクティブ・ハイブリッド)ON!!
「ま、魔王様。どうぞ好きに飲むのじゃ」
「あたしの、飲んで……」

グレイス
バトランティス帝国皇帝。装甲は殺戮の天使"コロス"
「――こやつ、どれほどの魔力を持っておるのじゃ？」
「グレイス様には失望しました」
那由多
［なゆた］
傷無の母親。神として生まれかわった。

REIRI&KEI

戦略防衛学園アタラクシア 生徒&教員名簿

No.1 KIZUNA HIDA

飛弾傷無 [ひだ・きずな]

特殊能力・接続改装で女の子をパワーアップさせる力を持つ。

No.2 AINE CHIDORIGAFUCHI

千鳥ヶ淵愛音 [ちどりがふち・あいね]

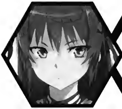
近接戦闘が得意な魔導装甲ゼロスの使い手。
昔の記憶を失っている。

No.3 YURISHIA FARANDOLE

ユリシア・ファランドール

魔導装甲クロスを操る世界的なエース。
遠距離からの攻撃が得意。

No.4 HAYURU HIMEKAWA



姫川ハユル [ひめかわ・はゆる]

ハレンチなことが苦手な女の子。
中近両方の攻撃が可能な魔導装甲ネロスを操る。

No.5 REIRI HIDA

飛弾怜悧 [ひだ・れいり]

厳しくも優しいアタラクシアの総司令官。

No.6 SYLVIA SILKCUT

シルヴィア・シルクカット

アタラクシア中等部に通う女の子。
傷無を隊長と呼んで慕っている。

A
REC
19m56s

魔装学園H×H
8
Next Mission!
ちょ、ちょっと傷無！
世界が無くなっちゃったじゃないのよ!!
何とかしなさいよ!!!
お、俺にも何がなんだか……。
ね、姉ちゃん、どうなってんだ!?
うろたえるな！
物語はまだ続くから、
きっと大丈夫だ！
COMING
SOON!!